庄内

第３号

庄内の昔を語る会

巻頭言

「庄内の昔を語る会」会長　野海正治

芸術の秋九月、東京・国立劇場開場二十五周年記念行事として、「日本の太鼓」が催されました。全国から四組の各地の誇る郷土芸能が披露されたのですが、その一つに庄内の「熊襲踊り（くまそおど）」が選ばれたのです。そして、十四、五日の両日にわたる熱演に、勇壮で素朴、野性的、且つユーモラスな踊りに、満席の観客の喝采を浴び好評のうちに終わりました。

「熊襲踊り」は、私たちの郷土に昔から伝わる伝統的な民俗芸能であり、昭和四十七年に県の無形文化財の指定を受けています。いま保存会長の黒木正さんを中心に十八名の方が、伝統の灯を消すなと、「子供くまそ」を組織するなど先人の遺志を守る努力を続けています。なお庄内には菓子野地区の「今屋の大太鼓踊り（うでこおど）」（保存会長城村次男さん）も市の無形文化財の指定を受けています。

祖先から営々として引き継がれてきた郷土の貴重な芸能を保存し、次の世代へ引き継ぐ無償の義務を黙々と果たしているかげの方々のご苦労にはありがたく感謝のほかありません。

私たちの機関誌「庄内」の刊行も三号となりました。あれこれ試行錯誤を重ねながら、もの言わぬ遺跡を訪ね、古老のかすかな記憶の糸を探りながら新しい発見に喜び、会員ともども郷土の再発見に今後とも努めたいと思います。

前号も、有縁無縁を問わずたくさんの方々からありがたいご批正、ご激励をいただきました。厚く感謝申しあげます。

目次

巻頭言

平成二年度の歩み……昔を語る会書記局……1

特別寄稿

続・庄内物語（二）……瀬戸山計佐儀……4

研究

庄内史跡探訪（その三）……坂元徳郎……10

石碑・石仏・その他（その三）……山元昭平……22

庄内新郷立の事……木幡敏正……27

菓子野町宮島のあゆみ……今村勇……31

石が語るふるさと考……片ノ坂登……34

講演のあらまし

町文化・体育情報

庄内地区公民館の現状について……日高覚助……42

庄内青年団の現状……満永美佐男……43

庄内中・庄内小・菓子野小・乙房小……44

まなびや・いとしご

庄内中・思い出のフェニックス……花盛林……52

庄内小学校「学校建設が復興の第一である」……帖佐トキ……53

心のふるさと菓子野小の思い出……岩佐フヂ……54
乙房小学校の思い出……内山邦雄……56

追　憶

我れ満州に生きて（その三）……黒木　聖……58
続「三十三の足跡」……村井　孝……61

詩・短歌・俳句

地頭・三島通庸……瀬戸山幽畝……64
油照り……巴　旦杏……66
史跡探訪……南崎喜美……66
イチイガシの大木……池田シズ……67
庄内俳句会……69

子や孫に語り伝える話

今平相中について……乙房　黒木重俊……72
坂元源兵衛翁の陶像について……町区　坂元清景……74
庄内観瀾舎の思い出……東区　椋田　泉……77
庄内南州神社……西区　伊地知義夫……79
八十年の歴史を誇る宮島敬老会……宮島　宮島実秋……80
乙房高齢者福祉会館について……乙房　乙丸虎男……81
西諏訪融和クラブの思い出……東区　黒木ツミ……83
農村用「国語教科書」……東京在住　青木キク……85

マルステンとシャグマンケ……川崎　木ノ下　ハッ……87
菓子野ハナヨさんとの昔話……西区　菓子野　美和子……88
私が子供の頃聞いた話（その一）……宮崎在住　長友　壮二……90
庄内小空爆の日……都原　橋口　利光……91
残念至極な思い出（その一）……町区　徳永　幸男……93
敵機に命中す……吉之元　吉田　米夫……94
私の歩んだ道（その一）……平田　和田　盛行……95
チャンピオンになりたくて……乙房　乙丸　幸一……96
遊・遊庄内川……西区　蒲生　宏孝……97
バラすけ……平田　浜田　義武……98
朴……川崎　前畑　文利……99
暮らしの知恵……宮島　川畑　真理……100
読者よりの便り……101
編集後記……103

表紙題字　大河内　浩爾
表紙写真　菓子野小学校の二階から見た高千穂の峯
イラスト　片ノ坂　登

平成二年度の歩み

庄内の昔を語る会書記局

平成二年度総会は平田の野村君雄氏の司会で会員の意見交換等活発に行われ、会の発展に寄与する所が多かったと思います。

本年度の史跡探訪は、庄内の歴史に関連の深い都城地区に着眼し、十月九日、市文化課の御厚意により観光車を借用、終日楽しい有意義な史跡探訪であったことを喜んでいる所です。

講演にお招きしました郷土史家の本村、重永両先生の懇切丁寧な御指導によって研究の視野を開かして頂き会員一同感謝申し上げます。

なお、本会の会誌「庄内」も第三号発刊の運びとなりました。会員各位の関心の高まりもあって、会員外からも多数の原稿が順調に集まりましたことに厚く御礼申述べます。

研究面での取材の豊富さ、内容の深まりに見るべきものが多かったことは研究スタッフの努力の賜と深く感謝するものであります。

年	月	日	曜	諸行事等	内容	出会
2	5	26	土	総会行事 講演会	司会　野村君雄氏 庄内の乱　本村秀雄先生	26
	6	26	月	理事会	庄内史跡探訪計画	9
	7	8	日	庄内史跡探訪	お軍神　丸山古墳	23
		26	木	編集委　理事会 後懇談会	「庄内」編集方針計画 於庄内荘	14
	9	3	月	編集委、理事会	都城史跡探訪計画 会誌原稿集約	7
		25	火	編集委員会	会誌原稿集約　編集	8
	10	2	月	編集委、理事会	会誌編集　史跡探訪計画	7
		9	火	都城史跡探訪	都之城址　寺社跡等	23
	11	1	木	編集委員会	会誌原稿校正	9
		15	木	理事作業	町文化祭準備　展示	6
		16	金	〃	〃	6
		17	土	〃	会誌「庄内」販売	6
		18	日	〃	〃	6
		24	月	講演会	昔を偲ぶ　重永卓爾先生	22
	12	14	金	2号出版反省会	於関之尾荘	12
3	2	25	月	理事会	3月定例会計画	8
	3	23	土	定例会	話題提起者　山元、坂元両氏	22
	4	19	金	公演協賛交渉	社協連　地区公民館へ	4
		20	土	〃	荘内商工会へ	3
		24	水	公演交渉	山之口町役場へ	2
	5	9	木	理事会	総会　会誌3号編集の件	14

特別寄稿

続・庄内物語（二）

瀬戸山　計佐儀

十七、さどます門

宿（私宅）へんの屋敷か、ジョマスともいえばサドマスとも言もしが、昔ゃサドマスち言うおいもしたげな。字は「定益」ち言もすどん、人ん話し聞けば、昔ゃサドガラ（佐土柄）ちゅ草が多して、サドマスち言う如っなったとぎゃろ。ちゅうこっごわしど。サドガラは、イタドリ（虎杖）ちゅう草ぎゃいもしげな。

佐土原ちゅう地名があいもすが、矢っ張い昔ゃ、サドガラん多か所ぎゃったと、ぎゃんそかい。乙房んなアザメ（莇）ちゅう部落もあいもすど。

さどます門ん住人な、皆、苗字は「定益」ち言う字ぎゃいもすどん、宿へんなジョウマスちゆもすが、よそん行たちょい人達ゃ、他人が字を見て、サダマスとしか読んで呉れん、ちゅうて、電話帳にもサダマスち、載っちょいもす。分家筋の人達ごわひが。

宿へんな平民で、明治になって苗字をつくい事ちなった時、屋敷の名を姓にしたちゅうこっございもすが、三軒しか同し姓は名乗れん、ちゅうことで、前原とか、何とか、外ん株を買っ、定益以外の姓の人がおいやいもす。

十八、カザフクレ

さどます門ん内神様は、白馬め騎った霧島様ちゅうこっで、さどます門ん衆は四つ足の物ぬ食へばいかんちゅう事で、私なんかも、食わんおした。

三軒の定益家んうち、宿が本家ぎゃちゅうこっごわすどん、男ん子がおらじ、私の喜次郎爺様が、養子し来もしたげな。こん爺様が未だ来ん前は、四つ物ぬ食てんカザフクレはしもさんぎゃしたげなどん。定益家ん養子し来てから、肉どん食えば、カザフクレで腰から下がブツブツが出来っ、ワシワシ、掻じぃおいもした。

定益家では、一軒に一人らカザフクレ（蕁麻疹）で、肉なんかは、食がないもさんぎゃした。ほっでん、こん頃ら、そげんもあいもさんが、こら、何うしたわけぎゃろかいち、この前も話し方ございもした。

十九、戦場跡

宿ん道向ん地体は四、五反あいもすが、昔の戦場ん跡ちゅうこっで、気が悪りちゅて、こき居いやった黒木フキさんの一家は、五、六十年前い、外け移いやしもした。戦死者が何人か出た様な話ございもすが、庄内の乱の時の話ごあんそかい。

ここん跡を宅建業の者が買っ、近け内ち、九軒の建売住宅が出来もしげな。

二十、工学博士

乙房んな、荊ちゅう所があいもすが、そこん小久保一郎ちゅう人は、工学博士んないやいもした。

頭が良し、泉ケ丘から東大ゆ卒っ、ドイツんも留学して、神戸製鋼ん勤めっ、そこで研究した論文で、博士を取いやった、ちゅうこっございもす。

家庭が貧乏で、五、六人の弟や妹なんどもおったとが、高校んも出がならじ、就職しもしたげなどん、一人ら一郎さんの世話で、大阪かどこかん研究所で米ん研究を続けちょったとが、米離れん時代いなって、一家も離散してしもっ、今は外ん仕事ございもしげな。

お母さんが頭ん良か血統ぢゃいよな話ごわしが、一昨年け死んみゃした。

本人な会社も停年で止めっ、今は大学の講師ぢゃいもしげな。

二十一、荊部落

乙房ん中ん荊ちゅう名も珍しゅがしが、昔、薊（あざみ）でん沢山生えちょった所ごわんそかい。

昔ゃどっちかち言へば、田畑ん多かとこは無して、財産家は居いやらじ、生計ゃ良はあいもさんぢゃしたどん、今は食糧難の時代ぢゃのして、技術の世の中んないもしたから、反って旧ん世帯ん良かったとこよっか、生計ゃ良し、どこん家庭もよか家を建てちょいやいもしど。

二十二、せんかん山

乙房小学校ん前ん岡は、昔ゃ小松ケ丘ち言うむんごあしたどん、今ん衆は皆、せんかん山ち言っ、字は「千神山」ち書っとぢゃろかい、ち言方じゃいもす。

ああ？　佛山ちも言うかい、何でん、千観寺とか千観院とか言っ、お寺ん跡ぢゃろち、ぢゃいもすか。そげんかも知れもさん。

四、五年か前い、センカン山かい、人間の骨が沢山出もした

げな。何でん、庄内の乱の、小松ケ丘ん戦ん時の戦死者ん骨ごわんそかい。

二十三、農学博士

乙房小学校ん前ん細山田さんちゅう人は、何でんもとは幼年学校ん入っ、終戦で宮崎の高農を出っ、どこかん県の農業試験場ん勤務して、後な博士号を貰っ、場長んもないやいもしたげな。

四、五年前い停年で戻っ来て、今ぢゃ民生委員ぬしちょいやいもすど。お父さんな、宮銀の支店か何か、ぢゃいやしたげな。（以上、定益好子さん。三年六月二十四日、午後）

二十四、藁人形

十二年許い前ん話ぢゃいもすどん、入来家五軒の内の次男家ん嫁御ん体が悪し、医者殿に行てん中々さばけじ、占ねをしてもれやしたげなら、昔、ここん屋敷で斬り合いがあっ、生死ぬした人ん骨が埋かっちょっ、そん祟いぢゃから、人形を作っ、夜中け橋ずい行たっ、そんつ川え流げたら、後見らじ戻れ、ちゅうこっで、夜半け入来家五人が集っ、祓れをして貰っ、作った藁ん人形を、内の主人とお父さんと二人、源野橋し行たっ、川え人形を流げっ戻っ来もした。

そげなこっがあってかい、体ん調子はズンズン好ないもした。占ねも良う当いもんで、四百年前ん戦争んこつ、ピチャンピチャン当てやしたがな。宿ん屋敷か、そげなん所ぢゃげなちゅう話ゃ、もとかい聞いちょったし、屋敷きな、墓石らしい、小めとが建っちょっとごわしと。（三月二十六日、午後。今平の入来ワカエさん、六十三歳）

二十五、火の玉

あたしが少め時、人かい聞いた話ごわしどん、源野ん何とかち言所ん嫁御が、子供ぬ二、三人残きっ、け死んもしたげなら、どしたこっか、火玉んなっ、婿どんが苗代田ん行けば、そき付っくいし、蚊帳ん中け入れば、蚊帳ん中け付っ来もしたげな。不思議な事も、あいもんぢゃ、ちゅう事ごあした。（今平の上之原ヨシエさん、七十二歳）

二十六、屋敷を頂戴

宿は昔ゃ山伏で、肉を食えば腹が痛ないとこ、ございもした。四代前ん平助ちゅう人は、朱鞘の刀を下げた、きけた人で、いいかげんな人は、平助ちゅう人が睨んだだけで、馬かいも落

つい、ち言われちょいもしたげな。

もと宮丸屋敷き居っとき、源野ん方ん屋敷く賜いごっ、家老に頼んもしたげなどん、頓着くしてくいやらんぢゃしたげなから、殿様め、直き願げもしたげなら、一気、源野ん屋敷く、賜したげな。

孫が祐吉ちゅう人で、私達が爺様ぢゃしどん、剣道ぢゃ、ここあたいぢゃ一番強い、ちいわれちょいもしたげな。

（平助―幸平衛―祐吉―吉次―正美）

二十七、タッテラ

朝倉家の屋敷か、昔、戦さがあっ、戦死者が出た所で、墓ん小まんかとがあいもすが、触っと病気が悪るなっち、言われちょいもす。

こん屋敷か、殿様が来て狩りをしやい所ぢゃしたげなが、昔の戦争で、人を斬った血のりを、近っの川で洗るもしたげなから、今でん、そこをタッテラ（大刀洗）ち、言もすど。

冷田ちゅう所もあいもすが、そこは刀を冷かした所ぢゃいもすげな。

二十八、源　野

源野ちゅう所は、半分な志比田、半分な今平ん内ごわしな。何で源野ちゅうとか、そら知いもさん。

イマデラ（今平）は、コンピラ（今平）ちも言もす。四国の琴平が祭っちゃっとか、どうかは、知ぃもさん。関屋どんも、都城ん方から移っ来やった士族で、平民が関屋どんの家ん上っと、足の腹が痒い、ちゅうおいもした。あすこん娘御は、高木の黒岡どんに迎われやした。もと収入役の弟御んうっごわしげな。

宿も士族じゃいもんせば、しっかいせんといかんち、心ん支柱んして、やっ来もした。（以上、三月二十六日、午後。源野の朝倉カツさん、六十九歳）

研

究

庄内史跡探訪（その三）

東区　坂元徳郎

はじめに

「庄内の昔を語る会」の会誌「庄内」第三号が発行されました。

野海会長さんを初め臼杵事務局長さんの献身的なご指導の中、みんなで出し合った力の結集です。

庄内を愛する者にとってこんな喜ばしいことはありません。

一人の力はたとえ細やかであっても、又稚拙な文章であっても会員みんなが力を結集すれば、きっと子や孫に喜んでもらえる立派な「庄内」が出来上がることを確信致します。

今日私達は昔に比べたら大変豊かにそして幸せに生きています。それは私達の祖先が長い長い苦難の歴史の中で、私達に肥沃な大地と清らかな水と空気、そして掛け替えの無い貴い文化を残してくれたお蔭だと思います。私達は私達の祖先が残してくれたこの貴い遺産や語り伝えを絶やす事なく子や孫にそして後世に伝える義務があると思います。

このような意味も含めた庄内史跡探訪も既に六回を数えましたが、今までの探訪の殆どは有名な史跡或はある程度顕彰されている史跡で、私達はこれを確認したに過ぎませんでした。

庄内には七〇〇〇年位前の縄文時代後期には既に人が住んでいた事が立証されていますし、又、安永城が築城された時町がつくられたことなども古文書に明らかですので、これから推してもまだまだ埋もれた史跡遺物があるはずです。

日ごろ何気なく見過ごしている路傍の石碑や、庭の隅の石ころが実は庄内の歴史を紐解く貴重な資料であったり、また何気なく話す古老の話しの中に愕然とするような歴史の裏付けがあったりします。

今、地域開発と言う名の元に自然破壊が早い勢いで進んでいます。そして昔を語る人もだんだん少なくなります。なんとか今のうちに庄内の歴史を本にまとめて子や孫に伝えて置きたいものだと思います。

今回は第六回探訪分を簡単にまとめましたが今後はこれを土台として一層の調査探求を続けていきたいと思います。

なお箇所番号は初回からの通し番号です。

三十三、お軍神

庄内で生まれ育った私達、特に庄内小学校で学んだ人達にとって「お軍神」は決して忘れることの出来ない懐かしい場所です。　明治二年三島通庸は上荘内の地頭として庄内に役館を構え新しい庄内の町の建設に取り掛かりますが「敬神の道を以て尊皇の基と為す」という明治新政府の施策を施策として管内の神社を修復したり統合したりしました。

その頃、城山には金石大明神、松尾大明神、諏訪大明神、城の稲荷、阿弥陀堂がありました。（庄内地理志）

この中、金石城址にあった金石大明神は天正七年（一五七九）ここで悲運の自害を遂げた都城第十代領主時久の嫡男、歴戦勇猛な若殿北郷相久の霊をまつった社で天正九年（一五八一）の創建となっています。（庄内由緒記　島津家資料）

三島通庸はこの金石大明神をいわゆる「お軍神」に遷し鹿島神社と改称しました。この時城山にあった他の社はどうなったのか記録がみつかりません。

明治の記録に「鹿島神社　村社ナリ安永町ノ北ニアリ社地八畝九歩武雷命ヲ祭ル旧称金石大明神ト言本社元安永城址ニアリシヲ明治三年庚午今ノ地ニ遷座シテ今名ニ改ム例祭陰暦九月二十五日」とあります。

結局、鹿島神社の御祭神は北郷相久と武雷命（タケミガズチノミコト）ということですが武雷命は古来軍（イクサ）の神様として崇敬されていますし相久も軍神として崇められた人ですのでこの鹿島神社を人は「お軍神さあ」と称したようです。

なお明治三十五年十二月村社鹿島神社は村社諏訪神社に合祀されましたが（諏訪神社記録）私達はこの場所を今でも「お軍神」と称し続けています。

尚、この場所にはお稲荷様がありました。お稲荷様はどこでも見られる神様ですが特に旧島津領ではたくさん見かけます。

これは島津家が代々お家の氏神としてお稲荷様を祀って来たからです。都城の郡元稲荷は島津家初代忠久が建久八年（一一九七）初めてこの地方に入って来たとき創建した神社です。

お軍神のお稲荷様はいつの頃ここに建ったか調べがつきませんが、三島通庸が金石大明神をここに遷した時一緒に遷して別にお稲荷様の社を建てたのかも知れません。明治末期までここにあったことは確かですがいつなくなったか判りません。

小学校の下の通りを軍神馬場、又は稲荷馬場と称しているのはこれに因るものです。

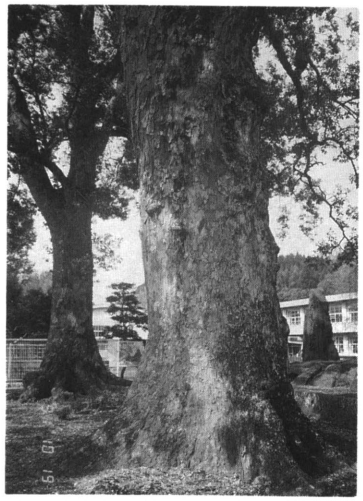
※　さて、この「お軍神」には二本の大きな古木「イチイガシ」が聳えています。樹齢はよく分かりませんが明治大正昭和を生き抜いて来た庄内歴史の生き証人です。近年樹勢がやや衰えて参りましたが庄内の象徴です、何とか長生きしてもらいたいと思います。掲示板の説明文を転記します。

『ふるさとの名木　イチイガシ

イチイガシは建築材として広く利用されています。

関東南部からアジア東南部にかけて広く分布し開花期は四月から五月、熟果期は十月です。

親子孫三代にわたり庄内小学校に通い、このイチイガシの実を拾った共通の思い出をもつ家庭も多く学校のシンボルとなっています。



また庄内の歴史を知るうえでとても貴重な文化財です。

樹高二十六メートル　胸高周囲三、七メートル

根回り六メートル　推定樹齢四〇〇年

都城市教育委員会、

都北植物愛好会、　平成二年三月』

またこの古木の優しい木陰に関之尾の甌穴石で基礎造りされた五基の石碑が建っています。子供の頃の私達と親しく遊んでくれたあの懐かしい石碑です。

この石碑について向かって左から一基ずつみていきたいと思います。

三十四　三島通庸遺徳の碑

この石碑は明治四十二年四月建立されたものです。

現在苔蒸して碑文ははっきり読み取ることが出来ませんが約七〇〇字に上る漢字がびっ

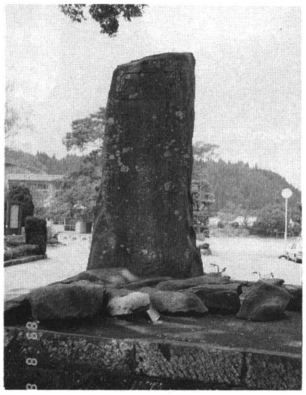
しり刻み込まれています。

勿論三島公の庄内に於ける偉大なる業績を称えたものですが、三島公に直接仕えた東区の坂元源兵衛外の皆さんが語ったことを、源兵衛の長男英俊がまとめて草案を作り、これを庄内の岩満仲太郎大佐が漢文に直し、これを庄内出身の宮越正良警視が墨書され、そしてこれを関之尾石に刻み込んだものです。なお、題字「遺徳の碑」のてん字は明治の大政治家で鹿児島出身の松方正義公の書かれたものです。

またこれを建立する時の石工は外山伝作という人です。

遺徳の碑

明治二年春三嶋通庸公爲我鹿
兒島藩都城地頭公之赴任也巡
視部内先分管區爲三上下庄内
及三股是也公自居于上庄内上
庄内則舊稱安永村今則曰庄内
村其地邊僻居民鮮少焉公芟荊



棘拓田野修道路設市街以招農商又築邸宅移士族於是附近之士民
欣喜子來荒蕪之地忽變爲一市曾矣公乃設桑茶之苑令商估治之與
田野於農民以爲恒産與士族以土地邸宅及俸祿兵制採屯田之法以
士族編軍隊新修神社立學校令四民修敬神報國之德於是治具盡備
教育經濟交通之用亦盡至矣追回公之治績規模宏大企業堅確有可
永爲後世之模範者矣公以敬神之道爲尊皇之基先修村内之神社石
峯丘上新築神社奉祀豐受太神稱之母智丘神社令民知農爲國本詣
社之沿道植茶桑欝々蒼々亘數里今日村中所以至蠶茶之盛大者實
啓端於茲聘藩士三原宗五託之以子弟之教育兒童雲集今日育英之
基亦存于茲及村内治具漸備先築安永川之堤防以防多年流水之氾
濫鑑交通之要以上庄内爲中樞分出數條之道路一則至下庄内者下
庄内則今之都城町也一則至志和池者一則至野々美谷者此三者成
矣更欲修經山田至小林者及其事未成公則去矣公以明治二年至以
四年去雖其間不出三年其治績之大德澤之高令居民不能忘者因公
敬神尊皇愛民之至誠嗚呼公去而三十有五年雖其人已亡其遺烈永
存于後石峯之丘仰之彌高安永川之流臨之彌清田園愈開人烟愈加
人材益進民業益盛頃者村民相謀欲建石以表公遺德敘其梗概如此

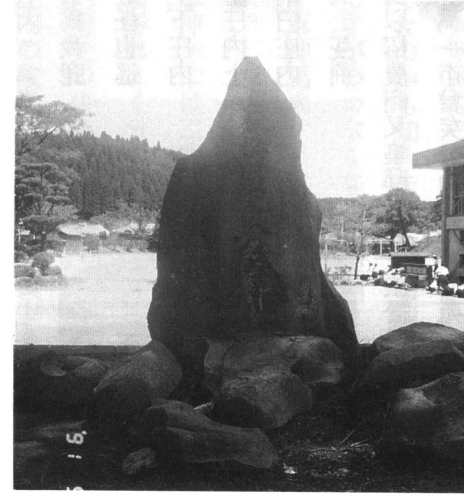
明治四十一年四月

陸軍歩兵大佐
從五位勲三等
功三級岩満仲太郎選
警視從六位
勲五等宮越正良謹書

三十五、征清記念の碑

日清戦争の記念碑です。

参考のために日清戦争（明治二十七年～二十八年）の概要を文献から抽出しておきます。



※『当時清国は朝鮮を自国の属領として自認し関係を保持していたが、日本は日本の国益上これを打破し政治的主導権を握るべく策動していた。

時に朝鮮において東学党の排日、排欧運動が起こり、これが大暴動に発展した。

朝鮮はこの鎮圧の為清国に応援を求めたので朝鮮には清国軍が進駐した。これを契機に日本は居留民保護の名目で出兵し、清国に対し宣戦布告を行った。

我が国は陸海軍とも連戦連勝一方的な戦いの中で清国領まで進出した。

明治二十八年清国が降参、下関で講和条約が結ばれた。

これにより、清国は韓国の独立を承認し、我が国に遼東半島、台湾、膨湖島を割譲し、沖縄の領土権の放棄、償金二億テールを支払った。

ただしその直後我が国はドイツ、フランス、ロシアの三国から強く干渉を受けて遼東半島を返還することになった。』

この戦争にわが庄内からも八十八名の人が出征しておられます。お軍神の記念碑にはこれらの人々の名前が刻んでありますが風化がひどく判読不能のものも多数あります。

原文をどなたかお持ちでないでしょうか。

それでは、碑文を転写します。

※判読不能の字は◇

正面　征清記念碑

右側　陸軍下士

加塩　保
東野　貢
山元　誠助
福留　祐吉
渡辺　乙五郎

陸軍庸

坂元　英俊

海軍下士

壱岐　作一郎

裏面　陸軍兵卒

和田　十太
徳◇　甚助
清水　半兵衛
長友　◇右衛門
宮島　善◇
村永　藤十郎
永井　善之助
福永　小八
池田　新助

戸羽光行　花房傳吉
左側　陸軍兵卒
松村善明　松◇◇右衛門
入来虎吉　宝満小市
満木和助　◇原◇助
益田紋四郎　和田直右衛門
太田藤之助　栗山◇太郎
高橋次右衛門　山口徳右衛門
有田新助　川畑善盛
戸羽光行　◇石藤太
福留藤七　瀬尾仲助
宮島半兵衛　松元武司
福野岩次郎　花吉長蔵
江藤良助　小野田直彦
新地直蔵　長友◇◇
横山傳助　平島参助
浦生◇之進　細山田◇◇
前田藤吉　丸田◇◇
山下龍平
石工　外山傳作　軍夫
十七名判読出来ず
以下十名判読出来ず
明治二十九年七月　建之
庄内村中

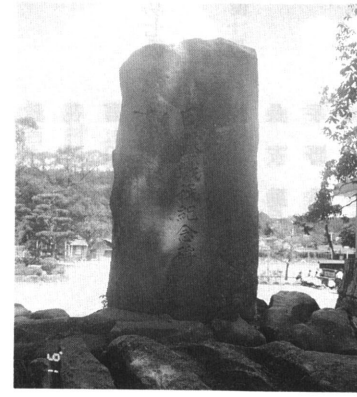
三十六、日露戦役記念碑

左から三番目の大きな石碑です。前面に「日露戦役記念碑」と大書されているだけで他に刻字はありません。

まず日露戦争の概要について文献から抽出しておきます。

※『明治三十七年～三十八年に行われた日本とロシアとの戦争。満州の支配権を巡って両国が衝突したもので元々日清戦争の反動として起こったもの。当時ロシアは南進政策を強力に推し進めており旅順、大連を清国から租借し、朝鮮に捕鯨基地や極東艦隊の給油地を作りその地歩を固めつつあった。我が国はこれに対し懸命に抵抗し、色々の和平案を提案したが成立せずついに三十七年二月宣戦を布告した。

日本陸軍は苦戦しながらも旅順、奉天で勝利を収め、海軍は黄海、日本海等で勝利したが明治三十八年九月アメリカ大統領の調停で休戦、ポーツマスで講和条約を結んだ。この結果、我が国は韓国の支配権を獲得、関東州の租借、南満州鉄道、樺太南半分の割譲取得、ロシア沿岸の漁業権獲得等が認



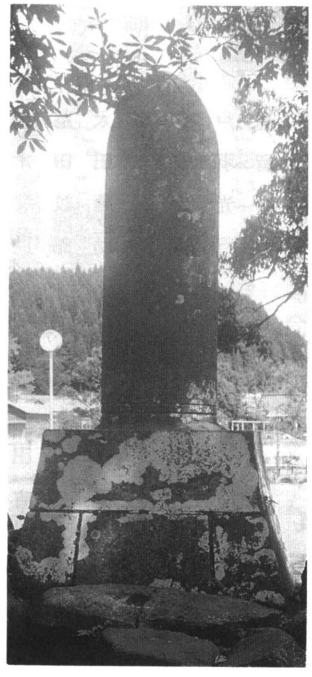
められた。この戦争により我が国の資本主義、軍国主義は飛躍的発展を見ることになる。』

わが庄内からも多くの人が従軍しましたがそれらの人々の名前が右側の砲弾型の記念碑に刻んであります。

日清日露両戦とも相当数の戦死者がありましたが、庄内出身者の戦死者の名前は城山の招魂碑に刻んであります。次の機会に調査したいと思いますがどなたか関係資料をお持ちの方はございませんか。ぜひご提示下さい。

三十七、日露戦争従軍者名（砲弾型記念碑）

百八十九名の名前が刻んであります。



（最上段）

陸軍歩兵大佐　正六位勲◇等功五級　岩満仲太郎
陸軍歩兵大佐　正七位勲五等功五級　小林栄之進
陸軍輜重兵中尉　従七位勲七等　椋田新之丞
騎兵少尉　正八位勲六等　阿久井健彦
三等主計　正八位勲六等　椎屋一彦
歩兵特務曹長　勲六等　瀬尾仲助
〃　勲七等功六級　桑山周吉
〃　功七級　桂木◇清
歩兵曹長　勲七等功七級　東二
〃　丸目清一郎
一等計手　勲七等　阿久井準一
〃　斎藤助作
歩兵軍曹　勲七等功七級　長友栄二
〃　坂元斎
〃　勲七等　東野貢
〃　渡辺乙五郎
〃　斎陽治助
〃　勲六等　城村末吉
騎兵軍曹　勲七等　秋永秀彦
輜重兵軍曹　花房兼◇
歩兵伍長　勲七等　宮田利吉
〃　勲八等功七級　志々目善右衛門
〃　勲八等　森友喜
工兵伍長　勲八等　栗山満喜
輜重兵伍長　勲八等　長友助兵衛
靴工長　宇野常次郎
歩兵上等兵　勲八等　前田藤吉
〃　満永和助

歩兵上等兵　太田藤◇
〃　高橋次右衛門
〃　山口徳太郎
〃　栗山重太郎
〃　時任藤一郎
〃　和田直右衛門　勲八等功七級
〃　高橋文蔵
〃　前田直彦
〃　和田助蔵
〃　坂元英二
〃　財部吉雄
〃　林正太郎
〃　岡元善市

（二段目）

野戦砲兵一等卒　桐原吉次　勲八等
〃　池田斉之進
〃　池田◇◇
〃　外山伝
要塞砲兵一等卒　山口武司　勲八等
〃　江◇良助
〃　福野岩次郎
〃　宮島半兵衛
工兵上等兵　加塩清二　勲八等
看護卒　鮫島新吾　勲八等
歩兵一等卒　◇◇◇衛門　勲八等
〃　宝満小市

歩兵一等卒　徳重甚助　勲八等
〃　清水◇兵衛
〃　木◇与之助
〃　山下種◇
〃　前田助右衛門　勲八等功七級
〃　横山善七
〃　宝満与四郎　勲八等
〃　続山助右衛門
〃　中村岩右衛門
〃　花吉休左衛門
〃　堀ノ内嘉吉
〃　栫善助
〃　来住直七
〃　永井喜之進
〃　梅々谷三左衛門
〃　◇原伊之助
〃　福田小次郎
〃　長友助作
〃　村永藤作
〃　中島末八
〃　和田末八
〃　平山弥八郎
〃　坂元紋次
〃　◇留新九郎
〃　黒松伊太郎
〃　中満盛太郎

歩兵一等卒	竹下正兵衛	
〃	福永小八	
〃	丸目藤一郎	
〃	福留藤七	
〃	横山傳助	
〃	有田傳七	
〃	桐原次兵衛	
〃	釘村熊市	
〃	大久保助太郎	
〃	立野吉太郎	
〃	安藤一二	
騎兵一等卒	遠矢小右衛門	勲八等
〃	宮越誠之助	
〃		
（三段目）		
工兵一等卒	池田新助	勲八等
〃	万代末八	
〃	東清	
〃	迫田新二	
〃	前原与右衛門	
一等縫工	宮島善九郎	勲八等
砲兵輸卒	太田国太郎	勲八等
輜重兵輸卒	村永藤十郎	勲八等
〃	新地直蔵	
〃	高橋真澄	
〃	花吉直吉	
〃	志々目藤一	

輜重兵輸卒	宮島直八	
〃	岩切武彦	
歩兵補充兵一等卒	村永直右衛門	勲八等
〃	西俣傳七	
〃	南崎平吉	
〃	万代正吉	
〃	山元辰巳	
〃	大村◇助	
〃	宮之原　等	
〃	金仲春	
〃	前田休助	
〃	飛松栄	
〃	入来正太郎	
〃	宮島◇吉	
〃	森山九助	
〃	徳留政右衛門	
〃	鎌田源次	
〃	長友末五郎	
〃	外山命吉	
〃	遠矢半右衛門	
〃	竹下武二	
〃	有馬紋四郎	
〃	成尾四郎右衛門	
〃	杉村清蔵	
〃	志々目末八	勲八等
〃	岡元平二	

歩兵補充兵一等卒　池田富次
野戦砲兵補充兵一等卒　宮里八二
輸卒　勲八等　井手上源兵衛
〃　村永元行
〃　畑中政九郎
〃　志々目弥次郎
野戦砲兵補充兵卒　花吉源九郎
輜重兵補充兵輸卒　勲八等　黒川武熊
〃　勲八等　臼杵栄
〃　入来進
〃　長田善之助
〃　原口政彦
〃　池田美作

（四段目）

陸軍輜重兵補充兵輸卒　勲八等　西原助八
〃　阿久井一三
〃　入来正市
〃　蔵満喜左衛門
〃　山元美賀喜
〃　福留◇
〃　中島源◇◇門
〃　阿久井英午
〃　加塩武彦
〃　鵜島蔵市
〃　久保秀明
〃　谷田美種

陸軍輜重兵補充兵輸卒　荒川内繁
〃　来住◇◇◇門
〃　村永吉次郎
〃　佐土平清蔵
〃　石黒源九郎
〃　◇◇重盛
〃　永田孝之丞
〃　西俣彦二
〃　久保秀澄
〃　曽我含
〃　椎屋二彦
〃　皿良東◇
〃　柳田次兵衛
〃　武田勇之助
〃　細山田平
〃　竹下斎熊
〃　福田◇四郎
〃　熊原喜市
〃　◇◇源兵衛
海軍大軍医　正七位勲五等　立野至
〃◇等機関兵曹　従七位勲六等　戸羽光行
〃　功七級　熊原栄太郎
〃一等兵曹　勲七等功七級　平島斎之助
〃　勲七等功七級　平島斎六
〃　勲七等　川畑吉助
〃三等兵曹　勲◇等　大浦六助

海軍三等機関兵曹　勲八等　清水金作
〃　入来厚雄
〃　高橋善蔵
〃　◇◇栄之助
〃一等水兵　勲八等　宮原三平
〃　得能武雄
〃一等木工　勲八等　竹下才蔵
〃一等機関兵　久保秀◇

我山小山雄書

三十八、三原先生顕彰碑

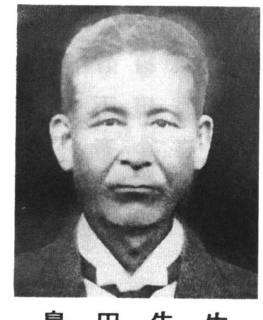
お軍神の一番右側の石碑です。

まず碑文を転記します。

先生姓ハ三原氏叢五ト称ス、鹿児島ノ人、明治三年七月地頭三島公ノ招聘ニ応ジ吾ガ庄内村ニ来リ初メテ学校ヲ興シ親ラ教育ノ任ニアタラル、先生性温恭篤実専ラ人材ヲ長育シ風俗ヲ化改スルヲ以テ畢生ノ努メトナス、是ヲ以テ其ノ学職ニ在ル二十有余年ノ間文教月ニ熙リ弟子日ニ進ミ逸材知名ノ士ノ吾ガ村ニ輩出スルニ至リシ者先生ノ力実ニ居多ナリト謂フベキ也、先生没後茲ニ十三年村民今尚其ノ徳ヲ懐テ衰エズ、是ニ於テ皆相謀リ石ヲ此処ニ建テ以テ記念トナス、時維大正二年十月二十三日

島田丑弥太謹撰

碑文を撰せられた島田丑弥太という人は高知県出身の人で東京で勉学中を見だされ、庄内村から招聘されて明治十五年五月頃庄内に来られた教育者です。庄内小学校で教鞭を執られ明治十八年から二十六年まで八年間は第三代校長として活躍されました。その後村の助役などもされた明治大正の指導者の一人です。東区島田昌一氏の祖父に当たります。



島田先生

さて三原先生の事について、三原先生から直接教えを受けた坂元英俊の口述記録があります。要訳しておきます。

◎　明治の初め、時の地頭三島通庸は庄内に役舘を構えて庄内のまちづくりに着手するが、そのとき教育担当者として鹿児島から三原先生を招聘した。

三原先生

先生は明治三年七月家族と一緒に庄内に来られた。今の小学校の下末原歯医者さんの所に寺子屋式の粗末な学校が出来た。生徒は八才から十五才位までの士族の子供達で、初めは少なかったが後になってからは五、六十人にもなったようだ。学校の授業は朝暗いうちから菜種の油を灯しながらの勉強だった。生徒は自分の机と文庫を持って登校し一人ずつ順番に先生の前に出て本を広げ授業を受けた。順番を早く取るため泊まり込むものもいた。机を挟んで正座された先生は長い鞭を持って一字一字を指しながら読み方を教えられた。最初は大学の素読だった。意味は解らなくても良い、読めさえすれば意味は自然と解るようになると言われた。生徒は先生の後を付けながら読んでいき殆ど暗誦してしまうものだった。午前八時頃素読の時間が終わると先生は朝食に帰られた。昼間は論語の講釈であった。長い時間板の間に正座したままの勉強だった。たまには馬場を歩きながら家の門札の名前の読み方等も教えられた。最初の門下生は清水彦四郎、杉村実徳、前田政右衛門、丸目健蔵、蒲生才蔵、福留弥七、坂元英俊等だった。

明治四年都城県が出来て、色々なことが大きく変わった。明治五年には小学校令が制定され新しい勉強が始まった。都城から先生が二人来られ三原先生は校長になられた。

明治十年、西南戦争が勃発したとき三原先生は庄内村民の懇願を振り切って鹿児島に引き揚げられた。戦争が鎮定して学校が再び始まった。先生もたくさんになり校長には都城から内山先生が来られた。そして、しばらくしてから三原先生はヒョッコリ帰って来られた。困った庄内としては三原先生を粗末にする訳にはいかないので菓子野分教場を作りそこにいて貰うことにした。三原先生は庄内が招聘した先生だからという事で庄内村の予算で一生面倒を見ることになり直接のお世話は今屋地区の人達が見ることになった。先生は菓子野分教場で六十八才で死去された。以上

昭和三十五年は先生没後六十周年に当たり、菓子野小学校校区では長岡重俊、花盛林の両氏が発起人になり「三原叢五先生顕彰会」が設立され先生のご墓所を改修して年々の祭祀を行い先生のご遺徳を忍び偉業を顕彰することになりました。

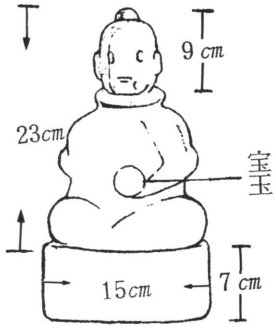
現在先生ご家族の墓所はきちんと整備され立派な顕彰碑が建立されています。

石碑、石仏、その他（その三）

町区　山元昭平

一、マルステン（摩利支天）の事

前記「庄内」第二号記載の北方多聞天について、若松光二様（九三才）からお聞きした中で、多聞天（毘沙門天）は川崎のマルステンと言ふ処に、「マルステン王」として祀ってある筈だと聞かされました。それで暇を見てはあちこちお聞もし、又踏査もして「マルステン」なる処を探していた所、幸にして浜崎義孝様より耳寄なお話を伺う事が出来て、「マルステン」な



摩利支天像

る場所も判明致しました。それは限定された処でなく地区の方々が口にされているのは、此の辺りを「マルステン」と呼んでいるとの事で、いわれははっきり知らないとの事でした。しかし浜崎義孝さんは、その近くに田地を持っていて作業していた頃、そこに石柱らしいものが有った様だと、然し記憶は定かではないとの事でした。そして、現在は何も残存していません。

処が六月の或る日、川崎速男さんにお聞きしました処、福留ハツ様（旧姓木ノ下）が当地の旧家で右の事に詳しいとの事でしたので梅雨時でもありましたが、お伺いし四方山の事等話している裡に、「マルステン」の場所から石柱を運んで来て裏山の氏神の祠の側に祀ってあることを聞き出しました。

昔祖母が生存中は、いつもお盆の時等に連れだって、そこに行き、ナスと米類を供えて祀をしていたとの事でした。その後、一、二回往訪している裡に電話があり、近所の前畑厚様宅に「マルステン」の仏像が祀ってあるとの事でしたので坂元氏と一緒に行き見聞した次第です。そして次の様な事が判明しました。

私の所持している「庄内村縮図写昭和三年」に依ると、庄内橋右岸のタモトより旧道が川沿いに川崎の方へ通っていますがその中間点の処に「王子川原」が在り、そこを「マルステン」

と呼んでいる様です。其処に「王子権現」の祠堂が在ったと語られています。それは前畑厚様（七十三才）宅に行って判った事ですが、確かに木彫の仏像の御本尊が在りました。「摩利支天」の仏像でした。又同じ処に「𑖨南無摩利支天」と刻んだ石柱も建っています。

何故ここに移遷されているのかお聞き致しました処、いつの日か、場所は不明ですが、何処かえ移されていたのでしょうか、たまたま当地に災厄が続いて起こり、そこで村の人々が相談して占をしてみると、御本尊が前の処へかえりたいとのお告げがあり移遷して此処へ帰って来られたとの事でした。察するに当時明治初年廃仏毀釈によって、たびたび移されていたのではとも思われるのです。また石柱については、昭和三十五年頃区画整理事業があった時に現在地に持って来られたらしいです。木ノ下ハツ様の処の石柱もやはりこの時にうつされたのではないかと思われます。彫りが薄くてはっきり読めませんが「奉〇〇〇経全部」と判読出来る程度です。御経を奉ったのではないかと考えさせられます。

そこで考えさせられる事は、四天王、つまり「東方＝持國天、西方＝広目天、南方＝増長天、北方＝多聞天（毘沙門天）」と果たしてこれと関連付けるものがあるのか、どこで結ばれているのかが疑問となるのです。幸に元市役所の職員であった立山健次氏が在職中に調査に来られた様でありこれについて記述されている本が前畑家に在りましたので借記しますと「本座像は「摩利支天」を人の眼にその形として現したものかも知れない。或いは「毘沙門天」のように伴に天部を守護する神でしょうか、左手に宝玉を持ち右手には恐らく剣を立て、持っていたのだと思われ、かつて王子権現社の中に安置されていたのではないかと思われます……。」それ故私なりに仮説をたてて考えてみますと、因にこの「摩利支天」の場所と多聞天の場所を直線で結びますと丁度その中間点に釣鐄院があるのです。多聞天が北方なれば果たして南方の増長天かと、然かれば「摩利支天」との繋がりはと、しかし乍ら多聞天と摩利支天との距離も釣鐄院が等間隔の中心点に在るのです。であれば西方と東方との対角線上の場所は自から判明して来るのではと考えられます。例えば神田より関之尾への途中に在る馬頭観音跡が点線上に浮かんで来、東方は今屋岡元川原周辺に疑点が起こって来るのです。それで七月九日坂元氏と馬頭観音の場所を探訪して見ましたが、話による石柱らしきものは誰かによって持ち去られたものか今は無く、唯盛土の榊の塚が四つあるのみでした。然し東方に当る場所即ち岡元川原周辺を探索している中に、上桑原の元隔離

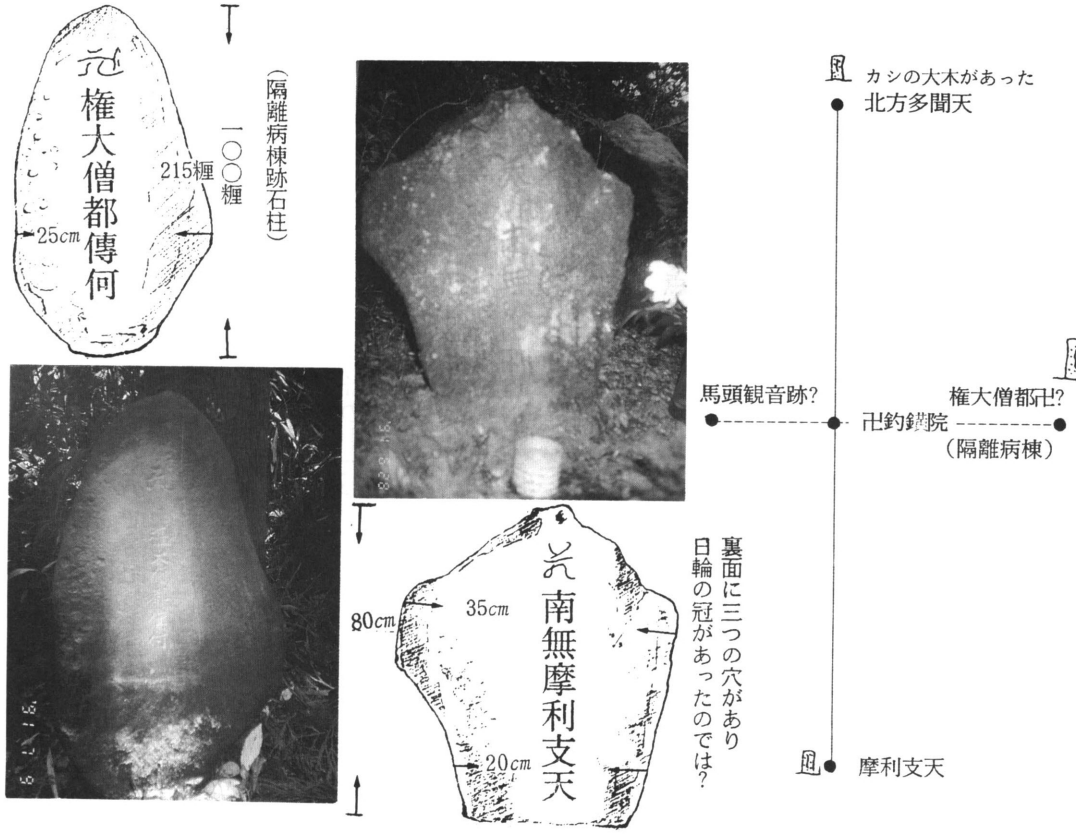
病棟のあった「セキリ小屋」に意を注して調査してみますと、奥まった山林の旧道の竹薮の中に石柱を発見した次第です。「𑖀𑖽権大僧都傳何」と読める彫字が浮かんで来ました。高サ一〇〇糎、巾二五糎、厚み二〇糎の石柱です。とすると此処もその昔表字の如くこの地域の由緒ある寺院があった跡ではないかと推測致し果たして東方の持國天との関連があるのかどうか、四天王との結びつきはどうなのか、疑点は疑点を生んで盲点となり迷路をさまよっている次第です。模索困迷の最中（さなか）に此の様な未巻を載記する事自体が惑いを生ずる起因にならないかと危惧する次第です。

どうぞ心ある人、速やかに幸便を鶴首致して居ります。

祭事　前畑家　毎年十一月八日祀日　供物　赤飯甘酒ソバ

木ノ下家　八月盆　米とナス

註　摩利支天＝常にその形を隠し障難を除き利益を与える天部時に、菩薩と称す、もと陽炎を神格化したもので、日本では武士の守り本尊護神隠神遠行得財勝利などを祈る。二臂あるいわ三面四臂猪に乗る天女像などで表される＝（広辞苑）



二、庄内周辺の石塔について

石塔は石塔婆の略稱で仏教で言われている石造の卒塔婆の事です。これは中國の漢字であり、古代印度のパラモン期に梵書のブラーフマナで、スツーバを中國の漢字にあてはめて卒塔婆と音訳され、仏教や仏像仏典などと共に我が国に伝流し我が国で「ソトバ」と読まれ更に「卒塔婆」と書かれる様になり略化されて塔婆となり、石造化されたものを石塔と言う様になったものです。

石塔はすべて信仰を対象として造立されているものであり、単なる石碑とは本質的に異っているものですから調査の目的を誤らない様に心に銘じておくべきではないでしょうか。古石塔の研究といえば地方史の研究の場合歴史的景観を浮き出させる一素材として取り上げる位でした。ところが近年地方史の研究が盛況になり、古石塔は全国的に歴史資料として再認識される様になり発掘保存への努力がなされる様になりました。そして彫刻文様等に依り「氏」「家」別によるものではないかと云う分野迄開拓されている様です。

先日市の文化課より「語る会」にも話があり、金石城跡の遺跡保存の為の発掘調査が進められていますが、五代持久公が安永城を築かれて以来（応仁二年）相久公金石城自刃に至る迄（天正七年）そしてその後の埋没している古蹟群等が発掘調査を通じて新しい文化遺産の分野が開かれる事を切望している処です。

昨年講師としてお招きした本村先生の講話の中で石塔についてお話があり、安永（庄内）の何処かの居館宅のあった処に石塔を探す事が出来るのではないか、農協裏の釣鐘院の古石塔があり、島津墓地の中に多数の伴姓墓が見出される故現在庄内小学校付近にその居館宅の参考地も考えられようと言われています。（墓は池田宗男氏の調査による）

又西区の公民館横の墓地（寄墓）にも肝付墓が見受けられる様です。

南九州古石塔研究会の「中世期石塔の再診断第一集平安期末期から室町時代まで」の中に、都城市都之城島津の石塔とともに庄内にも三俣兵衛尉兼市の残欠宝塔があると記してありますが三俣兼市については、伴兼貞の長子新太郎兼俊（初代）一一六四年肝付郡九城院の弁済使として九城院に入部して肝付を家号としました。兼市は五代兼右又太郎の次男であり三俣南郷を領し乍らその死去は詳かでないとしてあります。何故庄内に石塔があるのか、今後の研究課題の一つではないかと思っています。その事等もあり探訪していました処、たまたま池田哲也様

宅（池田時計店）にも古石塔があり坂元臼杵両氏と往訪して拝見させてもらいましたが、鎌倉時代の石塔ではないかと思われますので詳しい事は後日専門の方に依頼して調査をお願いしたいと思っているところです。

又隣接の下財部川内に葛原親王の墓と伝えられる五輪の塔があり現在も桂原家が供養を続けておられます。七代相良前頼の納骨五輪の塔と言われて居り、近在各所より見学者も多い様です。これは南九州古石研究会の黒田清光先生の踏査で相良の石塔に間違いない。空、風、火、水、地、輪の五つからなっており、計らずも火輪の辺縁厚味からして応永初年の造立である事が確認されています。

この様に古き安永の地域にも、あらゆる処に遺物が埋没されていたり毀わされて放置されていたりすると思います。又、土地改良、河川改修事業等に依り多くの歴史的資料が取り残されているのではないのかと危惧されるものです。

私達は、郷土の地理歴史をより深く探り、この庄内の地で何が起こり何が成されて現在に至っているのかを考える時、私達の祖先が残してくれた貴い文化遺産が多くある事を銘記し忘れてはならないのではないでしょうか。開発と保存との調和をどの様にして庄内の歴史を後世に伝えて行くか、そして又、今ふるさと創生の立場から、安永城址を中心とした地域活性化が進展していますので、此の機を失する事なく市と地域とが一体となり豊かな自然と古い歴史をもっている庄内を広く顕彰することが私達にとって価値ある事だと思っています。

註　（ブラーフマナ＝梵天　世界の万物を造ったとされる神、
　　（ブラーフマン＝帝釈大と並んで護法の神とされている

下財部川内の相良五輪の塔

池田家の古石塔

庄内新郷立の事

東区　木幡敏正

ここに「庄内由緒記」なる学校教科書大の本があります。お持ちの方もおられると思いますが昭和二十五年、故岩佐彦二先生（東区　岩佐道彦氏の厳父）が書かれたもので庄内町役場が発行したものです。

内容は「庄内由緒記」なる難しい原書があって、それを岩佐先生が現代文に訳して読み易くされたものです。

ここで言う「庄内」とは私達の庄内を含めた都城盆地全体をさすもので、私達が郷土史を勉強する場合の貴重な参考文献であります。都城領主島津家発祥並びに盛衰の事、祭礼の事、安永の由緒、その他高城、山之口、勝岡、梶山、財部等の由緒や野々美谷城、志和池城、梅北城、末吉城、岩川城の事等、また諸神社の由来や諸町の由緒等が書かれています。

先生の緒言を要約しますと「庄内由緒記をひもどいてみると庄内史を知るには得難き良書でこれを現代文に訳して読み易くしたならば後学のため参考になる可きを思いこれを決行した」また「今庄内町に於いて郷土史料収集の計画があり本書を上梓することになったのは筆者の光栄とする所である」とあります。

私達の先輩たちが庄内の郷土史をまとめるために従来から色々努力されておられたことが伺えます。

この「庄内由緒記」の付録として「庄内新郷立の事」があります。

明治二年三島地頭が庄内に来られて庄内の町づくりをされましたが、その時の様子を前田政右衛門翁（東区　前田政則氏の祖父）が「庄内新郷立由緒記」と題して手記を残しておられます。この手記を参考にして、岩佐先生が書かれたものが、この「庄内新郷立の事」です。私達にとって大変身近かな貴重な資料と思いますので転載させて戴きます。

明治維新廃藩置県の際、三島通庸氏庄内の地頭となり、都城に着任された。当時恰も廃藩の際で都城人士は、旧藩主を慕い、地頭政治を歓ばず、或は議論を吹き掛け、或は反抗的気勢を示すので、三島氏は頗る之を歓ばなかった。然るに暴漢があって

暗夜に乗じて、氏の門標を真二つに打割ったので、氏は激怒され急に都城を去り、地頭役所を安永村に移し、安永村を上庄内と改め、都城を下庄内と称する様になった。時は明治二年の春の出来事であった。

一、庄内地頭役所の構成

地頭、三島通庸　　普請奉行、近藤周左衛門、徳田周作

小隊長、福島尚之亟氏で、村内の人にて、新郷立の中心的人物は、亀澤穂登理（秀清氏の祖父）、山下宗助（種一氏の父）、小林利右衛門（幹二郎氏の祖々父）、清水蔵太（清次氏の養祖父）、乙守速比古（善兵衛氏の養父）等であった。

二、事業計画

庄内の地形は南北に一帯の丘陵を廻らし、安永川はその中央を東西に貫通し、北に関ノ尾、麓、今屋、千草、宮島の各部落を控え、南には川崎、平田、乙房、の前衛地を有して、内に千頃の美田を擁し町の背後には、鶴翼城と諏訪の連山ありて、今尚千古の翠を湛え、春花秋葉の美を楽しみ、遠く望めば霧島山の噴煙或は雪景を賞すべく、夏日は高千穂の高嶺颪に勤労の汗を収むべく、真にこれ天恵の農村である。

三島氏は天性頗る企業の才に富んだ人であったが、地頭として足一たび庄内に入るや、天賦の企業熱は白熱化して、遂に移民政策となり、赴任勿々に盛に土木を起し、麓部落を中樞起点として、東西に両翼を展開して、外廓となし、其中央に移民を収容しようとして、先づ第一に町の建設に着手された。

当時は現在の庄内小学校前方より、南一帯には一軒の人家もなく、尚暗い深谷があり、それが都城に通ず唯一の道路であった。現在の庄内農協、倉庫、Aコープ付近は製材所の作業場、観瀾舎、町役場の敷地であった。付近は元島津家の墓地で唐笹藪などうっ蒼として狐狸の巣窟であった。又熊原氏宅の下南一帯は俗に山久院牟田と称して、地盤のない、泥濘地であった。斯の如く狐狸の巣窟も、山久院牟田も変じて庄内町の表玄関となった。

㈠、道路の開通

三島氏の移民政策は道路計画となり、現在でも地域の活性化は道路、交通網の整備が先決とされているが、氏は生づ都城街道の開通を手初めとして、山久院牟田の地固め工事は開始されたが、木材の運搬、石材の投込み、傾斜地の地均し、深谷の埋立等容易の事ではなかった。現在はすべて工事は機械化されているので、今の我々にとっては想像もつかない難工事であったと思う。地頭は常に其雄姿を陣頭に顯はし、幾百の人夫を叱咤激励して、男には算盤形、女には花染の手拭を渡して冠らせ、

土石を運ぶ者、壊す、埋むる者、右往左往怡も千軍万馬の馳驅する情景であった。又時折衆を稿う慰安会があって、四斗樽の鏡を打抜き酒池肉林、太鼓三味線余興手踊等の歓声は大に群衆の活気を添ゆることを得た。氏の人を使役する方策は楽しんで働かせる巧妙の策であったから、人々は未明より薄暮に掛け、倦まず、たゆまず、切々精々と相励むし、流石の難工事も意外に進捗した。之が即ち都城街道の起点となったのである。それより東は志和池、野々美谷に通ずるもの、北山田を経て小林に至る道路も計画された。

㈡、住宅経営

住宅の建築も始まった。近藤奉行は大工木挽を悉く招集して、未明より、書夜兼行建築材料の蒐集、木材の切込を急ぎ、他面屋敷の割当、直に家を建て終ると、最初に商人の移住を進め、日用生活品を供給したので、店頭は千客万来の盛況を呈するに至った。移民には新屋敷に新家屋而も一家の生計を支へ得る田畑を無償交付するという好条件であったので、希望者は鹿児島より、都城より、殺到し、忽ち一軒の空家もない状況であった。移民資格は身許確実で、家族同伴という条件で堅実善良で克く土着の人と和合結集し、協力一致の精神は伝統となり、以て今日の隆運を来したのである。

㈢、教育事業と神道崇敬

斯の如くにして人口は殖えた。三島氏は則ち育英事業に手を伸ばして、現登記所の地に郷校を新築して、明治三年鹿児島より、三原叢五先生を招致して教員とした。当時任意就学時代であったので、資産階級の子弟約三十名の生徒を得た。入学の当初より、大学、論語、孟子等の漢籍を教ゆるのであるから、教ゆる者習う者の苦心惨憺思う可しであるが、三原先生は、丁寧反複淳々と教へて倦まなかった、その効空しからず、門人中有為の人物が飛出した。則ち庄内歴代の村、町長、清水彦四郎（明治二十二年初代村長）杉村實徳（二代目）前田政右衛門（三代目）丸目建藏（四代目）蒲生才藏（五、六代目）福留彌七（七代目）坂元英俊（九、十、十一代目）等各氏は先生の薫陶を受けた人達である。三島氏は又敬神の念厚く、村内神社の修営祭典を行い、更に石峯丘上に神社を新築して豊受大神を祀り、母智丘神社を創建された。

㈣、産業を勧め盛に農耕を奨励し、更に茶園と桑園の栽培に力を用いられたので、村内蚕業、製茶業の盛なるを見るのは三島氏の仁政の賜物と思われる。

三、常備隊

氏は亦郷土の安寧を計り、屯田の制を布き、士族以上を以て

軍隊を編成して常備隊と称した。村内志願兵約四十名であった。福島隊長は之を率いて神田川原に於て盛に練兵をした。

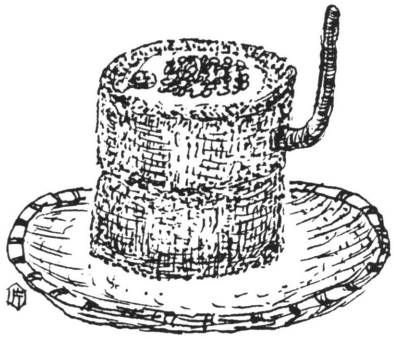
山砲四門を備へ、小銃隊を置いて盛に射撃練習をした。又別に楽隊を置いて、鼓笛喇叭に軍の気勢を挙げたものである。時々吉野調練と称して薩藩内郷兵の機動演習があって、当地常備兵も之に参加したという記録も残っている。

四、町内小字の由来

麓部落は学校下の谷（今は無し）に依て両断せられ南を「二本松」と称し、北を「向ひ馬場」と唱えた。二本松とは西俣氏、七牟禮氏の宅地付近に雲突く計りの巨松が二本あったので其地を二本松と称し、二本松の向いを向い馬場と言ったのである。東区長倉氏の北に菅原道真を祀る堂宇があったので、「天神馬場」といい、「宮路馬場」東に諏訪神社があり、西に妙見神社（今はなし）があり、宮と宮とを通ずる道である。「安永馬場」は元安永村と称した時代、中霧島に通ずる本街道であったのでこの名残りがある。「元町馬場」入来氏の付近に魚類豆腐等を売る商店があったのでその名残がある。「北郷馬場」（今は本郷馬場と書く）新穂氏、村田氏の宅地付近に空き屋敷があったが、ここは旧領主北郷家の遺跡であると伝えて居るので、此名がある。「役場通」元「稲荷馬場」と称し、学校境内イチの木の間に稲荷大明神（兼喜大明神）は元金石城に有ったのを三島地頭がここに移して軍神と崇められたので稲荷馬場又は軍神馬場とも称せられた。「下馬場」は今村とも言い神田とも言う、ここと諏訪とは新移民部落であった。「仮屋の下」今一歩園の後方高台に宏壮な建物があって通称之を仮屋と称した、故に今の小学校付近（元村役場の在所）を仮屋の下と唱えたのである。この仮屋は島津家の別荘で、三島氏の地頭役場も之を使用したと伝えられている。

五、河川の修築

奉行徳田周作氏は、安永川の、流勢を案じて、両側に堤防を構築して、水害を免れしむるの偉業を遂げた。



菓子野町宮島のあゆみ

宮島　今村　勇

本稿は、宮島の先輩萬代辰巳氏（故人）の手記をもとにして不明な点を宮島実秋、橋口隼男両氏に聞き合わせながら、まとめたものであります。

年代、関係した方々、事業内容等に誤りがありましたら、御教示頂くと幸いに存じます。

年代	区長（館長）	主なできごと
安政 4		○中央権現の建立
明治 18		○今屋方限世話人　万代浅市
23		○宮島川原用水砂落、石造に改む
33		○牛馬の疫病流行
34		○中央権現を移転、祭事復活
35		○前田用水路、茶屋原まで通水 ○馬頭観音を中央権現へ合祀

年代	区長（館長）	主なできごと
大正 43	初代 宮島善九郎（明40～大4）	○夜学校設立（指導、石川佐藤先生） ○宮島区敬老会発足、青年会長　内村直左衛門
4		○長岡水路変更工事に着工
5	内村直左衛門（大5・6） 村議　萬代浅吉	○前記、宮原川原用水路竣工 ○菓子野千草牛牧集落と宮島中須集落との境界変更
6		○12月宮島集落に電灯ともる
7	宮島善四郎（大7）	
8	萬代正吉（大8・9）	○夜学校移転　宮島伝四郎氏宅地へ
10	萬代末八（大10）	
13	萬代正吉（大11・12）	○宮島川原耕地整理起工翌年峻工 村議　宮島善九郎　町議　萬代末八
昭和 2	今村磯盛（大13・15）	○同年、町制施行される
4	今堀貞八（昭2・3）	
5	今村磯盛（昭2・3）	
7	宮島進一（昭5・6）	
8	今村磯盛（昭7）	
	宮島進一（昭8）	旧山田線県道鵜之島交叉点より

年代	区長（館長）	主なできごと
9	宮島直武（昭9～11）町議 今村磯盛	千草間の新中央道路開通 県道鵜之島交叉点より野々美谷町崎田間の新中央道路開通
10		夜学校を公会堂へ移転 消防組千草と分離、第十部設立 初代消防組長 万代千代吉
12	内村直征（昭12～15） 宮島進一（昭16・17） 今村義盛（昭18・19）	日支事変勃発、初めて宮島に招集令状、萬代千代吉氏外三名
20	内村直征（昭20）町議 萬代千代吉	◦戦争激化により敬老会中止 ◦九月の台風により公民館、共同作業場、消防結所等多数倒壊
21	今村美種（昭21・22）	◦宮島区一隣保班を三編成にする ◦共同作業場の建設工事
23	萬代辰己（昭23・24）	◦宮島墓地より菓子野間の新道路開通、町議 萬代千代吉
24	町議 萬代千代吉	◦花立原分収林町と契約、植林 ◦公民館、消防詰所の再建 ◦庄内小、菓子野分校新設起工

年代	区長（館長）	主なできごと
25	宮島実秋（昭25・26）	◦中央権現、馬頭観音を公民館敷地内へ合祀、移転 ◦菓子野分校、三月開校（初代PTA会長 万代千代吉）
26		◦中央権現旧敷地跡を処分 ◦古江区有林の立木売却（二月） ◦消防用手押ポンプを原動機付タービンポンプに買替え 消防部長 今村勇
昭和 27	今村義盛（昭27）	
29	前田守（昭和28～30）	◦山田町が県道山田線、谷頭街南より乙房入口まで変更の計画申請の動きあり、反対運動 町議 万代千代吉
32	萬代辰己（昭31～33）	◦農業共済組合新発足 設立委員 萬代辰己 損害評価委員 今村義盛 萬代辰己 ◦宮島造林組合の新設
33		◦消防ポンプ買買えの為、古江区有林売却 ポンプ代金二十八万円
35	今村美種（昭34・35）	◦公民館に井戸、台所新設

年代	区長（館長）	主なできごと
36	原口進（昭36～38）町議　今村武盛	◦農休日を定める（毎月一日） ◦道路拡張、補装工事　一路線 ◦北前地区田畑、区画整理開始　土地改良役員　萬代千代吉
37		◦県道山田線、谷頭南端より乙房入口まで変更工事開始 ◦県道変更工事、宮島集落分完了
38		◦町水道、宮島全域へ配水完了 ◦畜連統合の為、生産者大会　五月八日　於谷頭市場 ◦県道変更の為、鵜之島墓地移転
39	橋口隼男（昭39・40）	◦老人クラブ新発足（十月一日）　会長　今村清二　副会長　宮島進一 ◦農村公衆電話宮島全域へ設置
41	萬代正雄（昭41・42）	◦都城市へ合併、農業委員選出　草子野校区　長岡重利 ◦消防組運営費を寄付制度より、区予算へ繰込む　助成金　五三、五〇〇円
42		◦農協役員改選　監事　今村武盛 ◦水田害虫駆除の為、市より公民館へ動力散布機配布（二台）
昭和42		◦集落道改良工事に市土地買収費を計上　中須坂、宅地坪当り一、〇〇〇円 ◦農事振興会結成
43	今村敏男（昭43・44）	◦敬老会招待者は六五才以上 ◦消防ポンプ運搬用自動車購入の要請あり、区で検討
45	宮島隆盛（昭45・46）	◦道路簡易補装一部完了　中須坂 ◦古屋敷氏宅より宮原川原間の簡易補装、その他一部完了 ◦公民館敷地内へ消防車格納庫を新設移転（共同作業場前より） ◦消防ポンプ運搬自動車受領 ◦道路簡易補装完了　県道十字路より崎田間旧県道全域 ◦公民館歳入、歳出予算化成る

昭和四六年以降は次回に掲載

石が語るふるさと考

東区　片ノ坂　登

庄内の昔を語り昔を偲ぶ一つに安永城がある。この安永城跡は、大淀川支流庄内川（古くは安永川と呼んでいた）の北側の台地に位置し、内城（本丸）・新城・今城・金石城から成っているが、日本の城を代表する大阪城・名古屋城・熊本城等のように石垣をめぐらした強固なものではない。どちらかと言えば石の一つもない地形の利だけを要した城である。どんな構えをしていた城であったのかは、今年の夏から発掘調査が進められている金石城跡を見ればわかるように、ここでは、建物の礎石一つも見ることはできない。この金石城は、天正七年（一五七八）、第十代北郷時久の長子相久（すけひさ）が無実の罪によって憤死した悲話のある城跡であるが、今は土建業用の土砂として削りとられ往時を偲ぶ山容は消えようとしている。

シラスやボラのもろい地層に位置づけられた安永城だけに石積みして堅牢なものにしそうなものであるが、その形跡を見ることはできない。川原の石を利用しているのは、麓の民家にわずかにみられるだけである。石に縁のないところだけに四つの城のうち金石城だけが異った名称だけに城の西を流れている神田川から砂金でもとれていたのかなーと想像してみたが、語り伝えの中に砂金取りのことがあればおもしろいのだがー？

自然石に恵まれていなかった地域だけに、生活と密着した石の利用については、先人たちは苦慮したと考えられる。せいぜい漬物用の重石ぐらいで家建ての礎石探しや墓石探しには苦労があったと想像される。そのような中にあって、現在庄内農協倉庫の東端に放置されている墓石には、「心　天菴自生信女　宝永二酉　卯月十八日　阿久井甚兵衛妻」と刻みこまれている。宝永二年は西暦一七〇五年にあたり、今から三百年前にこの地に住んでおられた方である。この墓石の魂はぬき拂われて放置されているのかも知れないがどこかに安置してあげたいものである。

昭和の時代では、庄内小学校のプールが現在の庄内地区体育館のところにどこよりも早くできたのだが、このプールは子どもたちが庄内川原から小石を運んで造ったものだと聞いている。

このように見聞していくと自然石に恵まれていなかったことは理解できるが、他方切り石を積み上げた石垣・石塀の民家の多いことはこの地方の特色でもある。これらの石垣や石塀は、

いつごろ、どこの石を切り出して、だれが造ったかとなると当時の石工たちの力量を評価せずにはおられない。

明治の石工として、外山伝作・奈良迫伝吉（石黒石材店の初代）黒田甚蔵・徳永長太郎等多くの人々を挙げることができる。

奈良迫伝吉は、明治二年治水工事の石工として鹿児島から三島通庸に連れてこられ、用水路づくりや石の橋づくりにその力量を発揮し、明治の産業おこしに尽した。石材に恵まれない地方だけに石の山探しから手がけたものと察せられる。現在石材を切り出したところが滝の南側にあたる荒谷に見られるが、この石が関之尾の灰石と呼ばれるものである。この灰石は、用水路の石材としてはもろくて、検査にとおらなかったと言われている。しかし、現在の庄内地区の民家にみられる石垣・石塀の石材としては霜ぐえがなくて適していた。石塀に組み込まれている 石をよく見ると軽石がまじったところもあるので、石工たちの間では、「灰石」と呼んでいたのかと考えた。

荒谷の岩石の上層部の上石（うわいし）は、養蚕室の暖房となるいろりのふちに使用したり、桑小屋の石塀にも適していた。それは通気性があるので保温するのに最適でいろいろと活用された。畜舎、堆肥小屋にも大いに利用されたが、堆肥のくさり方が早く、べとつきがなくて保存するのに長所があった。これに比べると近年利用されているセメントブロックやコンクリートを使った畜舎の敷きわらなどはいつまでもべとついてくさり方もおそいと言われている。ほかに石倉の石材としても適していたことはいうまでもない。

上石を切り出していくと、やがて岩山の深層部へと達するが、このへんの切り石は質が固くなって、目も適当に荒いので石臼に適していた。石臼は、粉にする場合石質が固くてもつるつるして使いにくかったが、関之尾の石は目が適当に荒いところが長所となっていかされたといえる。

明治時代の当地方の産業の一つであった養蚕業は、製糸工場まで存在していたことから推察しても盛んであったことは確かで、これを石工の伝吉やその弟子たちが支えていたことは前述したことからも考えられる。

石にまつわる事業として開田事業があるが、明治二十二年坂元源兵衛は、六百ヘクタールの開田計画をたて、関之尾の滝の上流三百五十メートルの左岸（北岸）より取水して二十ヘクタール開田した。事業の途中で前田正名が引継ぎ、明治三十四年完成した。この用水路の開通によって庄内・山田・志和池の三村にわたる二百六十四ヘクタールの開田に成功したが、幹線は十

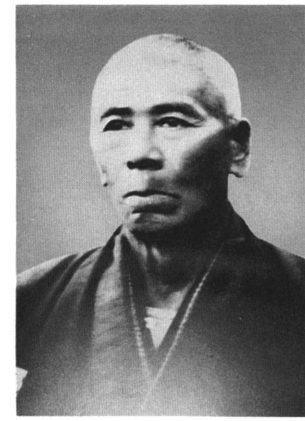
三、五キロメートルにおよび、トンネル十三か所という大工事であった。特にこの用水路は、シラスやボラ地層だけに水もれや土砂崩れを防ぐため、切り石を敷きつめたり、積み上げたり、アーチ型の天井を組みこむにも、ちょっとした手ぬきもゆるされない難工事であったことは十分察することができる。用水路づくりに要した石材の量も大変なもので、どこの石を切り出してどのようにして運んだのか疑問の残るところである。

前述したように関之尾の荒谷の石材は用水路工事にはむかなかったと書いたが、深層部の石は固かったので、ひょっとしたら使用されたのではないかと察してみたが、このことについては今後確かにしていく必要がある。そこで、高崎町轟に住んでおられる外山広行氏（元石工・縄瀬五四五六番地）を尋ねてみたが、用水路の石材としてはむいていなかったという意味のことをきかされた。水に強い石材としては轟付近の両岸に石や川床の石が最適だということがわかっても、どうやって運搬したのかとなると立証するものが少ない。だし車や二つ歯の荷馬車がこまわりがきいて、遠距離を運ぶのにむいていると考えられるが実証するものをもっと追究する必要がある。この外重い石材を運ぶ手段としては、川舟も使われたと、明治の石工外山伝作とつながりのある外山広行氏から聞いた。それは、都城市前田町の江夏氏宅の石垣づくりは、外山乙五郎が築いたが、轟のところから大淀川をさかのぼった川舟は二人の舟頭がこいで、急流は一人が舟から降りて川岸づたいに綱で引きあげながら運んだとのこと。明治の職人たちの仕事にかける意気込みのうかがえる話であるが、前田用水路に要した石材は、かなりな量を必要としただけに、その石材をどこから求め、どのようにして運んできたかについては今後の調査をまたねばならない。

轟の石は、目がつまっており、特に固いところの石は青味がかっており墓石にむいていた。八紘台（平和台）づくりにも大いに利用されたのであるが、轟の観音瀬あたりの両岸や川床をみるとさくり取りした跡を確かめることができる。

先に述べた「灰石」については、石工の間では、関之尾の切石も轟の切石も「灰石」と呼んでいた。灰石とはいっても固い石のことだから切り出すには金矢を使った。金矢の先がつぶれると石工自身で焼きなおしながら使っていた。しかし、焼き入れはむつかしく大きな金矢になると庄内の前田鍛治屋に頼んでいた。

明治の石工徳永長太郎は、安政六年八月十五日　武安周六・そめの三男として鳥取県高草郡槙原村にて出生し、昭和十三年八月二十六日午後九時死去。行年八十歳であった。その妻マン



は、文久元年五月二十五日、倉本福三郎・よりの三女として鳥取県東伯郡東郷村大字別所三十三番屋敷にて出生し、昭和十五年九月二十日死去、行年八十歳であった。

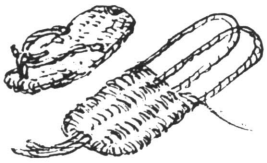
石工武安長太郎は、鳥取県気高郡明治村の徳永常十郎の養子となり、若い頃は中国山地の日本海に面した迫田の田の畦の石積みをしていた。ぐる石をくずれないように積み重ねていくことは容易なわざではなかった。石工としての長太郎は基礎づくりに最も力を注いだので、あとあと崩れ落ちることはなかった。のちに熊本や鹿児島で石工として仕事をしているうちに、東郷平八郎や前田正名にみこまれて、前田用水路づくりによばれた。夫婦揃って庄内に移り住んだのは、明治何年かはっきりしないが、前田正名が用水路工事を引き継いだ明治三十二年ごろと推定される。

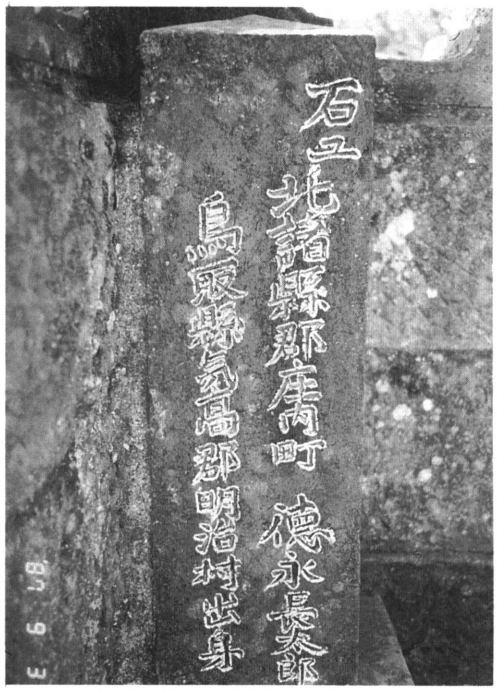
長太郎は、石工として早田泰蔵・坂元進・鶴村登等を育てながら、用水路工事が終ると庄内近郊の石垣・石塀造りにとりかかった。

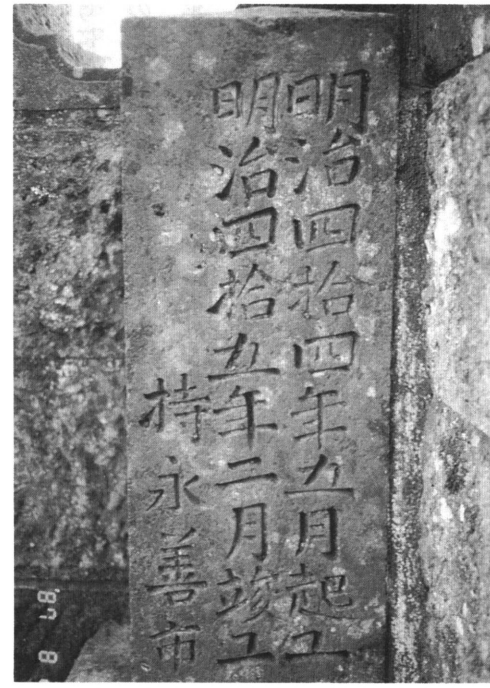
現在の衆議院議員持永和見氏宅・亀沢温氏宅・横市町の水光正氏宅の正門、石垣、石塀この外浄土真宗本願寺派願心寺の山門、鐘楼、本堂、周囲の石垣、南崎洋史氏宅の倉庫等を造っているが、今だにひび一つはいらないがっちりした構えをみせている。持永氏邸の石垣には「明治四拾四年五月起工　明治四拾五年二月竣工　持永善市」の碑文と「石工　北諸県郡庄内町　徳永長太郎　鳥取県気高郡明治村出身」の碑文が刻まれた石碑がある。

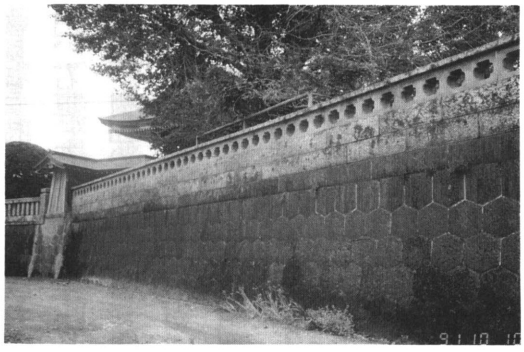
石工たちは、石組みの最初の一分のくるいがあとあと大きなくるいになることを最もおそれた。水平線や垂直線のきめ手となる水糸を大事に取り扱いながら仕事を進めた。また重い石を持ち上げるのに「かくらさん」などを使用した。

石工徳永長太郎は、庄内町徳永商店の徳永幸男氏の祖父にあたる方で、いろいろな話や資料を提供していただきました。誠にありがとうございました。









願　心　寺

持永和見私邸

講演のあらまし

平成二年十一月二十四日　講演　重永卓爾先生

重永先生は鹿児島県の人、現在都城市文化財専門委員として埋蔵文化財調査や歴史史料の調査等に当たっておられます。

近年は都城島津家に伝わる難解な古文書等を収録編纂され「都城島津家史料」として三巻を公刊される等都城文化行政の中枢としてご活躍中であります。

今回は私達の会誌「庄内」に発表された古石塔等を例題として色々ご教導戴きました。

一、文化財として有形、無形、天然記念物について
二、郷土史料として古文書、古記録、金石文、考古学、民族学について
三、水分神について
四、石碑石塔に刻まれた紀年号や干支について
五、古石塔を調査するに当たっての諸注意

等、私共には大変貴重な得難いご講演を戴きました。

平成三年三月二十三日
坂元徳郎、山元昭平両氏を
話題提起者としての座談会

両氏とも、それぞれ創刊号、二号に発表されている研究の過程と、内容の概略を語り、更に今後の研究推進の方途を説く。自分の足で尋ね、自分の耳で実際に学び確認した苦労の数々、貴重な資料収集の姿に改めて敬意の念を深くする。

。山元昭平氏

庄内の石碑、石仏等について

1、石敢当（石当散）、一里塚、水分神、田の神さあのことども。
2、北方多聞天の発見から、帝釈天守護の四天王の存在を探ろうとする。
3、三島通りの復元図の取り組みについて

。坂元徳郎氏

史跡探訪について

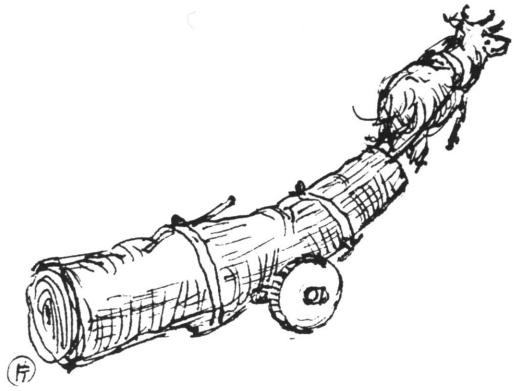
今後の研究推進のための五項目の提案。
1、残された庄内の史跡、伝承の顕彰。

2、石碑、石仏、民具等の所在を明確にする。
3、関連ある他郷の史跡探訪（例えば宮之城など）
4、歴史につながる古い写真の発掘、展示。
5、発表や投稿のしやすい雰囲気をつくる。

話し合いの要点

1、史跡保存の大事さ、城山創生会のこと。
2、川崎に伝わる古寺跡の話。
3、古い写真の収集方法
4、食生活、食文化の変遷と道具の改良を探る。

など活発な意見交換が行われた。



町文化・体育情報

庄内地区公民館活動の現状について

庄内地区公民館主事　日　高　覚　助

庄内地区は、市北西部に位置し、昭和四十年に合併した旧町であります。合併以前より、文教の町として誉れの高かった地区であります。小学校三校、中学校一校を有していますが年々児童数が減少しています。又、市内では最も高齢化の進んだ地区でもあります。当地区公民館は、地区の基幹公民館として昭和四十八年に設置され、鉄筋二階建て、会議室五、調理室一を有しています。職員は館長を中心に、三人で運営を行っています。

当地区の大きな行事として、総合研究会、納涼祭り、地区体育祭り、庄内ふるさと祭り（作品展示会含む）があります。これらの行事については、各自治公民館長（十館）を中心に他の民主団体（婦人会、壮年会、高齢者のクラブ等）と連携を取りながら行事を進めています。平成元年十月に当市は、ウエルネス都市宣言を行いましたが、具体的目標として、「人が元気、まちが元気、自然が元気」を設定致しました。当地区もこれを受けて、地区元気づくり委員会が発足しました。各自治公民館長より推薦された二〇名が、毎月一回、定例会を開き、地域の活性化について話し合っています。さらに議論を深めるために、委員会を小委員会（五名程度で構成）に分け、それぞれのテーマを設け、地域のあり方について話し合っています。今では、地域おこし委員会も発足していたのですが、地域のあり方の話のみで終わってしまったという反省から、話で終わることなく具体化できるものを見極め、実現していくことをモットーに議論を重ね、平成四年三月を目途に地域の将来像を作成するように計画を練っているところです。地区公民館の、主催教室としては、一般向けが、大正琴、カラオケ、舞踊、書道、生花、四半的、高齢者向けとして、民謡、生花と開講しています。夏休みには、子供向けとして、公民館に対する親しみを持ってもらうために、映写会、料理（お菓子作り）等を行っています。インスタント食品の普及により何もかも手短かになっているため、自然の物を見直すということで、「自然を食べよう」というタイトルで年四回、食に対する教室も開講しています。広報活動として、公民館だよりを月一回発行しています。

※次回に今後の問題点を述べます。

庄内青年団の現状

庄内青年団団長　満　永　美佐男

私達、庄内青年団の現在名簿に登録されている団員数は十九名です。そのなかでもほとんどの人は、他の団体やサークルに所属しているので、青年団の行事や活動を行う場合にも、みんな他の用事と重なったりすることが多く、多いときで十二～十三人、普段は七～八人、悪いときには四～五人といった状況ですので、以前やっていた、神社の祭りの御神輿かつぎや、青年団主催の盆踊り大会が、手薄のために休止することになってしまいました。

今私達の青年団では、いつも頭を痛める二つの大きな問題があります。この問題はどこの青年団にも、あてはまることだと思うのですが、一つは前に書いたように団員数の減少です。昨年までは二十四人いたのですが、「もう青年団に入ってる年じゃないからやめる」・「結婚するから（結婚したいから）やめる」という理由で数人が、辞めてしまいました。

もう一つは、青年団の高齢化が進んでいるということです。「なんだ?それは」と思う人が、いらっしゃるはずですが、事実、青年団の高齢化は進んでいるのです。これも、団員減少と関連しているのですが、現在、私達青年団員は、二十三歳～三十二歳までの間で活動していますが、この二～三年新しい団員が入っていないのです。平均年齢が、年々上がっています。

そこで、この二つの問題を解決しようと、スポーツレクリェーションや、ダンスパーティー・いかだ下りを企画して、自分達の友人や、知り合いになんとか青年団を、理解してもらい、できるだけ多くの人に入ってもらいたいと、頑張っているのですが中々入ってくれません。理由は、青年団という名前からダサイ・暗いというイメージがあるからだと思います。いつ頃から、こんなふうに思われるようになったか、わからないのですが、実際に人が入らないのは、やっぱり青年団に魅力が足りないのでしょう。

これからも、今までやってきた伝統を大切に守りながら、もっともっと魅力のある青年団を創っていくよう努力します。

子どもの健やかな成長を願って

庄内中学校　野球部

「庄内、第二号」に、本校陸上競技部（含駅伝部）の活動状況を掲載いただき、改めてその活動ぶりを痛感した。本年も昨年に劣らずの練習に励み、各大会に向け意欲的に取り組み、市中体連で陸上四連勝、県大会出場者18名、九州大会出場者一名の成績をみた。なお、昨年度の駅伝大会は、県大会優勝、九州大会準優勝の快挙であった。今日もグランドで黙々と走りつづけている陸上競技部である。今回は本校の野球に焦点をあててみたい。

もともと庄内はスポーツの盛んな土地柄で、中学校もその例にもれず「体力づくり推進校」の指定も受け、施設の充実に努め、その活動に顕著な功績があったとして、昭和五十四年に文部省の表彰も受けている。

野球部の活躍もこれらを機として燃焼してきたと云えよう。昭和五十五年・昭和五十六年と南九州中学野球で連続優。昭和四十九年・昭和五十六年と市中学体育大会優勝。その間、都城高校・甲子園組に本校出身者をみ、また、プロ野球の益田選手も本校出身者である。

―活躍した選手、その状況を誰かが調査できないものか？

以来、庄内中学野球部強しの声がきかれたが勝利の女神に見放されのか栄光の座から遠くはなれた。しかし、本年は監督コーチ、メンバーに恵まれ、バックアップする支援者との連携のもとに一戦するごとにレベルの向上をみ、大会の度に優勝、まさに伝統の復活である。

その主な成績は

一年生大会　優勝
市中学校体育大会夏季大会　優勝
県中学校体育大会夏季大会　優勝
九州中学体育大会夏季大会　出場
南九州中学校野球大会　優勝

監督の談話

新チーム発足以後は、一年生大会優勝という戦績は光るものがあったが、あまりパッとした実績は残せなかった。それが、甲斐前監督・森島コーチの指導のもと、冬場に着々と基礎体力作りにはげみ、また部活動終了後も家で自主トレーニングを続

けた結果、着実に力がついていったようである。今シーズンになって各種大会で上位の成績をあげることができるようになった。

これらも一重に、コーチ、後援会のご協力、地区の人々、庄内中の生徒の声援、そして選手一人ひとりの努力のたまものであると思う。九州大会では残念ながら悪条件のもとでの試合で多少の悔いも残るが、そこにいたるまで努力した過程をこれからの試合に役立てて欲しいと思う。

戦績　県中体連夏季大会

一回戦　不戦勝
二回戦　庄内 2－0 穂北
三回戦　庄内 4－0 佐土原
準決勝　庄内 2－0 小林
決勝　庄内 3－2 新田

選手名	学年	身長
花吉和也	3	164
福満　佑	3	163
城村龍二	3	170
田村直人	3	173
今村裕幸	3	152
久保喬史	3	163
酒井　宏	3	160
城村福一	3	166
鎌田　猛	3	160
小野田敬一	3	173
七牟礼智宏	3	163
野元　龍	3	164
宇野世紀	2	168
池辺貴之	2	165
竹中力也	2	162

戦績　南九州中学生野球大会

一回戦　庄内 20－0 細野
二回戦　庄内 9－2 西小林
三回戦　庄内 5－2 国分
準決勝　庄内 6－0 山之口
決勝　庄内 6－2 小林

位置	選手名	学年
投手	宇野世紀	2年
捕手	島田倫洋	2年
一塁手	城村啓介	2年
二塁手	黒木洋平	2年
三塁手	徳重真一	2年
遊撃手	竹中力也	2年
左翼手	池辺貴之	2年
中堅手	指宿政秋	2年
右翼手	田中順平	2年
補欠	指宿孝幸	2年
〃	徳丸純一郎	2年
〃	赤池智和	2年
〃	細山田利秀	2年
〃	戸田貴裕	2年
〃	長岡幸四郎	2年
〃	伊藤茂雄	1年
〃	竹中拓馬	1年
〃	花盛健二	1年
〃	鵜島　宏	1年
〃	花原　忍	1年
〃	満永　誠	1年

於 市営球場　南九州中学生野球大会優勝

於 宮崎県営球場　県中体連野球大会優勝

庄内青空スポーツ少年団

庄内小学校ＰＴＡ会長　大河原　紀美男

会誌「庄内」二号に、創意と工夫の学校教育について書きましたので、今回はスポーツ活動面にスポットをあててみます。

私たちのスポーツ少年団の歴史は古く十七年前、昭和四十九年にスポーツ活動を通じて健全な心身の育成と情操豊かな精神を養う目的で結成されたものです。

「青空」は、青空のように伸び伸びと、若々しくはばたこうとの願いをこめて、みんなの意見で決めました。

このチームの結束と歴代監督や保護者の皆さん方の支援と協力によって着々とその成果をあげて来ました。

結成間もない昭和五十年、五十一年、五十二年の宮崎県大会三連覇、この偉業は庄内地域の低迷していたスポーツ活動に大いなる刺激を与え、住民に新たなチャレンジ精神を奮起させた。

昭和五十二年の優勝の歩みは

◇準決勝

北方スポーツ	0 0 0 0 0 0	0
庄内青空ス	2 0 2 0 1 ×	5

バッテリー、森―山口　本塁打　森

◇決　勝

高原スポーツ	0 0 0 0 0 0 0 0	0
庄内青空ス	0 0 0 2 0 1 ×	3

バッテリー、森―山口

昭和六十三年軟式野球九州大会　準優勝時の選手名

監督　酒井　文男

選手　花吉　和也　福満　悠　酒井　宏　宇野　世紀
竹中　力也　島田　倫洋　指宿　政秋　池辺　貴之
福満　佑　徳重　眞一　田中　順平　指宿　孝幸
久保　喬史

平成元年　県学童選抜野球大会
優勝時の選手名

監督　森島　国原

選手　福満　悠　宇野　世紀
池辺　貴之　指宿　孝幸
指宿　政幸　竹中　力也
徳重　眞一　田中　順平
竹中　抜馬　花原　忍
大村　武　羽田　俊明
島田　倫洋

串間市営球場にて　平成元年県学選野球大会

◇決勝　対有明ス（串間）7：2

NHK作文朗読コンクール
優良賞を受けて

都城市立　菓子野小学校

「作文を書く」「朗読をする」ということは教育において不易なものであり、「心の教育」すなわち、豊かな心を育てる私たち教育者にとって極めて大事なことである。

当校では朗読指導の一環として読み声カードを用意し、宅習の一つとして取り組ませた。発表の場として全校集会や校内放送を活用した。また、「朗読の指導を徹底させる週間」という意識を全員が持ってのぞむように意図的に位置づけ、朗読の基礎指導をこの週間中に充実させるように係が計画し、それに基づいて実践してきた。さらに日頃の実践を深め、その成果を確かめるために、NHK作文朗読コンクールに応募した。その結果、表記の賞を受けたので紹介したい。

森のためいきを見て

菓子野小　五年　新地　幸子

私は、「森のためいき」というテレビを見ていたら、母の実家のことが頭にうかびました。

秋田県の白神山は、昔はぶなという木におおわれていたそうです。そこでは、小鳥もさえずっていて、動物たちもたくさんいたと思います。だけど人間たちがその木を切りたおし、木材にするために都合のよい木を植えたそうです。きっと人間の住む家や建物などに使われるのでしょう。それで、私たちは豊かにくらせるようになったのだろうと思いました。しかしその場所にはもう動物の気配はなく、鳥の鳴き声も聞かれなかったそうです。一か所に追いつめられている動物や鳥たちは、いったいどこにいってしまったのだろう。どのようにして生きぬくつもりだろうと思いました。

今、社会科で、「公害とわたしたちの生活」という勉強をしています。大気のよごれや水のよごれ、そう音、悪しゅうなどで、全国のいろんな地域がひ害をうけているそうです。これらのことは、全部人間がやったのだから、人間がひ害をうけてもあたりまえだと思います。でも、森や海は何も関係ないのにひ害をうけているのです。自分の家でおこったさわぎがよその家

までめいわくをかけるのと同じではないかなあと思いました。

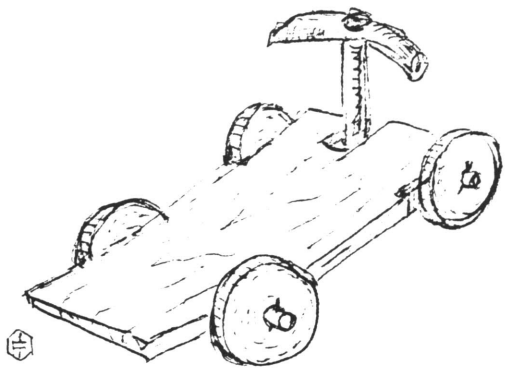
学校から帰ってから、母にこの話をしました。すると、人間たちが今のように自然をこわし続けていると、「みんながこまるようになるのにねえ」と言いました。がけくずれや土石流になったとき、うけとめてくれるのはいったいだれでしょうか。人間でしょうか。自然がうけとめてくれるはずです。母はそれが言いたかったのだろうと思いました。

母の実家は、山田町のずっと山おくにあります。二けんしか家は見えない、空気がとてもおいしいところです。この空気も自然が作っているなんて信じられないくらいです。春は梅の花がさき、地面はもも色のじゅうたんのようにそまります。ちょうもたくさん飛んでいます。夏の朝の森は、かぶとむしなどがたくさんいます。秋は山が赤や黄にそまります。冬は寒いけど、私はその母の実家が大すきです。

私たち人間は、その美しい自然をこわそうとしています。わたしはそのことをとても残念に思いました。どんなに木を植えかえても動物や鳥がいなくなっては、もとの自然の山にもどしたことになりません。今、わたしたちがこわしている自然は何千何百年あとでなければ、もとのようにならないのだそうです。だからこそ、今私たち一人一人がしっかりと反省しなければいけないと思いました。

私はこのテレビを見て、今自然を大切にしていかないと、私たち人間もくらしていけなくなるということを勉強しました。

賞を受けたことによって、子どもたちは自信を深め、さらに意欲的になった。表現力を豊かにすることはこれからの新しい世紀にぜひ必要なことであると考える。



豊かな心づくりをめざす
白寿園訪問

乙房小学校

思いやりの心やいたわりの心を育てることは、人間教育の原点であり、学校や家庭、地域社会のあらゆる場で実践されなければならない。これから二十一世紀にはばたく子供たちに高齢化社会を正視させ、自分たちのあるべき姿を探らせることは、我々大人の大きな責務である。

以上のような考えから、本校では高齢者理解のための生きた体験の場として、十年以上白寿園を訪問し、豊かな心づくりをめざしている。事例の概略は次の通りである。

○実施学年・実施日　○主たる活動内容

- 高学年―六月　・各学年の出し物
- 中学年―九月　・各部屋での個別的なふれあい
- 低学年―十月　・お年寄りへの手作りプレゼント

高齢化社会の到来がもたらしている諸問題は避けて通れないものである。子どもたちなりに何らかの形で関わりを持たせるために、「お年寄りとの直接的ふれ合い」を通したささやかな実践を継続してきたが、今後、施設側のニーズに対応しながらより充実した訪問を考えていきたい。

〈児童作文より〉

「白じゅ園のおばあちゃん」

乙房小　三年　満行　和歌子

私たちは、きょう白じゅ園に行きました。

白じゅ園には、おじいさんやおばあさんがたくさんいました。

三年生と四年生で、歌やなぞなぞの発表をしました。おじいちゃんやおばあちゃんは、なぞなぞに答えてくれたり、手をたたいてくれたりしました。

発表が終わってから、おばあちゃんをへやにつれていくことになりました。おばあちゃんは車いすだったので、わたしとゆいちゃんでおしてあげました。

おすとき、おばあちゃんがおちないかなと、どきどきしました。手にちょっと力が入りました。まっすぐ車いすをおせませんでした。ちりばこにぶつかりました。わたしは、どきっとしました。へやまでゆっくり行きました。

おばあちゃんのへやは「きく」というところでした。車いすをおして、ベッドのところへ行きました。そしたら、おばあちゃんが、「ベッドにすわらせて。」と言いました。私はびっくりしました。どうやろうかなと思いました。ゆいちゃんと考えていたら、かんごふさんがやってくれました。よかったなと思いました。

さいごに、おばあちゃんに家でつくったつるをあげました。ゆいちゃんは、学校で作ったくすだまをあげました。おばあちゃんのベッドの横においてあげました。

まなびや・いとしご

この稿は、旧庄内町の中小学校四校に在職した旧職員の中から執筆第一号としてペンを執って頂きました。

往時の学校生活や教え子達の様子を時代を追って記録するために企画したものです。

旧職員の皆様、この趣旨を御了解下さいまして御協力、御支援の程、心からお願いする次第です。

編集部

庄内中、思い出のフェニックス

今屋　花盛　林

老齢の私は健康のために天気のよい朝は散歩に出かけます。庄内中学校の本門を通って北西の角に行くといつも足をとめます。

「元気でおるか」と声をかけてくれるのは雑木の枝の下に新芽を伸ばしているフェニックスの勇姿です。

このフェニックスは昭和二十二年、戦後の学制革命により町立庄内中が設立された時、校長福重重行氏（私の旧制都城農学校の同窓）と宮崎の園芸場まで行って手に入れたものです。

当時は、なかなかお目にかかれない珍しい苗木ということで本校のシンボルとして現在の本門東、自転車置場の所に植樹したように思います。

いつ頃、どんな理由で植え替えられたか知りませんが、一、五米くらいの苗木が、今では六米にも成長し逞しい姿で立っています。

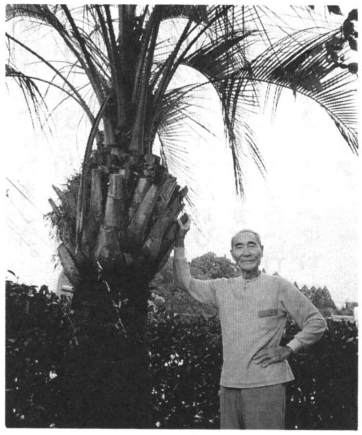
ところで、その頃の校舎はというと丸太棒の掘建て小屋で、机は土間に杭を打込んで板をのせた粗末なものであったのを憶えています。

第一回卒業生には農学校（旧制）や飛行予科練から編入した髭の十七、八歳もおりましたが、もう六十歳近くになって社会の第一線で頑張っておることでしょう。

卒業年度は思い出しませんが、今屋の畑中留吉君、川崎の花原利信君、諏訪原の菓子野富士雄君、それから千草の長友健君達も同窓でしたかね。

教卓も黒板も小学校からお借りしたお古、黒板を拭くのには雑巾、短くなった白墨（チョークのこと）を辛抱して使ったものでした。

今の恵まれた時代には、とても想像できない様な苦労に堪えて先生も生徒もよく我慢して頑張ったものです。



花盛先生の御近影

四十数年経った今日、それを良く知っているのが、この思い出のフェニックスです。

在校生の皆さん、だいじに育てて下さいね。

庄内小学校
「学校建設が復興の第一である」

東区　帖佐トキ

庄内小学校の思い出といえば、まず昭和二十年八月六日の庄内空襲による大火災のことです。

あの時のすさまじい様子は、橋口利光さんや他の人が書いておられますので省きますが、西区だけでも72軒延焼、学校二棟だけ残して、周囲は焼夷弾（油脂）の臭いと教室がぶすぶすくすぶっていたのが昨日のことの様に脳裏に焼き付いています。

八月十五日敗戦、町当局の急務は庄内町復興にてんやわんやの騒動だった話を聞きました。

時の町長有田三義氏は、町議阿久井健彦、帖佐静哉氏等の提言を受け、「学校建設が復興の第一である」と決意し、バラック校舎二棟の建設にとりかかりました。議会町民一丸となったこの工事は、またたく間に終わりました。

今考えてみれば本当にお粗末なものでしたが教師も子供たちも大喜びして町行政の厚意に感謝したものでした。

私が赴任した昭和十五年頃、本校は庄内尋常高等小学校と呼んでいました。

日支事変から大東亜戦争へ突入する前のことで国を挙げて食糧増産と戦争拡大化の時でしたから、教室で落着いて勉強することもならず、四年以上は、学校農場（現在、丸山ゴルフ場）で野稲やから芋作りに汗を流す毎日でした。

男の子は模型飛行機作りが盛んで、長時間飛ばそうと工夫し苦労していた坂元勲君、北郷久範君、末原幹久君、南崎洋史君等の顔が浮かんで来ます。

女の子といえば、庄内劇場を借りての当時の学芸会で洗練されたピアノ演奏を聞かせてくれた大草レイ子さん、持永百代さん、水久保（校長先生の息女）さんを思い出します。

またあの頃、学芸会では席上揮毫もやっていましたが、その中で臼杵ハツ子さんや帖佐三郎君の見事な筆さばきに眼を見張った記憶があります。

特筆すべきことは恵まれない学校環境の中から毎年二十数名が都中、都高女、都商、都農への進学の道に進んだこと、高等科から師範への道を選んだ入来寅男君、有田クニさん、迫田利行君、臼杵アヤ子さん、入来和子さん、吉川和子さん、臼杵道夫君、同じ教職の道を歩んだ同志として懐かしさがひとしおです。

心のふるさと菓子野小の思い出

鷹尾町　岩佐フヂ

アルバムをめくって、九か年に及ぶ菓子野小の思い出は、つきることなく頭の中が一ぱいになります。省りみれば二十五年、黒土の広い畑の中に、にわか造りの六教室の校舎、教具も不揃いの教室、木も花もない分校時代、七人の職員とPTAの和合一体の献身的な学校作りの基本姿勢が、年毎に教育の充実に効果をもたらしていったと信じます。

三十一年六月一年生の国語研究授業、真面目で可愛い子ども達の後姿です。明けて一月には町内視聴覚研究会が催されてテープレコーダーで「ことばのおすもう」を学習しました。三月には、一年間のしめくくりとして入学当日から別れ遠足まで、四十二人の一年生と共に過した主な日記と身心のすばらしい伸び方をしたそれぞれの思い出に感想文を誌しました。文集「さよなら一年生」と表題して記念の冊誌を各自持ち帰らせました。さてさて誰が今日まで保存していられますやら—

○　たむら　ちから

ぼくは一年生にはいるとき、おじいさんの手にひかれてきました。がっこうのうんどうばには、さくらの花がさいてとてもきれいでした。一ばんはじめのえんそくは、しろ山でした。しろ山はとてもきれいでした。町ややくばがきれいでしろ山はひろいのはらがありました。ぼくは、けんきゅうかいのとき、けんどうのえをかきました。それをはなしました。ぼくも大きくなったら、けんどうをやろうとおもいました。一年生よ　さようなら。　他、四十一人分は略します。

まじめだったあの素直な童顔を思いつつ「立派な二年生になって下さい。」とお別れしました。

この年校門の西側には、四季園が設定されました。三アール余りに及ぶ斜面の花壇栽培は大変困難でした。授業を終えた後花園の見廻りと手入れには、四季を通じて人知れぬ労苦と不屈の精神で立向かいました。秋冬の季節には葉ボタンが独特な美で四季園が潤ってるようでした。幸いに当時の栽培部の上級生が何かと奉仕的に協力してもらい、研究公開や卒業までの部活には、骨惜しみなく心がけて成果をあげ感謝一ぱいでした。あの頃六年生だった志々目芳郎さんは、今、警察官として前任地の延岡や宮崎北署でも署内に花園を造り、住民に好感を持たれ

ていられることを聞いております。二ケ月位前には、〇〇新聞紙上写真入りでそのようすが紹介されたようでした。

この年の夏休みには、分校時代からＰＴＡ会長として諸事に亘り業績の高い万代千代吉さんご夫妻を交え、職員一同と共にくま川下りを決行したり矢缶高原など広大な原野を散策したこともありました。また、母親学級が開設されて講話や料理実習など、大重シゲさんを会長として母親の学習会がはずみました。体育会当日に、健康優良児として六年生男女二人が協会長轟木先生より表彰された岩佐和平さんが、今、九南電業常務取締として多忙に過ごしております。一年先輩の土屋英雄さんは、今、王子製紙日南工場の施設動力部副部長としてあの広大な工場で活躍していられるようです。

年度末の学芸会で二年生では「こけしおどり」それぞれ服装に気をつかい十五人でじょうずにゆうぎが出来ました。また職員十四人は変装して「あんころこぼうず」というにぎやかな劇をしました。

三十三年度は県指定研究公開理科学習で、職員はほとんど休日無しのとりくみ方でした。菓子野小は分校時代からのＰＴＡ一体となった学校運営の効果は大きかったと、自負したいです。私は二年生と「きせつだより」にとりくみました。これは教科書以外のことで、学校や自宅周辺での子ども達の自然の遊びの中から、植物動物自然の変化や機械類等、ハッと気付いたことに就いて、観察力や表現力など一か年のすばらしい立派な記録が出来ました。庄内二号に月別男女別、年間の数量等記載してあります。あの年、子ども達の一日一日が常に観察がつきまとっているようでした。

公開当日全体会場で

理科実験器具について……乙守　保正

きせつだより観察きろく……岩佐　フヂ

研究発表をしたことも大切な心に残る思い出です。時の県指導主事黒木重実先生から好評の折、高い評価をいただきました。それから数年後、庄内中学校在学中の花盛俊樹さんから

「二年生の時、きせつだよりを書いていた私達は、中学校でも皆頑張っております。授業中も上々です。」というお便りをいただいた時は、実に感激一ぱいでいつまでも胸があつくなっている気持でした。

六十三年一月には、竹下武春（旧山元）さんが38年卒業の同窓会の資料として「きせつだより」一人一作ずつを冊誌にまとめて下さいました。これこそ記念の誌として心に生き続けるものです。

乙房小学校の思い出

早鈴町　内山邦雄
（旧姓　東　東区出身）

「乙房尋常小学校訓導に補す」という厳しい辞令を手にして乙房小学校に赴任したのは、昭和十年四月のことでした。

今から半世紀前のことです。

当時の教え子であった腕白坊主やお転婆娘も今では還暦を過ぎ、古稀を迎えようとしてします。

光陰矢の如しとか昔の人が言いましたが、実に月日の経つのは早いものですね。

つい先日、街でひょっこり会って懐かしい思い出など語った海田達雄君、現在市農協の幹事をしているとうわさに聞く武田恒雄君、その後輩の同じ教職にあった宮田孝行君、私の早鈴の住居建築に尽力してくれた椎原道夫君（旧姓大峰）、またその何年後かに卒業した市役所を退職した細山田登君、宮田正行君、県農林課長で活躍しておった細山田文雄君等々。

紅顔の美少年だった頃の姿が思い出されて懐かしい気持ちでいっぱいです。

当時の世相は軍国主義華やかな時であり、国家非常の秋でもありました。

都城において陸軍特別大演習が展開されたのもこの年です。

本校の校長先生は高城町出身の市園先生でした。先生は、清廉潔白、古武士の面影があり、教育への情熱、旺盛な研究心に職員一同敬服していました。

私は同じ庄内出身でありながら乙房のことは全くよく知っていませんでしたが、校長先生から校区の人情とか教育に対する関心度など懇切な御指導を受けたのを憶えています。

庄内町の先覚者、宮田孝之助翁は、その頃病床にあられて車椅子でよく散策しておられる姿を見たものです。

宮田翁は教育の向上を熱望され、私財を投じて校舎一棟を寄贈された奇特な方であり、また産業の発展に力を尽くされました。それ等の功績により国から紺綬褒賞、藍綬褒賞の栄誉を受けられました。

また翁の処生観の一端を伺い知ることができる教訓に、乙房には古くから「ゆちゅ」という面白い方言が残っています。

焼酎はうすめて温くして楽しく飲むもの、いやしくも翌日の仕事に支障をきたしたり、健康をそこなう様な深酒は慎めよとの翁の教訓と拝察しています。

追

憶

我れ満州に生きて（その三）

東区　黒木　聖

国破れて、一年が経ちまた暑い八月がやって来た。ソ連軍も遂に昭和二十一年四月までに満州から撤兵して、五月から満州の管理は、国民政府の手に委ねられていた。アメリカの仲介で国府軍と中共軍の一時休戦が実現して、中共配下の敦化の日本人も内地に引揚げることが決まったのだった。待望の日が遂に来た。私達はクリーの仲間十人と帰国手続きの為、敦化の街まで走った。敦化の街は活気が漲ぎっていた。斯くして、晴れて敦化を出達したのは昭和二十一年九月五日の事だった。

「さらば敦化よ満州よ」この地から抜け出す事叶わぬを悲願としてきた身が、今去るに及んで断ち切れない愛着の情で胸が一杯になった。昨日に変る敗戦国民のどん底生活が続いて、見栄も外聞もなく、難民同志騙し合い、日本人の根性の汚さを曝け出し、誰もが皆自分を守るのに精一杯で、他人の事など顧みる心の余裕など無くしていた。敦化を出で立った引揚者集団の旅は、今流行の懇親旅行のような心弾む楽しいものではなかった。屈辱に充ちたこの一年間に、夫を妻を子供をそして友を死なせて、これから焼土と化したであろう祖国日本に身体一つで帰って行く者達の大集団は、無気味までに静かで、まるで葬列の様であった。乗せられたのは無蓋貨車で、四方の側板もない。ただ床板だけのものだったから四位は屈強の男達が坐り、婦女子を最ん中に位置させた。うっかり眠れば転落の浮き目に合うのだから、男達は居眠りも出来ない。便所など勿論付いていない。進行中の貨車と貨車の連結器に振り落とされない様しがみつき、男も女も用をたす放れ業をした。九月七日列車はやがて両軍の交戦地帯に近づき一同下車。老爺嶺は徒歩で越えた。麻袋を改造したリュックを肩に、疲れ切った重い脚を引きずり乞食のような集団が切れぎれの長い列をなして、老いも若きも物に憑かれたように、只黙々として歩いていった。やっとの思いで辿りついた松花江はまるで海の様な大河であった。

大鉄橋は国府軍破竹の進撃を阻む為に、中共軍の手で爆破されていたので、原木の丸太を何本か結び合せた速製筏でこの大河を対岸まで渡らねばならなかった。そして九月八日吉林に着いた。引揚げ難民の間でコレラが大流行して、その為に吉林に足止めされた。もと軍医の方が必死に治療に当り加えて看護婦であった者達が懸命に看護した甲斐あってか、集団の中から一人

の死亡者も出ず全員快復し、約四千人の大集団は十三日吉林を出発することができた。

九月十四日に到着した新京には、二週間程置かれた。神頼みの愚かさを象徴するかのように、新京神社の大鳥居が無惨な残骸を曝け出していた。九月二十六日新京を発ち哈爾濱まで北上し、日本人の官舎跡に一泊した。赤煉瓦の屋根は悉く天井の板を剥がされ、屋根は無く星空ばかり見えた。

翌日また南下して再び新京に着き、四平街を経て、錦州省錦県北大営に着いたのが九月二十八日、ここの馬小舎跡で二週間程生活をし、十月十四日葫蘆島まで行き、その日のうちにアメリカ船のウイリアム、マトソン号に乗せられて海に出た。

次第に遠ざかる支那大陸を船上から眺めているうちに、この一年余りの忌まわしい出来事のあれこれが、走馬灯のように去来し、知らぬ間に涙が頬を濡らしていた。玄海灘を過ぎる頃、海が荒れ船が物凄く揺れて殆んどの人が甲板に出ることも出来ず、吐く者が続出した。甲板から飛び込み自殺があったとかで甲板には出ない様禁じられた。数日経って誰ともなく「内地が見えるぞ—」と叫ぶ声に全員が甲板に駈けあがった。大陸満州では見られなかった黒松が枝ぶりよく海の方に張り出し素晴らしかった。ここが私の祖国日本なのだ。とうとう内地に帰り着いた。引揚者同志が肩を抱き合って喜び泣いた。

時に昭和二十一年十月二十二日博多港に上陸復員。敦化を出てから約二か月、夢にまで見た祖国日本の土を、今こそしっかりと踏むことができたのだった。予防注射を受け、DDTを頭から体の中までふられて検問を受けた。私はまだ警戒心が強く、将校の質問に一般の民間人と答えた。その将校は優しく労ってくれて、「もう此処は日本だから何も心配せず本当のことを話してほしいと笑顔で説得してくれた。私は安心して平壌の第二〇六部隊名を告げ本命を名乗った。将校の方は名簿をとり出して記録していたが、他に私の知っている者で死亡者の名前を知っていたら教えてほしいと尋ねられたので、四、五名の方の名前と部隊名を伝えた様に記憶している。その後、軍服と階級章、毛布と靴を頂いて二百円の現金を貰った。調べの済んだ者から博多港の岸壁に各県別に並ばせられたが、宮崎県はたったの二人であった。私は生後一度も内地に来たことがなかった。庄内が何処にあるのか見当さえつかなかった。やむなく今一人の方に尋ねたらその方は児湯郡美々津の東さん（当時三十才位）という人だった。美々津駅まで一緒に行きましょうとの事で無賃乗車券は美々津駅まで切符を買い車中の人となった。

十月二十三日美々津駅で下車、東さん宅に行く。

東さんのお父さんが私に近寄ってこられ「長い間異国の地でご苦労様でした。どうぞお上り下さい」と手を引いて家の中へ案内してくれた。荷物を置きお茶など頂いた後、東さんが「海に行って見ませんか」と誘ったので、私達は魚釣りの支度をして岩伝いに釣り場を探し、ボラ等の魚を沢山釣った。

日が暮れて帰ると早々に風呂へ入って下さいと催促され私は遠慮しながらも一番風呂に入らせて貰った。何年ぶりかの安らぎのある風呂だった。体を洗おうと洗場に降りたら「失礼します」と言って突然二人の娘さんが浴室に這入って来た。

私は吃驚すると同時に、全身が恥ずかしさで真赤になった。年頃の娘さんが「背中を流させて下さい」と言い乍ら、腕まくりをして体に触れた。私は全身が硬直して震えだした。娘さんは「満州でいろいろな苦労があったでしょうが、本当に良かったですね」と優しく語りかけ乍ら一生懸命石鹸で洗ってくれた。私は返す言葉もなく、唇を噛みしめ下をむいて只々涙するのみであった。優しい東さんご一家の恩を終生忘れることは出来まい。その夜は大変なご馳走であった。食後私の身の上を聞いたお父さんが、宮崎県の大きな地図を広げ皆んなで、庄内を探すのに一苦労した。都城駅まで行けばすぐわかるでしょうとのお父さんの言葉に安心してその夜はぐっすり寝た。

翌日東さんご一家の温かい見送りを受けて車中の人となり夕方の五時頃やっと都城駅に着いた。下車した復員軍人は私が只一人であった。駅の片隅にポツンと小さな引揚者援護事務所の看板が目についてので、その事務所で「庄内はどちらですか」と尋ねたら、事務所の方が時計に眼をやり「早く自転車に乗って下さい」と言って私を荷台に乗せ急いで中町までとばしてくれた。丁度庄内行きの最終バスが発車する前だった。早々にバスに飛び乗り敬礼をし乍ら「有難うございました」とお礼もそこそこだった。車内の人が物珍らしげに私を見ながら話し合っているが、言葉が全然解らなかった。もう夕陽も沈み、家々から電気の灯りが洩れ白い煙りが立ちのぼっている。台風が来たのか、藁葺の家が軒並みに倒壊していた。乙房で車が止まり間違えて私も下車したので相当の時間を労費した。一時間半位歩いて、やっと町らしい庄内を見る事が出来た。町の入り口に川が流れ木橋（庄内橋）が架かっていた。私はこの木橋から灯りのついた庄内の町並を暫く見つめていたが、フーッと大きな溜息が出た。この橋の下で一晩夜を明かそうかとも思ったが、足は自然と町の方へ吸われる様に歩いていた。町に入り尋ね尋ねてやっと私はあの広い大陸満州の森の中で農家の庭先で月を見ながら想い続けた我が家の土を踏むことが出来たのであった。

続「三十三の足跡」

宮崎市在住　村井　孝
（東区出身）

〝神罰恐るべし〟

先生の監視的拘束より解放され、勝手仕放だい我輩の自由の羽を思う存分今こそばたく待望の夏休みが訪れた。丁度その頃、五年生である我輩達のクラスに一人の転入生があった。

この転入生H君は医者の息子で、相当の分限者であり、また言葉も教科書通り話すので、我輩達は大変興味をもってこれを迎えた。ある日のこと、我輩を首領とする四、五人のいたずら小僧達は、この興味ある H君を招待して一日山に川に遊んだ。無理をしながら、吃りながら、教科書用語を引張り出しては交話した。夕日も沈まんとする頃たどりついたのは、階段の九十いくつある諏訪神社の境内であった。

この小高い神社の山腹には、真黄いろく熟した梅の実がたわわになっていた。どの人よりも一倍食う気のある我輩は、この梅の実をみのがすはずがない。終日山に川に遊んだこのグループは、漸く空腹感を覚える頃であったので、この梅の実をみつけるやいなや、思い思いに噛りだした。

そこで我輩はみなの友達に注意を与えた…黙ってこの実をたべると必ず神罰が祟る。それでこうして両手を合掌して神の許しを乞わねばならないと。左の耳朶が〝ジン〟と熱くなってくる。これは神の御許しがあったという印であるから、その時初めていくらたべてもかまわないのであると、いとも真剣にかつ勿体ぶって説明し、一つ二つ口に入れて見せた。そこで他の者も我輩に附和随行？してか、盛んに合掌してはたべだした。多分〝ジン〟と左耳朶が熱くなってきたせいであろう、だいぶこの〝オマジナイ〟が利いたのか、はては枝毎折ってたべるものもでてきた。そろそろ酸味が胃袋に充満する頃、この風景を〝山の神〟（神社の番人をそうよんでいた）にみつけられてしまった。我輩の命令一下、このグループは颯とふく一陣の風の如く、雲を霞と四方に逃げ散ったが、不幸にして逃げおくれた我輩は、階段をかけおりる時誤って足を踏み外してしまった。階段はコンクリート製である。多分四つ五つまでは転舞しながら数えていたが、後はサッパリ!!ころげ落ち着いた時は〝山の神〟に抱えられていた。またいつの間に集まったのか、逃げ散った連中も心配気に我輩の顔を覗きこんでいる。生来強情張り屋の我輩は、ここで弱味をみせては男の恥と、強気を出して力んでみせ

ようとするが、手足が痛く口が動かない、舌がまわらない。結局担架に乗せられ凱旋将軍の如く意気揚々と〝神の子〟は我が家に送り届けられた。その夜は相当の発熱もあったらしいが、後日鏡に映ずる我輩の顔は……なんと額鼻の高さはイクオール、頭は凸凹、唇はスッパ先生と同様大きく外方に肉がはみ出し、あたかも腐れかかったイボだらけのカボチャそっくり、当時色気でもあれば未来を悲観して、自らその生命を断ったかも知れない。これが神様の御許しを受けて……した者の顔であろうか。神を欺き友をだまして梅の実をたべた神罰はまさしくてきめんであった。他の友達もその後腹痛をおこし、学校を欠席した者もあったらしい。もっとも転入生H君は親父が医者であるから、ちょっとやそっと体の調子が悪くても、そんなに心配は要らなかったのであろうが……。

この惨事があって以来、従来の神様なんか凡そあてにならぬものだと思っていた観念も一掃され、神罰の恐ろしさを痛切に身をもって体験した。その後神に信心する気持も多少あってか、朝夕神前に額づき合掌することもあったが、日数の重なるままに〝屁のカッパ〟になって仕舞い、いつの間にか合掌することも忘れ去ってしまった。

〝ヨゴレ帽子をメチャクチャ〟

すでに中学校入校は許可されているし、天下晴れて我が世の春を謳歌している頃である。また今日は小学校卒業式のおめでたい日。父兄有志大衆の前で表彰を受ける日でもあり、心ワクワクの楽しい日であった。

やはり〝思えば尊し我が師の恩〟を口ずさめば、人一倍諸先生に御迷惑をおかけした我輩であっただけに、幼い胸の中にも一沫の悲しさを覚えた。落ちるまでにはいかなかったが、眼の中は溢れる涙で一杯だった。先生方の顔をみると、どの顔も我輩をみておられるような気がしてはずかしかった。……〝あんないたずら小僧でもやはり涙があるのか〟と。

六カ年間の友達も今日を限りと東へ西へ!!

式も終わると今までの感傷的気分もいつの間にどこへやら、どうして友達と最後の「袂別をしたかも覚えない。なつかしい教室に名残りを留め置かんと、天井めがけて汚れ雑巾を投げつけた。そこには立派に六カ年間の我輩の足跡が汚点として残されたのである。

すべての行事もすっかり終って帰校途中、隣りの区より通学していた、通称デコちゃんのN君グループと一緒になった。色々話がうつりかわりして……ふとみるとN君の汚れた帽子が目にとまった。我輩はそれを無理に引ったくって目茶苦茶に引きさ

いた。〝こんな汚れ帽子はすててしまえ〟と側の竹藪の中に投げこんでやった。デコちゃんの家はきっと貧しかったのであろうが、そんなことに何等頓着しない我輩は悪ふざけとはいうものの、デコちゃんにとっては貴重なものであったに違いないその帽子の効用価値を減失してしまったのである。お目出度い日というのにデコちゃんこそ迷惑な話。とうとうありったけの声を張り上げて泣き出した。…今にして想えば、無理からぬ泣き方であったろうとわが非を責められる。

我輩もその器物毀棄を認めてか、〝家にくればいくらでも新しい帽子があるからもらいにいけ〟（当時は帽子も店に出していた）と慰めてやった。案に違わずデコちゃんは帰りみち、我輩の店に立ち寄り、今日の出来ごとを一部始終母に話したらしい。母もその話を聞いて、申訳ない、可哀そうだとみたのか、一番上等の新品帽子を代償として与えたそうだ。

その夜母からお説教をいただいたことは申すまでもない。然し卒業の成績賞品の多かったせいか、だいぶお説教もお手やわらかであった。親父は式終了後〝ナオライ〟があったのであろう良い機嫌で、帰りもおそかったために、この事件は何も知らずにそのままに片づいた。

後の話であるが、N君はその帽子をかぶって、高等科に意気揚々と進級した。また汚れたらM君にみせて、ひきさいて貰おうかとも洩らしていたとか。

その後のN君は剣道の達人になり、南方戦線に参加するや直ぐ名誉の戦死をとげた。今は物故の人である。

詩・短歌・俳句

地頭・三島通庸

瀬戸山　幽　畝

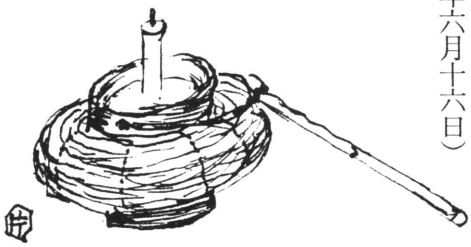
明治二年九月天　明治二年・九月の天
四・八三島西郷薦　四・八（三十二歳）の三島・西郷の薦。
若蔵地頭任都州　若蔵の地頭・都州に任ぜらるも
此地元是島津貫　此の地は元これ島津の貫ぞ。
忠義人士刀割板　忠義の人士、刀もて看板を割り
撒布糞便役所前　糞便撒きちらす役所の前。
通庸去茲到安永　通庸ここを去って安永に到り
庄内呼称上下分」　庄内の呼称・上下に分つ。」
施政三郷分割計　施政は三郷分割の計
大御支配耕田均　大御支配に耕田均し。

隊長発令軍政下　隊長令を発す軍政の下
郷内振興策存分　郷内振興の策は存分。
士集庄内市街成　士は庄内に集まって市街成り
道路開鑿四方軫　道路は開さくされて四方に巡る。
堤防修築社祠建　堤防は修築され社祠は建ち
産業殷賑教育振　産業は殷賑し教育は振う。
梶山三股二郷合　梶山と三股の二郷は合し
士民新街山王原　士民新に街す山王原。
治下忽地大開発　治下は忽にして大開発されて
頌碑両地居民建」　頌碑は両地に居民が建つ。」

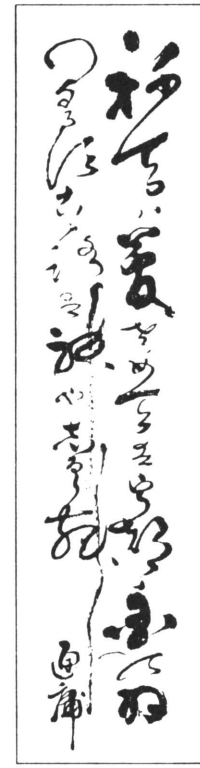
麑城下士弥五郎　げい城の下士、弥五郎は
天保六年上園産　天保六年・上ン園の産。
十六諍朋被幽閉　十六、友と争っては幽閉せられ
坐寺田屋命謹慎　寺田屋に坐しては謹慎命ぜらる。
戊辰戦争転東北　戊辰戦争には東北に転じ
明治二年宰都州　明治二年には都州に宰す。
五年東京教部丞　五年には東京教部の丞
七年酒田為県令　七年には酒田に県令たり。
雄志最勃四十歳　雄志最も盛んなり四十歳

福島栃木兼県令　福島と栃木に県令を兼ぬ。
議案否決処投獄　議案の否決は投獄に処し
剛愎専制自由党　剛愎（ごうふく）・専ら制す自由党。
後年内務土木長（省局）　後年、内務土木の長
東京警視鬼總監　東京警視の鬼總監。
歴任高官勲功大　高官を歴任して勲功大なり
天子賜爵列華紳」　天子、爵を賜い華紳に列す。」
長男甾学攻農政　長男は甾学して農政を攻（きわ）め
他日六年銀行裁　他日　六年、（日本）銀行に裁（総）たり。
次男弥七東大卒　次男弥七は東大の卒
競技最初加国際（明治四五年オリンピック）」　競技は最初に国際に加わる。

（平成三年六月十六日）



通庸遺詠百首より



○秋　旅○

君がため、いそげば嬉し　旅の空
　秋のあはれを、忘れつつ行く

白露に、袖ぬらしつつ、武蔵野の
　尾花が末に、宿る旅人

立わかれ、因幡の山を、越行けば
　我が衣手に、かかる白露

行先は、まだ遠ければ　旅の空
　まねく尾花に、宿やからまし

油照り

東町　巴　旦　杏

河馬にひけとらぬ土用の欠呻かな

蜩の追伸めめと続きけり

欲張って老ひしにはあらず油照り

台風や　われの文芸ひ弱なる

天を仰ぎて入定す蝉はどれも

われに無きものを蓄ふ金亀虫

通風の工面あれこれして昼寝

とんぼうの世のままならぬ火砕流

史跡探訪

町区　南　崎　喜　美

きび畑の中にひっそりと建ちている
　菓子野古墳の朽ちし丸柱
鬱蒼と茂る大樹の幾本が残れど
　観音像は跡形もなし
雑草の深ぶか茂る森の中
　かくれ念仏の後残りおり
山里にかくも寂しきみやしろの
　今も残りて人拝みいる
いにしえの人等田の神さあと伝え来て
　今に残る敬虔な心
おだやかな優しきかんばせ拝ろがみつ
　田のかんさあと別れ来にけり
降り出せばしばしはぬれつ巡りたる
　探訪の小半日忘れ難しも
熱こもる説明に耳かたむけつ
　菓子野探訪は充たされ終る

イチイガシの大木

西区　池田シヅ

朝日たださす霧島の
南ふもとに地をしめて
大淀川の川上に
模範の里とあおがるる
我が庄内のゆかしさよ

フト思い出して口ずさむ
小学校に　入りしは
今を去ること六十餘年
ひとり一人の先生の
その面影が　心に残る

わき目も出来ぬおしんの時代
時は流れて　子も育ち
やっとまわりを見渡して
孫の姿に自分を見る
小学生のいぢらしさ

時に従がい折にふれ
眺め親しむカシの木の
この大木に　語りかける
卒業生を見送りて
その数知るは　大木のみ

東西町の　中心地
長い校舎が　いくつも並び
こぶしの大木　桜の木
せんだんの木も数多く
運動場は　今の農協の地

小学校の　読本の
「今に見ていろ」のあの詩を
カシを眺めりや思い出す
何百年も生き続け
多くの人に愛をそそぐ

大空襲で学校は焼け
西区の部落も多くやけ
不思議に我が家と大木は
あの悪魔からのがれられ
流れた　歳月　四十年

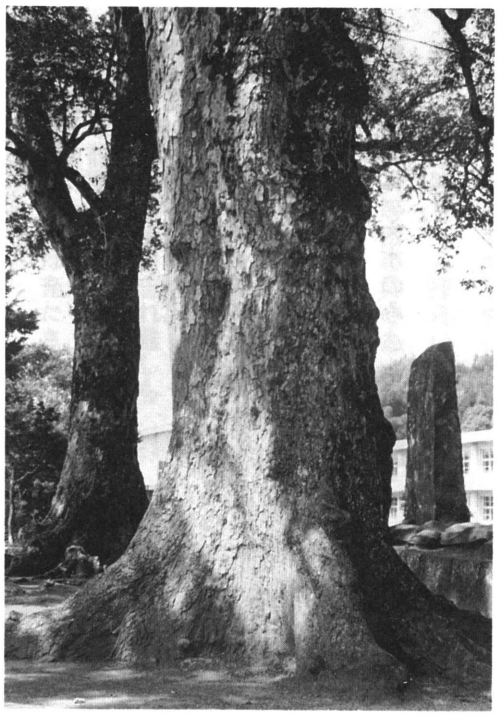
古い大木　何年前か
日照り続きで　枯れかかり
すごく心を　いためしに
消防団の　方々が
水をかけて　頂いた

幾夕もかかって　散水され
其の愛情に　生きかえり
唯有難く　よろこびて
感謝のほかは　ありません
カシにかわりてお礼を云いたい

どんな大きな事だって
工事では　出来得れど

永い年月経なければ
大木だけは　あり得ない
神の生命に　生かされて

可愛いがりましょ大木を
いとしがりましょ大木を
語りかけましょ　大木に
共に歌ってはしゃいだ
昔のはなしを　この大木に



60年２月４日

庄内俳句会

抜群の賞載けり大ひまわり　思峯
分数を解きて少年の夏となる
春雷やここにもあった忘れ書

かげろふやつかずはなれず影二つ　さつき
踏み入れば落葉ふわりと深かりき
露草の瑠璃にまなこを洗いけり

帰省子の大の字になる青畳　敏子
傘さして朝顔市に集まりぬ
唐黍の支え合ってる風の中

せがまれてとらえし蝉に声がなく　點晴
梔子花の息づかいのみ伝わりて
赤とんぼ読経に乗りて罷り来し

陽炎やもつれる蝶とともに燃え　阿弥子
なにげなく葉先に揺れるてんと虫
にわか雨瓜蝉く音に綾となり

いさかいの元になりたる草を抜く　徳郎
何事かあるらし今日の蝉しぐれ
さるすべり程よく揺れて鎮魂祭

やまあいのひぐらしの声湯にしみて　昭平
逃げ水を追ってヤンマが宙に入る
露天風呂夏草の香か蝉しぐれ

真鯛釣り胸のどよめき高なるを　哲真
梅雨明けて太公望の漁る時季
ぐち釣りて愚痴をこぼさぬ釣天狗

琴の音をともにビールのつまとして　いつえ
姉の忌の白き桔梗に香ゆらぐ
梅雨明けの朝空がとぶ雀かな

冷やっこ妻が受取る宅急便　松雄
ひとしきり夕立ち泣けり青蛙
荒梅雨や人影のなく犬走る

子や孫に語り伝える話

今平相中について

乙房　黒木重俊

今平（いまでら）相中は現在の宮村と今平の区域の総称で、第二次世界大戦の終った昭和二〇年まで続いてきた名称である。

その組織は宮村今平の区域を上方限（ほうぎり）、中方限、下方限の三つに分け、各方限毎に頭取（つどい）を選出し、頭取三名の合議により親頭取を決めた。

そして親頭取を中心とした三名の頭取により、今平相中のすべての事について処理決定を行い、住民はこれに従うことになっていた。其の決定を相中内の住民に伝達するため「にせ布令（ふれ）」が居り頭取の手足となって働く仕組になっていた。

頭取の任期は二年で再任を妨げないものになって居り、三名の頭取が三人とも一緒に替ることがない様に各方限の頭取の選出の年を違はせる仕組になっていた。

今平相中には昔より代々伝へられた文書が「りんご箱」大の書類箱に納めてあり、この記録の整理保管も頭取に課せられた重要な任務の一つであった。この今平相中の重要な記録文書が昭和二〇年の敗戦に伴う混乱の中で散逸してしまい昔よりの相中の歴史がいろいろな記録文書となって残されていたものと考えられ返すがえすも惜まれてならない。

頭取の職務については、今平相中の苦情や、もめごとの処理等一般の業務の外、今平橋の架橋以前の沖水田圃への通行を確保するため渡し舟を所有して居り、この舟の運航管理や、年に何回か行はれていた道普請の計画と実施及びその監督。冬期に大淀川を渡る為の橋の架設計画の作成実施並に撤去等があり、更に昔は殆どの家が茅葺屋根だった為、この茅葺屋根の補修や、葺替へ等の場合の足場を作るに要する木材と道板の整備保管等の任務が課せられていた。

昔の渡し舟の就航していた所の風景
（橋は今平橋）

この今平相中の組織を支え、円滑な運営を計るため基金制度を持ち、この基金を借りたい人に貸付けその利息を相中の必要な経費に当てることにした。この貸付金の利息は月利一分二厘で現在の金利に直すと年利一四・四％に当り、当時としては極めて低い金利ではなかったかと思われる。この貸付金は毎年一

月の二九日が返済日となって居り当日は親頭取宅に頭取が集り借りた人達の持参する元利金や利息等を受取っていたとの事である。そしてその基金の総額は九百円にもなっていたといわれている。

今平相中の起原については何時頃より始ったものか記録が残っていないが相当古くよりあった組織ではないかと思われている。私も以前に当時都城図書館長をして居られた瀬戸山先生の厚意により、丁度その頃都城図書館で宮崎大学の学生諸君により都城藩の記録である「庄内地理誌」を現代風の口語文に直す作業が行はれていたその折この「庄内地理誌」の中にあるところの「安永村」に関する記録だけを見せていただいたことがあったがこの中に今平相中に関する記録があった。その記録は文禄年間「一五九二〜一五九五」のものだったと記憶している。記録の具体的な内容等は原本が毛筆で書かれ草書体の漢文になっており全部を理解することは出来なかったが、ただその記録の中に当時の今平相中を構成していた三十三名の人達の姓名が書かれていたことを記憶している。

今平相中の名の由来については言い伝えがあり私達の若い頃に古老よりいろいろ聞かされていたが、それを要約すると次のようなことである。何時の頃か遠い昔都城の殿様の屋敷が火事になった事があった。昔は夜は提灯が主役だったので各集落には集落名入りの大提灯があり何か事のある場合その大提灯を立てて集落の参集を表示する印となっており、また各戸にはそれぞれ家紋入りの提灯があったということである。ところがたまたま殿様の屋敷近くに提灯の新調か張り替え修理をする提灯屋があったがこの様な大事の際に駈けつけた証拠として立てる大提灯が壊れておりまだ修理も出来ていなかったので、止むなく丁度張り替えに出されていて出来上っていた今平の名入りの大提灯を持って行って立てたということである。

火事がおさまった後で殿様が外を御覧になり今平の提灯が一番に立ててあるのを見て「今平はどこにある集落か」とその所在をお尋ねになったので家臣が一里以上も離れている遠い集落であることを知らせると「そんな遠くから一番に駈け付けたのか」と大層なお喜びで今後は「今平相中」と称するようにせよとの御言葉を賜り、それ以後「今平相中」と称するようになったということである。

現在の吉都線日向庄内駅前附近

「坂元源兵衛翁の陶像」について

町区　坂元清景

坂元源兵衛翁は、明治時代に庄内のまちづくりに活躍され、特に前田用水路の開削に当っては、長年に亘って工事の中心にあり、あの難工事を成功に導いた人で、庄内の人なら知らぬ人はない私達の恩人であります。

この翁の陶像が、関之尾の滝の近く県道を隔てた西側の丘の上に建っています。そして東に拡がる庄内の田圃をいつも慈愛の眼で眺めておられます。

この陶像は、昭和八年に建てられたもので、この除幕式で、幕の紐を引いたのが実はこの私であります。

もう、六十年も前の事になりますので私の記憶も薄くなり、思い違いや記憶違いがあるか知れませんがそれはお許し願い度いと思います。

庄内には、関之尾の滝上を水源とする用水路が三本通っています。南前用水路、北前用水路、前田用水路がそれです。現在は、コンクリートの三方張り等でよく整備され、水の取り入れ口も近代化されて潤沢な水が下流までよく届くようになりました。然し昔は、切角の水が下流の田圃まで行き届かない事がままあり、各用水路間でのトラブルや、上流の田人と下流の田人間のトラブルが相次ぎ、雨の少ない年などは、各地で水争いのケンカが頻発していました。

特に前田用水路は、関之尾から西区、東区、今屋、千草の上の原を通り、そして谷頭まで延々十四キロメートルに及ぶ長い水路である為、この間には色々な問題が起こり、事は大変深刻でした。

水路の管理者一歩園に対する不満が爆発して、百姓一揆まがいの騒動もあったと聞いていますし、又隣同士で仲違いしたり、ほんとに田植えが迫る度に、田人の命をかけた問題が起っていました。

このような状況を打消す可く多くの人達が心配もし、奔走もされたようです。私の父一二（昭和三十年没）もその一人でし

た。当時私の家は関之尾にありましたが、たくさんの人達が出入りしていたのを憶えています。詳しい事はわかりませんが結局、前田用水路を利用する田人の人達が、水争い等せずに皆んなが仲よく働けるように親睦会を結成することになりました。

会員は約二百名位と聞いていましたが会の名称を「庄内親愛会」と言いました。会長は私の父一二でした。副会長兼会計が汾陽栄一氏（昭和三十六年没）で、各地区に役員が選出され、お互の話し合が持たれるようになり、水ゲンカもなくなったようです。

その頃、庄内の指導者の中に坂元英俊氏が居られました。英俊氏は坂元源兵衛翁の長男で、明治の末期から大正時代にかけて国会議員を四期勤められ政界で活躍された方で、庄内でも村長や町長を長年歴任されました。

私の父一二は、若い頃から坂元源兵衛、英俊父子を神様のように尊敬していたようです。英俊氏の選挙の時等は、それこそ寝食を忘れて奔走していたようです。

このような父でしたから、坂元源兵衛翁が地域の要請により立ち上り「関之尾の岩が固いか、人間の意志が固いか」と頑張り抜いた苦節十数年の成果の恩を仇で返すことがあってはならないと奮起し、皆んなに呼びかけたのだと思います。

この気持の輪が大きく拡がり「庄内親愛会」の結成となり、そして、源兵衛翁の陶像建立の計画へと発展していったものと思います。

丁度その頃、関之尾に黒田甚蔵という石工さんがおられました。色の黒い大きな人でした。この黒田なる人は、関東方面から来ていた人の様で、地元の人ではなかったようです。陶像建立はこの〝黒田甚蔵の発案〟ということで、案内板等にも書かれていますが、私の記憶では「庄内親愛会」が発案して、たまたま陶像作成の技術を持っていた黒田甚蔵なる人に作成を依頼したというのが真実のようです。

それは、あとになって父から聞いた話の中に「当初計画は、銅像であったが費用がかかり過ぎる為陶像にした」と言っていたのを記憶しているからです。

また、この陶像はあとからわかった事ですが、当時神柱神社の近くで「小松原焼」と銘打って陶器を焼いていた「飯田広輔」という人の窯で焼いたようです。

何れにしましても、この陶像建立には「庄内親愛会」が直接関与した事は疑いありません。

このような経過で、都城で焼き上った陶像は、藁で厳重に梱包され、多くの人達に見守られ乍ら、地元青年男女の手で、現

在地に運ばれました。

除幕式は実に盛大なものでした。親愛会の会員は元より、その家族や、見物の人々でごった返す賑いでした。

この大勢の人々の見守る中で、当時小学四年生だった私と、二年生だった妹キリ（昭和十八年没）の二人で除幕の紐を引いたのでした。

私達兄妹が除幕の役をしたのは、多分父一二が親愛会の会長であった事と、坂元源兵衛家と親しくしていた関係からだったのでしょう。緊張し乍ら妹と調子を合わせて紐を引いた事をよく記憶しています。

たくさんの来賓の中には、坂元英俊氏をはじめ清水清次氏、蒲生才蔵氏、東北諸県郡長、池田募県会副議長、湯之前郵便局長等が居られたようです。特に湯之前郵便局長が人力車で会場に乗り付けられた事をよく記憶しています。

祝賀会では、テコシャンセンで踊りが続き、ナンコ大会もあり大変な賑いでした。

この陶像建立の記事は、時の都城新聞の一面に写真入りで掲載されました。私はこの時の記念としてこの新聞を大事に保存していましたが、終戦のドサクサで紛失して了いました。

七、八年位前でしたが、夢の中で源兵衛翁が現れて寝苦しい夜が続いた事がありました。そこで、関之尾に行って見ました所、あの陶像に周りの木の枝が覆いかぶさり、源兵衛翁の視界を遮っていました。早速枝払をして掃除をいたしましたところ、その晩から安眠するようになりました。その後は、時々見廻り点検をすることにしています。

今では、すっかり苔むし、あちこちが欠け、手にしておられた杖もなくなっていますが、相変らず柔和な顔で庄内の田圃を見守っていて下さるようです。誰がお参りするのでしょうか。像の前にはよくお賽銭があげられています。

今、南前用水路は、川崎から平田、乙房を潤し、北前用水路は関之尾から西区、町区、東区の田圃に水を送り続けています。

そして前田用水路は、延々十四年の歳月をかけて関之尾、西区、東区、今屋、千草、谷頭方面の台地を水田にし、絶える事なく水を送っています。先人の偉業にただただ頭が下がるばかりです。

坂元源兵衛翁の陶像は、翁の死後（大正五年没）十数年の後建立されましたが、「庄内親愛会」の会員を始め、地域住民が如何に翁を慕い尊敬していたかがわかります。

私は、この機会に改めて源兵衛翁の遺徳を偲び、その偉大な業績に対し、感謝の意を表したいと思います。

庄内観瀾舎（かんらんしゃ）の思い出

東区　椋田　泉

私が商業学校に入学した大正十四年は、軍国調華やかな時代でスパルタ教育でした。

今頃では大変な問題としてマスコミがとりあげる鉄拳制裁などは、上級生の当然の権利として黙認されていた時代で、余程の行き過ぎがない限り、問題にならない時代でした。もしも被害者から苦情など出ようものなら、臆病者とかえって皆の軽蔑を受けなければなりませんでした。

観瀾舎跡

当時都城には、中学校、商業学校、農学校の三校がありましたが、入学試験の発表があるとすぐ観瀾舎に集れと連絡があります。このように全ての学校の学生を網羅する組織は、他町村にはなかったようです。

観瀾舎の歴史は古く、故坂元英俊翁の回顧録によると明治十八年庄内村教育振興のため観瀾書院を立つ、とあり、これが嚆矢（こうし）と考えられます。私達の頃は現在の農協支所の南側敷地にあり、二棟の舎屋の建物の補修等は、一般の寄付金で賄われていました。舎を運営するのは五年生で、上級生は絶対でした。高等科一年或は二年を経て入学した者は譬え年齢が上でも、下級生として従わなければなりませんでした。土曜日は学校から帰るとすぐ観瀾舎に行って、上級生から柔道で鍛えられました。夜間も時々召集がありました。些細なことでお説教をうけたり、「お前は生意気だ」と鉄拳を頂戴したりしたものです。

冬になるとよく試胆会がありました。月の明るい夜に行われます。道に迷ったり、凹地に落ちて怪我などすることのないように、配慮がなされたものと思いますが、月の明暗で灌木などが様々な怪物の姿に見えたりして、胆を冷やしたものです。この胆試しには、免許皆伝があって一番淋しいところとされている場所に行けたものは、その後の胆試しは免除になりました。

ヤッセンボと言われるのが口惜しいばかりに、怖くて堪られないのを我慢して左右を見回しながらビクビクして目的地にた

どり着いたものです。着いたら指定されたところに、柔道衣をキチンと揃えて置かなければ後から取りに来た者から乱雑さを報告されるので、怖いからと言って遠くから投げて帰るわけにはいきません。

ど根性のないものは次々と落伍して行く世の中でしたが、スパルタ教育のお陰で私はそれに堪えて行くど根性を植えつけられました。

試胆会で鍛えられて、得をしたことがあります。それは私が商業学校を卒業して憧れの満鉄に入社した大連鉄道教習所時代のことです。寄宿舎は高い山の中腹に段々に並べて建てられてありました。日本全国の中学校、商業学校から選抜されて入所した五十名の同期生が一年間寝食を共にした憶い出の多い生活でしたが、或る夜幽霊の話になりました。寄宿舎は元、日露戦争の時の陸軍病院をそのまま使用していましたので、沢山の人が死んだところです。岡の上の方の寄宿舎は夜中になると幽霊がでてくると言うことで、平常は使用されていませんでした。そこへ夜中に行けるかどうかと言うことが話題になり、私は行けると言ったので、そんなら行け、行ったら蜜柑一箱奢るぞ、そんなら貰ったぞと、独りで指定の場所に行き只今到着と黒板に大書して帰りました。そして蜜柑一箱せしめたことがありましたが、その当時でさえ、他県では試胆会などは行われていなかったようです。

野蛮と言えばそれまでですが、観瀾舎のスパルタ教育は上級生の鉄拳により統率されていました。それは丁度旧軍隊のように星一つの差は厳然たるものがありました。自分が何のために上級生から鉄拳を受けているのか、理解に苦しむこともありましたが、理屈でなく人間のど根性を鍛えるためには役立ったような気がいたします。鍛えられるのに堪えられなくて途中で止める人もあるような結果になりながら、それでも人々は観瀾舎の存在を否定しませんでした。それは永年培養された伝統とエリートになるための訓練は当然のことと世間の人が認めていたからだと思います。

この由緒ある観瀾舎も戦争と共に運命をともにして、建物も何時頃どう処分されたものか分りません。古老の中には観瀾舎を復活させて、若い者を鍛えなければいけないと言う人もありますが、むかしのままではとても現代の風潮にはそぐわないのではないかと私は考えています。

庄内南洲神社

西区　伊地知　義　夫

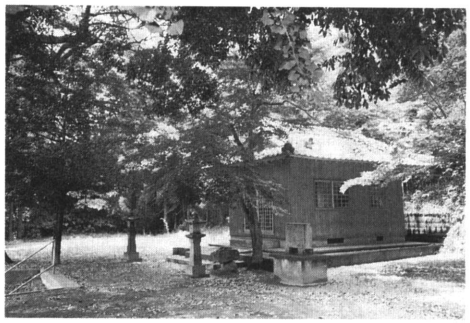
それは昭和六十二年三月のことです。鹿児島南洲神社宮司の鶴田正義さんから、突然電話があり、南洲神社由緒のことを新聞で見たので、是非御地の南洲神社にお詣りしたい。近日中にお伺いしますと。そして三月二十三日、鶴田氏はじめ、四名の方が尋ねてこられました。

南洲神社の由来については、地元の区民ですら知っている人もなかったのですが、幸い、東区の坂元徳郎さんが、祖父英俊さんの南洲神社関係の諸帳簿を保存されていたことから、くわしい神社の由来を知ることができたのです。このことが、「西南の役の文献みつかる。南洲神社由来も。」と新聞に報道されたことから、鶴田さんらの来都となったものです。

昭和二年は、西南の役五十周年にあたります。その記念事業として、西郷南洲翁の遺徳を偲び、併せて翁と死を共にした旧庄内郷出身の戦没者五十六名（従軍者は二百十三名）の霊をまつり、これを後世に伝えるため、浄財を募り、神社を創建することになったものです。ちょうどその折、諏訪神社の改築がありましたので、古い社を譲り受け、現在の地に社殿を建設しました。そして鹿児島の南洲神社に分霊を請願し、昭和四年五月、厳かに遷座祭が行われたのです。祭し者は西郷南洲翁と、旧庄内郷戦没者五十六名です。創建以来住民の信仰篤く、鎮守の宮として親しまれています。

昭和五十三年十月、不慮の出火で社殿が全焼してしまいましたが、二年後の五十五年十二月、みごとに復興しました。

宮司の鶴田さんは、今まで南洲神社といえば、鹿児島の本社と、沖永良部と、山形県酒田市にある三社のみと思い込んでいたので、まさか、つい隣の庄内にあろうとは考えもしなかった、誠にうかつだったと、いかにも残念そうでした。そして鹿児島の本社は空襲のため焼失したので、書類が殆どなく、そのため、坂元さん宅の文献の中に、本社に対する御分神、御分霊願や、社務所からの承認書、戦死者に関する書類などあって、本社にとっても貴重な資料ですと、喜んでいました。



八十年の歴史を誇る宮島の敬老会

宮島　宮島実秋

明治四十三年、当時の宮島青年会は十六歳から三十五歳までの男性で構成されていました。

会長内村直左衛門氏は先見の明がある方で、同郷の子弟に祖先を敬い、年寄りをだいじにする教育の必要性を強調されたのがきっかけの様です。

敬老会を運営するには、先ず経費の工面に会員一同頭を悩ましし、何日か寄り合いをしたと言う話です。

相談がまとまったのは、会員ひとり当り六十粁入りの米俵の菰二俵分を供出することでした。

会員が丹精こめて作った菰は、当時の一歩園（前田正名事務所、小作米集荷所）に売り、経費をつくりました。

初回の敬老会は、記録によると明治四十三年二月五日、土屋政則氏（故人）宅でにぎやかに幕を開けました。

老若男女、たくさんの子や孫に囲まれて喜んでいるお年寄の顔が眼に浮ぶようです。

以来、昭和二十年終戦のどさくさで一回だけ取止められましたが、現在までずっと続いて八十回を数えます。

現在は、区の青壮年会が主催し、経費は区民の寄付で実施している情況です。

今でこそ敬老の精神は高まり、どこの区でも敬老の行事が行われていますが、八十年前にこの事に着目した地区の先祖に敬服するとともに、この意志をいつまでも継承することが区民の義務でもあり、喜びでもあります。

土屋政則氏宅にて
明治43年発足記念

乙房高齢者福祉会館について

乙房　乙丸虎男

昭和五十二年頃のことであるが乙房区で公民館を新設することとなり建設場所を小松ケ尾台地とすることに決定したのに対し、主として高齢者の間に反対が出たのでこの対策を検討することとなる。丁度当時、都城警察乙房駐在所が移転したため之が跡地施設を一部増設改修して高齢者の福祉施設としたき旨、区側と交渉了解を得たので、右旨を都城市に陳情し許可されたので、さしあたり百万円程度の工事費で室内改装並びに一部増設する計画書を添へて工事施行方を請願した。市において検討せられ許可され貳拾万貳千円の助成金を交付さる。従って区側と今後の対策を協議した結果、区としては区の事業として行うことは困難があり高齢者側で一切の工事を行い、区は支援することとなる。東西高齢者クラブ連合会を組織し左記の通り建設委員を決定し建設資金となる特殊寄付金の調達に全力をあげることとなる。

建設委員名

乙丸　虎男　湯浅　勝盛　鶴村　末吉　高橋　藤七　久保田充行
大峯　定隆　川畑　親一　大峯フヂノ　立野　クニ　立野　ハギ

各委員は手分けして活動を開始したが一部に反対し妨害する動きが出たものの区民大多数の良識にこたえ不退転の決意を以て対処し、予期の成果を得ることが出来たことは区民各位の御協力のたまもので感謝する次第である。

一、工事内容について

昭和五十三年一月前原工務店との間で工事一切を百貳拾五万八千円で契約した。

工事内訳は次の通り。

(イ)	収入の部	
(a)	寄付金	1,092,500円
(b)	市からの助成	319,400円
	合　計	1,419,000円
(ロ)	支出の部	
(a)	工事費一切	1,258,000円
(b)	備品、其の他	
	黒　板	2,200円
	フスマ張替	3,000円
	タタミ張替	1,100円
	扇風機	47,000円
	石油コンロ	17,000円
	雨トイ	20,000円
	雑　費	20,000円
	予備費	4,800円

同年五月一日工事完成につき落成式を挙行、高齢者福祉会館の看板をかかげ活動を開始することになる。

二、追加工事について

昭和五十七年より昭和六十年に至る間、高齢者クラブ会長相原得男氏が乙房公民館長及び都城市当局と交渉し多額の助成金を得て、左記の工事を実施されたことは其の功績多大なるものがあり感謝にたえないところである。

記

種別	工費	種別	工費
ステージ改装 佛ダン新設 炊事場改装 窓改修 外廻り修理	二〇〇、〇〇〇円 （市補助金）	便所改修 納戸改修 障子改修	一〇〇、〇〇〇円 （市補助金）
		白アリ駆除 タタミ取替 カーテン取替	一二二、〇〇〇円 （公民館より補助）
		計	四二二、〇〇〇円

三、福祉会館利用状況について

昭和五十五年四月より平成二年三月に至る間の使用状況次表の如し

種別	回数（年）	人員	説明
高齢者学級	七	三、一五〇	東西クラブ合同
菊花展	一	八〇〇	同右
健康相談	六	一、八〇〇	同右
クラブ総会	一	八〇〇	東クラブ
物故者法要	一	三一五	東クラブ
踊練習	三二	三、二〇〇	東西クラブ合同
敬老特別乗車券更新	一	一、二〇〇	同右
ヨガ教室	三〇	一、四四四	同右
計	七九	一二、五〇九	

その他、会員外一般に開放、第二公民館として使用。各種団体並個人も多数利用されている。

四、所見

乙房高齢者クラブは単一のクラブとして発足したが、昭和四十年代に東西二つのクラブに分かれることとなり、その後両者の間にトラブルがたえず公民館長は困り果て、もと通り一つのクラブに出来ないかと相談を受けた。これに対し、現状では困難なため東西クラブ連合会を組織し運営する方法が良策と進言したのである。今回、福祉会館設立に際し連合会を組織し、工事を施行することとし、その後諸行事は連合会で行うことが多くなり、両クラブの関係は良好で意義深いものを感ず。

西諏訪融和クラブの思い出
（終戦後の婦人会）

東区　黒木ツミ

昭和二十三年、婦人参政権が認められ婦人の地位の向上も徐々に図られ、婦人による自主的な民主団体を組織する運動が盛んになってきました。当時の亀沢温先生、持永優様、山内社教主事の熱心なご指導により、融和クラブが誕生しました。

昭和二十四年三月二十八日、諏訪神社の祭典を好機に敬老者及び学友会も一緒に結成式を行いました。西諏訪協同班の各家庭の主婦二十四名で組織しました。相互扶助の美を発揚する目的です。地域は諏訪神社の裾当り、庄内中学校の周辺で、会員の職業も様々で環境も各人の性格も年令も異なる人達の集りですが、ただ共通点は皆母であり主婦であり明日への向上をひたむきに念じていたという事です。従来の強制的な天下り的な婦人会を脱皮して、新しい時代の流れに即応した、自主的な運営をはかるためお互いの研究で民主的な会則もできました。

融和クラブの結成式が終って、なぞのくじ引きが始まり、歌や踊りをしないと、賞品がもらえないので皆一所懸命です。そして、むきになればなる程笑いが起り、賞品も終戦当時の栄養失調の多かった頃を反映して、芋のおだんご等がごちそうだった事を覚えています。

年間行事について　　昭和二十四年

四月、花見、五月、萬先生（中学校校長）送別会、墓掃除、茶つみ、バザー、六月、成人講座、七月、さのぼり、差入れ、八月、墓、道路の掃除、田中クマ様（クラブ誕生に尽力された人）の送別会（福岡転勤）、九月、戦死者慰霊祭、十月、常会、十一月、火事見舞、頼母子講、十二月、墓掃除、昭和二十五年一月、新年会、出産祝、バザー、

昭54・4・8　於：坂元照子様宅にて

二月、役員改選、会長福重テル様、企画会計係、書記、連協婦係、と推薦により決まる。三月、農道作業者の方へ茶の接待、其の他いろいろありました。

この頃「融和クラブの歌」が出来ました。昭和二十五年度以降も、毎月の行事は当初のきまりを基本としてまいりました。

其の後十ケ年間の主な実施項目をあげてみました。先ず申し合わせ事項として、時間の厳守、言葉づかい、思いやりの実行、親子協議会の結成、庄内地区婦連協会へ入会、資金造成、赤十字奉仕団へ入会、家庭看護法実演実習、子供の躾、遊び時間及び学習の手伝い、家族運動会、小学校ＰＴＡのモデル公開、料理研究会、更生品研究会、東区婦連協主催の敬老会等々、その間には人間関係の事で苦労した事もありましたが、その都度、亀沢先生はじめ指導者の熱心な助言により、立ちなおる事が出来た事を感謝しています。諏訪神社境内に子供の遊び場が出来た事もうれしい事でした。思い出に残る楽しい事は石山観音池に親子遠足をした事です。何しろ経費の工面が出来ずいつも計画流れでしたが、宮交の運転手横井様にご相談申し上げた所、心よくお引受け頂き、バス代は月払いにして下さったので決行出来ました。夏休み親子遠足八十三名が、バスの人となり、観音池でたのしくすごす事が出来ました。

私事になりますが、昭和三十三年の農繁期に夫が病気のため田植えが出来ず困っていました。その時融和クラブの皆さんが率先して加勢して下さいました。ありがたく感謝の気持で一杯でした。後日この事は、荘内町公報始め、朝日新聞、毎日新聞、南日本新聞に明るい記事として掲載されました。歳月の流れと共に親子協議会が主体となったようです。十周年の行事として、子供の日には、荘内町公報に、第十回西諏訪子供会として大きく取りあげられました。三十年すぎた今日も、尚記録はつづけられ、相当な量になっています。この記録簿は西諏訪協同班の歴史であり、宝物であると思い大事にしています。クラブ員の中には県農家経済記録協力三十年の表彰者のいる事も誇です。平成元年度から山田小夜子様が会長として活躍していらっしゃいます。益々会の発展する事を願いながら、平成三年二月十日、傘寿を迎へた年寄りの思い出としました。

融和クラブの歌　　大池ヒサエ・黒木ツミ　作詞

一、今日は皆さん西諏訪の　　二、融和クラブはよいクラブ
融和クラブの集いです　　善きも悪しきも分ち合い
一人残らず参りましょう　　心あわせて実を結ぶ
そして教養高めましょう　　心も融和で名も融和

「農村用」国語教科書

東京在住　青木キク
旧姓（立野）町区出身

平成二年十一月十二日、天皇、皇后両陛下の御即位の式典が厳かに行われました。このような式典をめったに見ることのなかった国民は、華麗な平安絵巻さながらの古式豊かな生放送のテレビに釘付けにされて感激いっぱいでした。そして新しい時代の幕開けにより、皇室の一層の繁栄と国や世界の平和を心から祈りました。

御即位の式典といえば、それにまつわる思い出があります。

大正天皇のあとを継承されて昭和天皇が御即位になった御大禮記念に、国民新聞社主催の全国小学生成績展覧会があったのでしょうか。私は「綴方」の褒状を頂いております。きっと外にもこんな賞状をもらっている人は多いと思いますから、なにも今更昔のことを自慢する積りはありませんが、昨年の式典の時、思い出して取り出してみました。何度も引っ越したのにも拘わらず、ふしぎによく残っていました。紙は古びて茶色に変色し、端の方から破れかけています。日附は昭和三年十一月十日とあります。

驚くことは、小学生の一作文にすぎない賞状に、肩書の立派な人のお名前がずらりと列記されていることです。あの時代、何彼につけてこんなに大袈裟に権威を示さねばならなかったのでしょうか。何か知ら、こうする事が国家意識を高め、後に戦争につながる思想をかきたてることになったのではないかと考えさせられます。

その作文と並行して思い出されることがあります。当時、高等科の私どもの勉強していた国語の教科書は農村用でした。記憶しておられる方も多いと思います。その中に「私たちの村」という題の長い文章がありました。

受持の高田信吉先生のご指示によるものか、私は「私たちの村、庄内」を丹念に書きました。（その頃、町制がしかれて、庄内町となっていたのかも知れません）町の面積、人口、産業、東西南北へのひろがり、隣村との接点、まるで今の社会科のように記録しました。その外、四季の風景、行事、子どもたちの楽しい遊び、人々の暮らしぶりや人情等々、私は教科書の文章を参考に分かる限りのことを書きました。

一部の商業地域を除いては、全くの農村であった庄内では、

田植え時や、とり入れの頃、又養蚕の時など猫の手も借りたい程忙しくて子ども達も結構役に立ったものです。

今は昔と比較にならぬ程生活が向上し、子ども達はいろいろのお稽古事やスポーツに熱中し、成績を挙げています。村も都市もさほど違いがなくなりました。

「農村用」の教科書は何時まで続いたのでしょうか。一年生の、ハナ、ハト、マメ、マスの読本は、昭和八年に、サイタ、サイタのサクラ読本に代っています。多分、その頃廃刊になってしまったのでしょう。

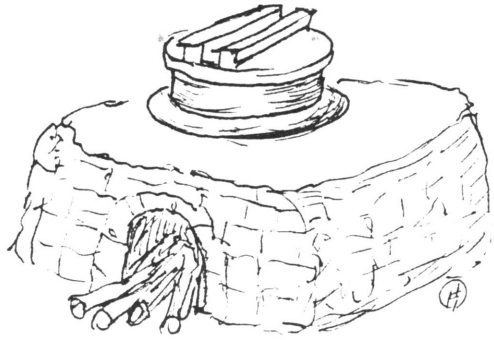
ところで、私の書いた二十枚近い綴方は、長すぎるから別の題材で書いて来いと先生に言われて、内容を書き直して提出したのが前に書いた綴方です。

その綴方がどういういきさつで新聞社に送られたのか、外にもそのようなことがあったのか皆目わかりません。きっと高田先生の積極的な御推薦によるものと思われます。その年の卒業式（終業式）の行われた時、私は校長先生から賞状をいただきました。

私達は生きている間に二度も、御即位の式典を仰ぐ事が出来ました。大正、昭和の中で長い日本史の中の特筆すべき事柄を体験出来た年代です。

遠い日に、かけがえのない思い出を残して下さった高田先生に感謝する事は、申すまでもありません。そして私はもう一度、あの「農村用」の国語教科書を読んでみたいと思います。

これが初めて、ふるさと「庄内」を客観的にみつめるきっかけになったのですから。

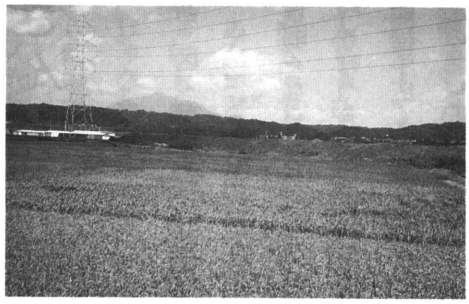


マルステンとシャグマンケ

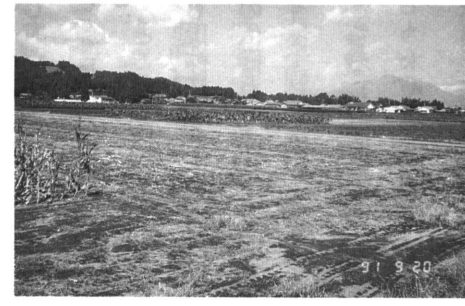
川崎　福留　ハツ
旧姓（木ノ下）

昔、母モリがお盆になると、よく私達を連れてマルステンの処へゆき、ナスと砕け米等を供えて祀をしていました。

マルステンと言う言葉を使いましても判らないのではと思いますが、川崎周辺の人々には耳馴れた言葉です。それは川崎橋より安永橋寄りの中間の処に王子川原と言う処があり、その辺をマルステンと呼んでいました。話ではそこに王子権現の祠堂があったと言われていますが、私は覚えていません。唯石柱があり、そこへ毎年供物をもって行った記憶が残っています。摩利支天を祀っていた処だそうです。そして私の家の木ノ下家が司どっていたと聞いています。しかしいつの頃か氏神サンの処へ石柱を持って来られた様です。私も嫁に行ってこっちには長く居もさんでしたので詳しい事は判りません。又うちん祖母マサヨが私達に聞かせていましたが、今の母智丘の農業試験場の処辺をオロン谷と言っていました。其処に島津どんの馬を養っちよる牧場がありまして年に一度栫に入れる時には（馬寄せ）「シャグマンケ」といって、そん意味は判りもさんが、島津どんの殿様が行列して見えられたそうです。そして奥方も付人を従えて駕に乗って来られたそうです。それは賑やかなもんで一つの祭事だったと言われ、皆んなして見物に行ったもんぢゃしたげな。庄内、山田、志和池の若け者衆が皆んな出っ馬入れんときにゃ「チェッソチェッソ」とはやしゆ掛けつ馬を追い込む姿はソラー勇ましかったもんぢゃしたげな。



馬寄せ場跡



マルステン跡地

㈱「シャグマンケ」とはシャグマとは赤く染めた白熊（ハグマ）の毛またはそれに似た毛髪とありますので維新の頃の武将が頭にかむっていた頭髪のいでたちの事で武威をあらわしていた装の事ではないかと想像されるのでそれを模してシャグマンケと言ったのではと考えられます。

菓子野ハナヨさんとの昔話

西区　菓子野　美和子

ハナヨさんはただ今八十才。足は弱くなられたが、頭はしっかりしていて話し出したらおしゃべりはつきない。息子さんの菓子野文二さんは酪農家で、五十頭程手広く営農されている。

昔を語る会員が、昨年ハナヨさんのお宅近くに、昔、かくれ念仏洞があったというのでお伺いしたことがある。そこで昔を知るハナヨさんに昔を語ってもらった。

。

昔かいな、こめんかとっかい、あたいげん氏神様のそべ、ふとかむっの木があいもしたが、そんふとか木してがまがあっせえ、そうなぁ四畳半位じゃしたろうか。そん、むっの木の根ばいがこげん（直径二十糎）ふとし、がまんまんなけ出つおいもした。穴はじょじょな太かがまじゃひた。前田用水路ん支線がそこんそばを通いもしたので、溝をひっこえんなそんがめないけんごっなり、そいかい土ぐえがして、だんだんこもうないもした。金太じ様（はなよさんの祖父）の話しでは、昔、親様をおがむこた出けんかったげな。じゃかい、わからんごつがまんかくれっ、念仏を唱え、外にゃ見張りん人をたてっ、ッナをひっぱっさえ危険ぬ知らせもしたげな。そげんむっかしかったっじゃひげなど。今はあいがてこっぐわひな。

あたいげにゃ、今、鏡が仏様のときあいもしと。あいがなんの神様か知りもさんじゃひたら、長友久代さんの家の炊事場んたねもあいもした。もう久代さんも亡くなっさえ若い人にないもしたで、どげんなっちょいもそか？　続山さんもこんかがんのこちなくわしか人で、〝こん鏡があっ所は先祖もとじゃったっじゃひと〟と語っくれもした。長岡きよのばさん（亡き人）の話では、昔、ほとけさあを母智丘にもっいたっ焼かれ、仏様にかわる鏡をもろっ、先祖様んうつし方があったっじゃひげな。どこん家も先祖がまつっあったっじゃひじ、どこん家も鏡なあったはっじゃひとおな。きょのばさんとこじゃ氏神様んときなおしちょっち聞っもしたじ、あたいも氏神様んとき鏡ぬ入れちょいもしたどん、雨にぬれもすで家の仏様といっしょん所で、おがましてもらっちょいもすと。

そうそう…、あんがまはな、まこちおじか所じゃひた。人は通りもさんし、うす暗ろして、むっの木ん根が出っおいもした。うちん人（故菓子野栄二）は、お客さえあいさつが悪かったち、

長女てる（猪俣てる）次女いね（田畑いね）は、がまん木ん根んつながれっ、まこちおじ目にあいもした。うちん人はあそこん子どま、まこちしっけが出来ちょらんと人から指をさされんごっ育てんないかんちゅっさえ、あんがめつれっ行かれもした。そげんして育てたもんじゃひたど。あたやそいがまこちぐらしかひたが、昔はどこもきびしい躾をしもしたなあー。

一ケ月前、小箱ん入った虫くれの本が見っかり、家中でなんじゃろと話しておいもす。のの様の奥かい出っきもした。あたいは子どんの頃かい見ていたもんの、開っこっもしもさんじゃひた。そんつを子どんが鳥集さん（鳥集忠男氏）とき持っいきもしたげなどん、あそこここボロボロで読めんかったちゅうて持っ帰りもした。どげな大切なもんじゃしたろかい？　あたいは不思議な気持っておいもす。

また、前田さんちゅう人もえらい人じゃひたなあ。関之尾かい谷頭を通っ崎田ん上づい田圃んしなさって、そんおかげでこんへんなみんな田圃んないもした。あたいどんな田んぼちゅうもんがねかひで、粟や野稲をたべちょいもした。上ん出水で、やっと下んたんだけは少しは田んぼじゃひた。ずるっこんへんな畑じゃひたがな。用水路が出来もしたので、半分は前田さんにあげ穀（水の代金）して、やっとこん頃買うこっが出来、自分の田んぼんないもした。

美和さんな三原先生のこっ知っちょいやいもすかい？　あたいはあたいげん墓めえりいた時は、必ず三原先生のお墓に線香をとぼさんことはあいもさん。亡き菓子野与志実（菓子野宗一さんの祖父）あんさんの名はな、三原先生がつけっくださったんじゃひど。仲助ぢ様（私の主人の祖父）はな、三原先生に、そりゃ大変むぞがられっ、お世話んなったんじゃひげな。三島通庸さんちいうえれ人が、三原先生を鹿児島かいおつれして、始めっ菓子野ん学校をつくっくださったっじゃひな。こん学校をうちん金太ぢ様も出たんじゃひげな。花香をとっいた人は新地つとむさんじゃひた。つとむさんがけしんみやひたかい、今は菓子野校区が六月にお祭りし、三原先生に感謝しておいもす。三原先生のおうちは、みんな若死んで、だいもおいもさんがな。菓子野の墓地んな七っの墓石があいもしてなあ、そん墓を菓子野地域の人がみんなで大切にお守りしておいもす。

先生の奥様はな、ふたえに腰が曲っておいもした。先生のうち（菓子野公民館の所）を通いもす時は、「先生っ」ちゅっさえびんたをさげっ通いもすと、それはそれはよろくっくいやいもした。えらい先生じゃひたもんな。ありがたいこっぐわした。

私が子供の頃、聞いた話（その一）

宮崎市在住　長友荘二
（千草出身）

宮崎の地にあって、庄内を偲びながら私が子供の頃、私の伯父や近所の古老から聞いた明治時代の話を書いてみます。

一、西南戦争で戦死した永山篤明という人

西南戦争で戦死した庄内郷五十六名の中に永山篤明という人がいます。この人の住所は庄内天神馬場の現郵便局の向いにあったそうです。（現在はどうなっているのでしょうか）

古老の話では、この篤明さんは熊本、延岡方面の敗けいくさで鹿児島に逃げる途中、実家に立寄り、親兄弟に訣れを告げ、門口を出たところを官軍兵士四、五人と出合せ、斬合いの末、家の前の道路上で戦死したとのことです。

二、千草のぶげん者（財産家）高橋どん

この高橋どんの屋敷は、臼杵暁さん（故人）の西隣りだったそうで、鹿児島から都城島津領に移った鍛冶職が先祖のようです。

この人は無学文盲でしたが、なかなかの知恵者で、ある日、山田町谷頭でわけもん（青年）から手紙を読んでくれと試され、すこしもあわてず、わざと逆様に読むまねをしたそうです。

青年が「さかしんじゃ、おじさん」と言うのを待っていた様に「おまいが方が、おいよっか、よう知っちょらい」と笑って手紙を返したという面白い話があります。

前田用水路開通以前は菓子野原台地（野首、茶屋原を含む）は山林と原野で、耕作地にからいもを栽培していたそうです。

ぶげん者、高橋どんには下男、下女が五、六人居たそうですが、この高橋どん、いつも知っておっても知らぬふりをする太っ腹のところがあったそうです。

からいも掘りの頃、この下働きの人達が掘り上げた薯を余分に報告すると「そら、どっさいとれた」とほめ上げて焼酎を振るまっていたそうです。

三、体験に基づく昔の農作業

夏の夕焼、川越して待て。秋の夕焼け鎌といで待て。こんな諺がたくさん残っているのは皆さんも聞いていると思います。

私の伯父は、菜種の種まきの適期を「朝起きてほーっと息を吐いてかすかにほけが出るときがよか」と体得していたようです。

（次号に続く）

庄内小空爆の日

都原町在住　橋口利光
（西区出身）

昭和二十年八月六日、広島上空に閃光が走ったのは午前八時十五分だったといわれる。

その日、その時刻、小生は牧ノ原のカライモ畑にいた。横市の高等科の男生徒十余名と草取りに来ていたのである。当時、高等科の生徒は長びく戦争による男手の不足を補うため、特に戦死者の家庭、出征軍人の留守家庭の農作業の加勢によく出ていたものである。夏休みに入ってからは、地区担任の引率のもと町内全域にわたりほとんど連日の出動であった。

記憶は定かでない。十時頃だったか、突如、都城上空に異様な一機が現われた。双胴双発、まさしく噂に聞いたロッキードP38に紛れもない。アメリカ空軍の偵察機である。朝から暑い日だった。サンサンと照りつける夏の太陽に銀翼が不気味に光っていた。トンビの舞いにも似てゆっくり旋回していた。高度は八百か、或いは千か。二回ほど繰り返すとその姿は南西の空に消えていった。慌てて杉林に潜ませた生徒達と再び作業にとり掛ったが、なぜか嫌な予感がした。

P38が去って小一時間過ぎたろうか、突然空爆の音がはじけとんだ。懸念のとおり、標的は川東の川崎航空らしい。黒いグラマンの数機が編隊で超低空を山かげに突っ込んでいった。即刻、口早に注意を与え生徒達を家に帰した。小生は砂利の入ったでこぼこ道を、大根田の方向へいっさんに自転車のペダルを踏んだ。月野原からすさまじい暗褐色の煙、紅蓮の炎が望見された。航空機製作所に動員中の都城中学の弟達の安否が気遣われた。乙房経由で帰りを急ぐ。途中、またもグラマン襲来。しかも飛行士の黒い眼鏡が確認できた程の頭上をである。一瞬、総身の毛が逆立つのを覚えた。人家を遠く離れた野中の一本道。必死の思いで切り立った土手に飛びついた。

Tさんの屋根の上から庄内方面の黒煙を見つけ鼓動が早まった庄内も遂に空爆に遭ったようである。町並みだろうか、まさか学校ではあるまいとしきりに勝手読みにつとめるが、数か月前の職員間の話題がひょいと頭をかすめた。それは学校への空爆はあり得るかというもの。ある先生は教育施設へは絶対あり得ないと胸を張る。ある先生は、「いや、軍の大隊が駐屯している本校は、当然爆撃の対象になり得るのでは」と、口角泡を

飛ばした。数ケ月前から校舎の一角に糧秣関係の部隊がはいっていたのである。

肬（アザメ）にさしかかると懇意なMさんに出会った。彼も自転車で汗ぐっしょり。町の様子を聞こうとすると、「シェンセイも、庄内の学校はチングヮラッぐゎんど」と、例の愛嬌のある一オクターブ高い声で先手を打たれた。

庄内橋を渡ると白色に変った煙は小学校だとはっきりした。周りはどうか。清水どんの巨木群も健在、すぐ下に位置するいぶせきわが家もまずは安泰。願心寺の建物も、ことさら目を引く持永どん、熊原どんの土蔵の白さも変わりはない。町区の公会堂横の坂を一気にかけ上り、徳永どんの十字路で一息入れる。山元菓子店の前あたりに町の人が集って大騒ぎしているのを見た。（註、後記）

ふと、我にかえった私は、お軍神の森に佇み呆然としていた。ブスブス燃え続けてはいるが、講堂や二階校舎はまったく原形を止めてはいなかった。運動場周辺の数棟を残すのみで用務員室も宿直室もすでに廃きょ。改めて油脂焼夷弾の威力にあきれ返る思いだった。

講堂、そしてそれに連なる二階建ての校舎は建築後まだ日は浅かった。小生らの小学生時代に建てられたこの講堂は、県下一はおろか南九州随一という人までいた極めて評価の高いものであった。町民の等しく誇りとしていたこの大建造物の、あまりにもあっけない消滅は痛恨の一語に尽きようか。

講堂で想い出す。十九年、高等科の生徒総がかりで模型飛行機を作ったことがある。竹とわらと紙で戦闘機実物大のものを作り、志和池の飛行場までかついで運んだものである。講堂の中での作業だったが、完成後、外へ出す段になった羽翼の部分が出入口からどうしても出ない。苦笑しながら解体し直したこともいまは懐かしい。

また、二階の南向きのすこぶる日当りのよい三坪余りの物置は、当時小生の専用部屋であった。教頭時代の今は亡き木之下政義先生が、ありがたいことに小生の自習室にとわざわざ便宜を図ってくださったものであった。

ともあれ、その講堂も今は無い。（参考写真一〇二頁）

註「大騒ぎ」というのは消火のためにかけつけた消防団の注水準備中の事である。その様子を見守る群衆の中から突然「来たど、来たど」と大声が発せられた。時が時だけに群衆は敵機来襲とばかり必死に待避壕へ走った。ところが「来たど」の声は注水ホースに水が流れて蛇行して動くのを見た群衆の喜びの叫びだった。

残念至極な思い出（その一）

町区　徳永幸男

昭和二十年九月八日新京の南嶺自動車廠に於て作業第七大隊（一、五〇〇名）が編成され、三か月間戦場整理をして黒河・ブラゴウェンチェンスクを経由・一週間後にはウラヂウォストックから日本へ帰国するとの事であったが、貨物列車は西へ西へと走り続けた。苛酷な惨酷なシベリア強制抑留の始まりであった。

同年九月二十五日シベリア鉄道の或る駅からアメリカ製の大型トラックに乗せられ、チタ地区のバレイ金山（露天堀）に到着した。

一、ポツダム宣言の恐怖と生地獄

終戦後、いつ頃からかは定かでないが、ポツダム宣言によって日本人の男性はすべて去勢され、地球上から大和民族を皆無にするとの噂が流れていた。バレイ金山に到着早々入浴との事で何人かずつ小室を通って向側へ出て行かなくてはならなかった。小室で何があるのか待っている者は全々わからないが、全員が去勢の恐怖にさらされていた。いよいよ入室の順番が来たので残念至極と恐る恐る入室してみると中にはソ連の若い女軍医が五名いて笑いながら話し合っていた。女軍医の指示で裸になりバンザイをさせられた。バリカンで腋の下と局部の毛を女軍医達が刈り落した。床には前の人達の毛がたくさん散らばっていた。

ほっとした。去勢ではなくて毛虱（けじらみ）の予防対策であった。バレイ金山では極寒と苛酷な強制労働・食糧不足のため栄養失調・発疹チフス等で毎日多くの同胞が十人・十五人とバタバタ倒れて行った。不幸にして亡くなられた方の遺体は大きな木の箱に四人ずつ収めて手車に積み墓地へ運んだ。名札を付け頭を交互にして雪の中に仮埋葬し、雪が解けはじめる頃地下五〇糎位しか掘れなかったが全員の頭を母国日本の方に向けなおし正式に埋葬をしご冥福を祈った。入ソして初めての真冬は人間が最低生活出来得る限界以上の苛酷な惨酷な筆舌につくしがたい正に生地獄であった。　以下次号へ連載

略歴　昭和二〇年三月、現役入隊後、甲種幹部候補生として遼陽、関東軍歩兵第一幹部教育隊に入隊。新京にて終戦を迎える。終戦後、ソ連に抑留され、昭和二四年十月三十日、無事復員（舞鶴）

敵機に命中す

吉之元町　吉田米夫

昭和十九年四月、海軍一等水兵に進級した私は、佐世保海兵団で転属を待つ。そして四か月後、大島防備隊対空砲台へ配属された。

ここでは専門の通信はいかされず、敵機の来襲に機関銃で応戦するのが私の任務である。

この頃、一般兵士には内密にされていたが、すでに日本艦隊はミッドウェー沖海戦で惨敗、アッツ島玉砕、南方軍（陸軍）は次々と撤退の戦況であったことを後になって知った。

昭和二十年に入って遂に沖縄は玉砕、沖縄基地から飛来するB29爆撃機は、グラマン戦闘機に護衛されわがもの顔に本土をじゅうりんするのをみると悔しさを通りこして頭に血がのぼる。

私の任務は、対空見張りと指揮所伝令として隊長命令を各砲台へ大声で伝えるのである。

昭和二十年三月〇日、私は指揮所で十二糎の特大双眼鏡に眼をこらしていた。

東に眼鏡を回した時、かすかに眼にうつったのが二、三十機の敵機編隊だった。

ただちに隊長に報告し、隊長命令「敵機北上中、見張りを厳重にせよ」を他の砲台へ大声で伝える。

何秒たったか、急に「戦闘準備」、「90度方向、発射用意」の号令が飛ぶ。一瞬、敵の数機は燕の宙返りの様に急降下を始める。「撃て」十二の砲門が一斉に火を吹いた。

敵機から卵大の塊が二、三個ずつ放り出されたと思うとヒューン、ヒューンと頭上をかすめて海面や海岸線に落下し、爆発、爆風で鼓膜も破れんばかり。機銃掃射に移った敵機に、わが方も必死の応戦、弾丸の続く限り撃ちまくり砲身は真赤に燃えるすさまじい戦闘が数分間続いたろうか。

突然、敵の一機が黒い尾をひいて落下を始め、赤い焔とともに空中分解したのである。

「やった」、「命中だ」各砲台から歓声が上った。

意外や意外、空中には花が開くように落下傘がふわりふわり舞い降りて来るのである。

敗戦を前にしたわが特攻機は必死必殺であり、落下傘などもちろんつけていなかった。

人命をだいじにする米国が勝つのは当然だったろう。

私の歩んだ道（その一）

平田　和田盛行

昭和十一年、祖先の田畑を必死で守り続けて来た父が、不景気のあおりを受けて農業を断念し親子五人で福岡県大牟田市に旅立ったのです。

父の仕事は、沖仲仕として貨物船からの積荷の積みおろし作業でした。

夜遅くなって帰る父の疲れた顔を見る度に親の有難さが身に泌みたものでした。

私は、その時が一年生三学期でしたので言葉の違いから友達にも馴染めず、生活習慣のずれから泣きたい様な転入生活が続いたのを憶えています。　支那事変の最中とあって、現在のような社会保障のない労務では将来が不安であるとの考えから父は一年足らずでここを辞め、同じ福岡県の貝島炭坑宮田町大之浦に移りました。

毎日、夕方になると父は共同浴場に私を連れて行ったものでした。石炭で真黒になった父のからだを洗ったり、洗ってもらったり、水をかけあってふざけた楽しい思い出であります。楽しいことは長くは続かないものです。

貝島小学校の生活にも馴れたある日、家に帰ってみると父に召集令状（赤紙）が区役所から届いていました。

父は、落着いて家事や子供の事など心の整理もできないまま、昭和十三年五月、門司港からそそくさと出征しました。

子供心にも別れが辛くて母の胸で泣いたのが生々しく蘇って来ます。

神も無情と言いましょうか、運のない父は半年と経たない同年十月、江西省徳安県にて戦死の公報がありました。

私は小学四年でしたが、母の悲嘆、今後の生活の苦労を考え妹達の為にも私がしっかりしなければと決意しました。

庄内に帰ってからの母親は、朝は夜の明けない中から夕方暗くなるまで農業に精出し、夜は夜でむしろ編みの仕事に頑張りました。私は勉強の合い間に藁を打って加勢し、編み終ると自転車で都城駅前の卸問屋に持って行き、僅かな賃金をもらって帰る日々でした。

たまたま主婦之友社の作文募集に応募した作文が「けなげな靖国の遺児」として特選となり、全国で九名の児童と共に東京駿ケ谷の本社で表彰されることになりました。（次号に続く）

チャンピオンになりたくて

乙房　乙丸　幸一

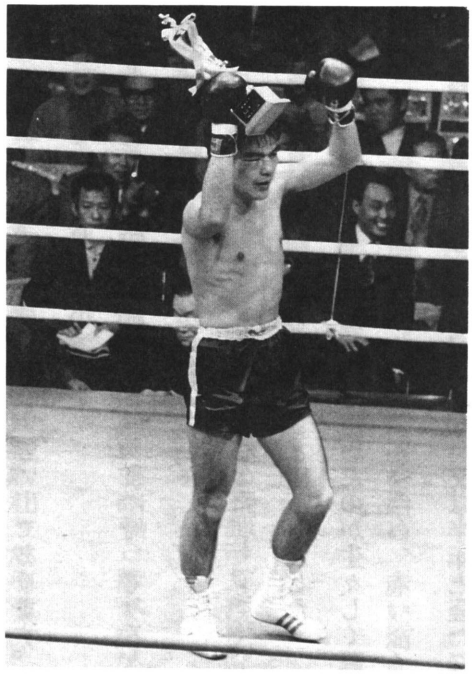
今から二十七年前、東京でオリンピックがあった年に高校進学を勧める親の反対を押し切って、上京するチャンスを得た。東京に行き半年位たち生活や仕事に慣れた頃、自分の念願だったボクシングジムを訪ねて行き、早速入門することにした。

ジムは全国から来た五十名位の練習生が一生懸命練習をしていた。ボクシングは男が一対一で戦う過激な格闘競技である。はたして自分に出来るのか不安をいだきながら練習をした。練習は朝六時から一時間位のロードワークに始まり、八時から五時までは各自仕事に行き、夜は六時から八時まで毎日厳しい練習の繰り返しだった。練習生は今では半分に減り、私は運よくプロボクサーのテストに合格することができた。

昭和四十一年十八才の後楽園ホールでデビュー戦に勝ち、四十四年には全日本ランキングボクサーになることができた。四十五年には一年間の海外遠征をし、四十七年には静岡市で全日本チャンピオンに挑戦したが惜しくも判定で敗れて、次の試合に向けて練習中に左目の負傷により、四十八年現役を引退する事になった。

自分の夢だったチャンピオンになれなかった事は残念だったが、八年間のプロボクサー生活の思い出としては、四回戦ボーイ時代から十九連勝できたこと。ガッツ石松選手と試合をして勝ったこと。ハワイ、オーストラリア、韓国等に海外遠征が出来たこと。また世界チャンピオンが常に四、五人いた日本ボクシング界の全盛期時代に私も一緒に戦うことができた事など、青春時代の良い思い出として私は心の中に残して置きたい。

現在は宮城県出身の妻と牟田町で焼き鳥「一幸」を経営している。今度はこの道のチャンピオンを目指して頑張りたい。



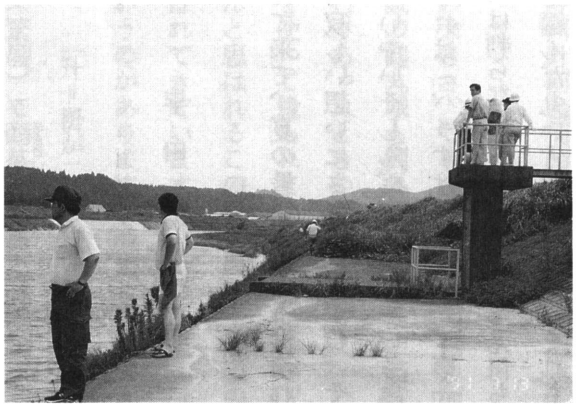
元全日本ジュニアウェルター級一位の乙守幸一

遊、遊庄内川

西区　蒲生宏孝

庄内川は、私たちが小さい頃、金持のうちの子も、そうでないところの子も、頭の良い子も、ワルガキも皆共通の遊び場として唯一のところでした。そして、川は、みんな平等に楽しみを分かち与え、さまざまなことを体験させてくれました。

こんなすばらしい庄内川に、私たちはいつの頃からか、自分の子供達を川で遊ばせることなく育ててしまいました。スポーツに励み、ファミコンなど、あり余る遊具に熱中する子供たちですが、どうも何か物足りなく、たくましさに欠けているような気がしてなりません。



庄内川を活性化に生かしたい

「元気づくり委員会」は、「青壮年層の立場から、庄内地域活性化の方途を探ろうと、平成二年の暮れに発足しました。豊かな自然環境に恵まれ、むらの開発のために苦労した先人の足跡が、たくさん残されている私たちの村。更に活性化を願う一助として、私たちは庄内川をとりあげました。子供たちを庄内川で遊ばせ、川に親しむ機会を与えなかった親の償いにもなるでしょう。

庄内川で楽しく遊べて、泳いで、年中魚が釣れて、堤防沿いには自転車が走って、川原をつくり魚を焼いて、飽きたら関之尾滝に庄内めぐりに、都城観光のメッカになる下地、条件はそろっているようです。

そして観光ルートの開発は、地場農産物の工夫改善を促し、史蹟めぐりは、先祖への感謝の念を強くしてくれることでしょう。遊遊庄内川を思う時、夢はますます広がります。

7月13日、元気づくり委員会では、両岸を自転車でみてまわった

バラすけ

平田　浜田　義武

近頃は河川敷が整備されて来て、夏の暑い季節に子供連れで楽しむ場所が少なくなって寂しい想いにさせられますね。そこで昔ながらの魚と遊んだ、いやいそしんだ忘れかけている魚獲りの法を教えましょう。それは「バラすけ」です。先ず第一にバラを揃える。現代っ子には判らないでしょう。父ちゃん母ちゃんにお聞きしなさい。竹で編んだ丸い竹製の器です。それもバラの縁を二重にしたものです。そして次は木綿の布が一枚、バラを覆う位の広いものを準備します。その布のまん中をタテに一〇糎位に裂くのです。準備が出来ると今度は味噌と米糠を手ごろに田の泥と混ぜ合せます。味噌味が逃げない様に泥を混ぜるのです。それをバラの隅の方に練り合せたものを固めてぬります。準備が出来ると布でバラの表面を覆ってしばります。フチが二重になっているのは布がバラけない為です。そのバラを川の中に沈めるのです。水深約二〇糎位の処が最適でしょう。その時注意しなければならないのは布地がチラチラしない様に端をしばったヒモにはめこみます。そして布の中心の裂いた処を流れに向ってタテにする事を忘れない事です。そしてバラの周囲の処を砂地とバラが平行になる様掘って沈め布の四スミの上にバラが流れない様に少々大きめの石を置きます。サアこれで出来上り、あとは二〇分から三〇分位川原に寝ころんで流れる雲をみつめ歌でも唱いましょう。時間が来て、ソーッと近づくと白い布の下でハエ類の魚が二〇匹から三〇匹位踊っている姿が見えてくると、それは楽しいものでした。

(注)ヌカは炊ったものがかんばしくてよい。

昭35. 8　於庄内川バラすけ風景
（池田シズさん撮影）

枡（ます）

川崎　前畑文利

「枡」！　近年は殆んど見る事は出来なくなりましたが、昔は各家庭になくてはならない必需品でした。

今日では、枡で量るいわゆる容積より、重量でもって物を計る事の方が多くなっていますが、三、四十年位前頃までは、米や大豆等の穀物は何石何斗何升何合何勺等とその量を表はしていました。

殿様の時代、その領地の大きさ、いわゆる禄高も何拾万何千石と言っていました。都城の鶴丸城も例外でなく、江戸時代の終りには、三万九千六百石であったときいています。

この容積は、すべて枡を使って量られていたものですが、神代の時代から使はれていたと思はれるこの枡、農業や商業の繁栄の言葉としても広く使はれてきています。

「春夏冬二升五合」というのがあります。つまり春夏冬＝秋がないので商（あきない）、二升＝枡が二つだから枡々（益々）、五合＝一升の半分で半升（繁昌）で商（あきない）益々繁昌と読みます。

其の他にも色々ありますが、農民をおだてて働かせる為に出来たものか「枡盛百枡」とか「石盛百枡」とかいうのがあります。また逆言に「水呑百升」とか「どん百升」もあります。

今日では「百升（百姓）」と言はずに「農家」と呼び方も変って来ていますが、「枡」は百姓と切っても切れない関係にあったのです。

また、枡の材質ですが、昔なら木や竹に決まっていましたが、今日ではプラスチックやガラス、ステンレス、鉄板等、色々有るようです。

昔は目分量で作っていた料理も、今では大さじ、小さじ、カップ何杯と言った具合に、やっぱり「量」というものは大事なもので重量だけではいけない場合もあるようです。

型については、現在でも正方立方型が最も多いようですが、小さいものは円筒立方型が多く見られるようです。

何にせよ大昔から使われて来た枡、枡でなければ果たせない重要な役割を持ち続けています。折目正しく四角にしたり、優しく丸く包み込んだり、人のあり方を教えているようです。

祖先から伝わっているすり減った枡、家の宝として大事にして、祖先を敬い、人の道を学びながら、後世に伝へていきたいと思います。

暮らしの知恵

宮島　川畑　真理

◆やけど　傷

◎アロエ　やけどの特効薬、油、火など

中指の場合、すぐ水で冷やし、アロエの葉をひらき、中のゼリーを軟らかにし、それを中指を巻いて半日そのままにする。二、三日汁をつけていると傷あともなく治る。

◎生卵の白身　やけど、火熱湯、蒸気などの場合水で冷やし、白身をつけると痛みが止まり、続けると跡も残らない。

◎よもぎ　血どめ　少々の切傷は、よもぎを手でもみ軟かにして傷に当てて押えておくだけで止血します。又卵の白身も血どめによく、白身を小さく切った和紙につけ、傷口を中心に重ねて張ると出血が止まり、和紙が渇いて包帯の役もします。

◎ニラ　切傷にニラを小さく刻みそのままか又搾り汁でもよくこれを棉花に浸して切口に当て包帯する。

◎ムカデ油　傷の手当に生きたムカデをビンに入れて食塩小さじ一杯位入れて、更に菜種油一合程入れて貯蔵して置く。これを切傷につけると、化のうを防ぎ不思議に早く治る。

◎とげ　とげが奥深く刺されとれないときは、梅ぼしの皮を患部に張りつけておくと自然に出て来ます。

◎竹のとげ抜き　そば粉を酢で練り合せて、トゲの上に乗せておくと出てくる事不思議です。

◎くぎをふんだとき　傷口を消毒して「ニラ」を金づちでたたき傷口につけて布でくくると効きます。

◆薬草

◎アロエ　ギリシャの古名で、その語源はヘブライ語のニガイ(*allal*)による。やけど、ひび、あかぎれには葉の汁を外用。せき、ぜんそく、痰にはおろし汁を服用。神経痛、リウマチ……おろし汁を貼る。胃腸病　葉を刻んで飲む。二日酔によろしい。

◎イチジク　「無花果」果実の中に花がある。痔疾、下剤殺虫イボとりに用うる。

◎ウコン　鬱金、郁金、中国では薑黄(キョウオウ)。子宮のけいれんを治す。体内に滞っている古い血を体外に排出させ、化膿したはれものにも効く。利胆作用があり胃もたれ、肝炎胆石症カタル性黄疸に用うる。又沢庵漬、カレー粉の染料。十一月頃の黄色の強いものが良品とされる。

（生活便利百科より抜粋）

読者よりの便り

去る二十一日、拝顔の栄に浴しで、五十有余年の歳月が瞬時に消えた思いが致し、誠に嬉しく懐かしい限りでした。久しぶりに鯉料理のご馳走を満喫させて頂き、誠に有難うございました。心から厚くお礼申し上げます。

拙稿掲載の雑誌をお届け申し上げますので、何かのお役に立てば幸甚の至りと存じます。

神奈川県茅ケ崎市芹沢三〇二―一二　万代久男

庄内の昔を語る会の皆さん、毎日元気で研究その他に活躍の由、御喜び申上げます。

早速、会誌「庄内」拝見致し、色々と昔のことなど思い浮べています。

今回は、隠れ念仏の始まりと好き焼の始まりの話を送ります。御利用下されば幸いです。

宮崎市小松台東町五―一七　長友壮二

「庄内」第二号、ありがと度うございました。次第に充実のゆく内容に、深甚の敬意を表します。歴史は小さい、身近な発掘の上に成り立つものと思いますが、大変大事なことを一つ一つ積み重ねられることを期待します。

ほんとうに楽しく読ましてもらっています。第三号の発刊を心から期待いたしています。

宮崎市大橋一―一五四　吉野忠行

編集委員の方のご苦労は勿論ですが、各方面の寄稿者の方が庄内に対する愛着のある思い出など沢山投稿していられるので、大変興味深く読まさせて頂きました。

都城市金田町二二四六　幸田久

本づくりは大変なこと、よく二号を刊行されました。こういう本は後になってから偉力を発揮いたします。刊行を心よりお祝い申し上げます。

拝見させて頂き、私どもの民俗関係の研究にも参照させていただける項目がありまして、うれしく存じます。

宮崎市大塚台西一―十一―二　山口保明

創刊号に続いて益々立派な記事も多く、庄内を愛される皆様

のご熱意を感ずることでした。永遠に庄内地域のかたりべとして継承して下さい。忘れていく郷土の歴史、詳細に掘り起こして下さって、過去を思い出し、また郷土を知り、興味深いもの……。会長さん中心にメンバーの方々、資料、写真集め、執筆作業と本当にご苦労さまです。旧知の方々が沢山おられますが、よろしくお伝え下さい。

宮崎市月見ケ丘四―一二―一一　松岡　優

私は、昭和十二年から三年間、又終戦の年から四年間、庄内小に勤務させて頂きました。

家庭訪問で歩いたこの道、あの家、たんぼ、畠等次々に眼に浮んでまいります。

そして、その道や家のわきからあの当時のかわいいお子さんがふっと現れて来るように思われてなりません。

この庄内誌を通して同郷の人たちの団結と今後のご発展を心からお祈りします。

新宿区南榎町三一　青木喜久

過日、帰郷の折、御元気な姿に接し嬉しく思いました。

貴男の通称落しの水神サーの記事は貴重な発見であり、私も深く感動して読みました。今後の御活躍を祈念します。

大阪府南河内郡河南町大宝四―九―四一　池田義雄

講堂の焼跡にて
昭和24年度庄内小職員

編集後記

回を重ねる毎に、庄内町民の関心が高まり、古い貴重な資料、文献や埋もれた懐かしい写真が発掘されること、会員外の方の投稿も多くなりつつあり、喜びに堪えません。

編集部が願うものは、美文でも名文でもありません。素朴な文章、民情の直接伝わる泥くさいものこそ価値があると思って編集に当っています。

文を綴ることは誰しもヨダキイことです。編集部から取材に参りますので話題を提供して頂きます様、お願いします。

なお新企画として「まなびや、いとしご」のタイトルを設け、昔の懐かしい先生方に登場して頂きました。

平成三年十月吉日

編集長　臼杵徳光　坂元徳郎
副編集長　木幡敏正　片ノ坂登
馬籠良孝　黒木聖
清水省三　和田吉雄
山元昭平　池田シヅ

平成三年度　庄内の昔を語る会会員名簿

No.	地区	氏名	TEL
1	関之尾	肥後重幸	三七―二〇三五
2	西区	伊地知義夫	三七―二〇九九
3	〃	菓子野美和子	三七―一八九一
4	〃	清水省三	三七―一八一四
5	〃	野海正治	三七―一四八四
6	〃	藤村正久	三七―〇三〇八
7	〃	山口耕二	三七―〇三四九
8	〃	池田シヅ	三七―二一三二
9	〃	津曲弘美	三七―一四八六
10	〃	奥田正明	三七―〇三七三
11	〃	蒲生芳子	三七―〇二九三
12	〃	西俣富子	三七―二〇六七
13	〃	宮之原重忠	三七―〇五三一
14	〃	藤村松雄	三七―一九六七
15	町区	福崎孝臣	三七―〇一〇八
16	〃	山元昭平	三七―〇六七〇
17	〃	南崎キミ	三七―〇一六四
18	〃	鎌田学	三七―〇〇八六
19	〃	水谷文江	三七―一四七六
20	〃	大河内浩爾	三七―〇五六七
21	〃	井上将	三七―一九〇二
22	町区	太田美智子	三七―〇八四三
23	〃	山元ます子	三七―二一二六
24	〃	前田ケイ	三七―〇三七五
25	〃	坂元清景	三七―二一二七
26	東区	片ノ坂登	三七―二九七二
27	〃	木幡敏正	三七―一六五〇
28	〃	坂元徳郎	三七―〇三五〇
29	〃	椋田泉	三七―〇七七六
30	〃	黒木聖	三七―一六六七
31	〃	新穂照子	三七―〇一〇九
32	〃	立山トミ	三七―〇八五〇
33	〃	帖佐ミヤ	三七―〇〇二一
34	〃	萩原忠子	三七―〇一一二
35	〃	黒木ツミ	三七―二一八二
36	〃	鎌田康正	三七―〇二六五
37	〃	秋永フミ	三七―〇一七四
38	〃	原イツエ	三七―〇三九八
39	〃	黒島昭典	三七―〇二〇五
40	〃	大川原紀美男	三七―二二一〇
41	今屋	鵜島善市	三七―二二六八
42	〃	田村誠	三七―二二七八
43	今屋	花盛林	三七―一六六七
44	〃	鵜島美鶴	三七―〇六五二
45	千草	臼杵京子	三七―一七〇九
46	〃	臼杵徳光	三七―一八五六
47	宮島	今村勇	三七―二九三六
48	〃	坂元庸	三七―一七六二
49	平田	和田輝雄	三七―〇六三二
50	〃	和田吉雄	三七―〇一五七
51	〃	野村君雄	三七―〇八九二
52	〃	和田盛行	三七―二四四六
53	〃	浜田義秋	三七―二四二八
54	乙房	馬篭良孝	三七―〇八〇四
55	〃	乙丸国彦	三七―一二三六
56	〃	宮田孝行	三七―一七二二
57	〃	黒木重俊	三七―二六一七
58	川崎	前畑文利	三七―一〇四六
59	南鷹尾	岩佐フヂ	二五―三五三九
60	〃	吉川一郎	二三―一二三七
61	〃	福村静徳	二四―二四四〇
62	公民館	日高覚助	三七―〇八八八

事務局　庄内地区公民館　TEL　三七―〇八八八

味覚の歳時記（みかくさいじき）

南九州では、昔からこの地方の風土や生活の中で生まれ、人々の知恵と工夫で育まれ受けつがれてきた、独自の味わいをもつ味覚がたくさんあります。そしてそこには、焼酎に合った食べものが生まれ、焼酎を楽しむ遊びが生まれました。この土地の人々は春夏秋冬の旬の味や、自然の味を焼酎とともに語りついできたのです。その美味しいものを表現するとき、「うまい」と言うよりほかに言いようがありません。

やはり「うまいものはうまい。」霧島酒造は、それぞれの地方に伝わる「うまいもの」と焼酎との出会いを大切にしていきたいと思います。

人と風土の醸（かも）すもの。

霧島酒造株式会社

お問い合せ先 本社 宮崎県都城市下川東4丁目28-1 〒885 ☎0986(22)2323
志比田工場／宮崎県都城市志比田5480番地 〒885 ☎0986(22)5001

ガソリン・灯油・プロパンガス・器具取扱店

☎ 37-0121
(庄内店)

徳石石油店

(高野店) ☎33-1516(休日夜間)

結婚祝・七草祝・成人祝・法事等の引出物お返し

記念品
贈答品
家庭用品
花鉢類
園芸用品

陶器のヤマモト

都城市庄内町町区十字路角
電話 店37−0148 夜37−2883

外科・内科・眼科・放射線科

庄内病院

院長 海田紀夫

宮崎県都城市庄内町８６１０
ＴＥＬ (0986) ３７−０５２２

川畑整骨院

（受付時間）
午前８：30～12：00
午後２：30～６：30（土曜日は５時まで）
（但し、急患はこの限りではありません）

都城市菓子野町１０２７２－７
ＴＥＬ (0986) ３７－０１５２

和・洋酒・米穀

リカーショップ

いまむら

都城市庄内町８１６０番地
ＴＥＬ (0986) ３７－００３４

庄内の昔を語る会

会誌「庄内」第３号

発刊を祝します

宮崎銀行庄内支店

婚礼写真、複写、カメラ、写真のことなら

日本写真文化協会会員

社団法人 **山下写真館**

都城市庄内町本町
ＴＥＬ (0986) ３７－０１３８

『だんぜんおトク』
私にも車が買える。

農協マイカーローン

詳しくは、電話なり、窓口で相談下さい。

地域の皆様に
安心と信頼を奉仕するお店

Aコープ庄内

都城農業協同組合庄内支所

都城市庄内町１２６６８番地１
ＴＥＬ（0986）３７－０５５０

信頼と安心のマルヰプロパン

都城マルヰガス㈱　本社・工場　都城市神之山町１８５７
庄内サービス　都城市庄内町１２６６８

庄内　第三号

平成三年十一月一日　印刷
平成三年十一月三日　刊行

刊行
編集　庄内の昔を語る会
都城市庄内町庄内地区公民館
電話（〇九八六）三七－〇八八八番

印刷　有限会社　文昌堂
都城市東町十八街区一号
電話（〇九八六）二二－一一二二番